

粟林子作、丹波與作の與作踊の冒頭に見える文である。蓋し海老屋節踊歌の改作であらう。荒木與次兵衛狂言記「日本女護島の唄は、「よい〜〜〜仕合せ與次兵衛云云」とある。」「〜〜〜」になつてゐる。

あゝいゝ〜〜紙屋の治兵衛、小春狂ひが杉原紙で、一分小判紙ちりちり紙で、内の身代すきやれ紙の、鼻もかまれぬ紙屑治兵衛、なまみだ佛なまみだ(天網島)小春狂ひが過ぎを杉原紙(治兵衛が紙屋の縁で)にいひかけ、一分小判を小半紙にいひかけ、ちりちりに貫すを腰紙にいひかけ、身代すき破れを満破紙にいひかけたのである。

この唄は丹波與作特夜の小室節の與作踊に、「よい〜〜〜紙屋の徳兵衛、房に元よりこひ染めこみの、内の身代灰汁でも割けず、口入頭みて銀四百目を云云」とあると同じやうな構想で、共に隔唄のもぢりである。

酔うたとき酔うたとき、足や千鳥足、はめた谷底殺した山の手、沙汰なし合點ちや(十二段)

増補松の落葉(寶永七年刊)巻四、山谷土手路踊の唄に、「…三谷土手みちな酔うたとき酔うたとき、足や千鳥足、西は田のあぜ、あぶない合點ちや…(源五兵衛、おまん)薩摩歌に、「酔うたとき酔うたとき、とさ」とさ」とある。この三谷土手路踊の唄に據つたのである。

をかざきぢよろしゆ 岡崎女郎しゆ 岡崎女郎 衆

と(丹波與作) 餅竹初心集(寛文四年刊)下巻に、「をかざき女郎しゆ岡崎衆、岡崎女郎衆はいちよろしゆ岡崎女郎衆はいち女郎衆」と見え、流行唄に據つたものである。この唄は寛永頃にも廣く行はれたもので、寛永手家物語(寶永七年刊)巻之一にも、「熱田鳴海の景氣も目前に、岡崎女郎衆はいち女郎衆、いつもの比丘尼もまたひつれ云云」と見えてゐる。

小笹に露のたまられぬ 名古屋の胸高帯は、小笹に露のたまられぬ、始末算用世智辨も(女殺) 松の葉巻五、投節の唄に、「花におく露小笹

遊仙窟に據れるもの

漢文之部

高嶺天に横はり、刀して削りなすか  
うらんのいきほひ、鑿して穿つか  
いがんの形(浦島)

「かうらん」は「高嶺」「かいがん」は崖岸で、水崖の高き處、高嶺雲漢に聳えて、恰も刀にて崖を削り成した勢がある。深谷地に横はりて、恰も鑿で崖岸を穿ち成した形があるとの意。唐、張文成撰、遊仙窟に、「深谷帯地鑿穿崖岸之形、高嶺横天刀削高嶺之勢」。

刀して削りなすかうらんのいきほひ  
十萬里の波立つて伯馬の縦を遺

の露にばれ易きは我が涙。二の文は、妓女小菊が名古屋の胸高帯の美貌は、それに見惚れて檢物物惜しみも人品にこそよれ、花の露小笹の露の如く粒銀をこぼし散じたうなるの意。「なごやむなだかおびしを見よう。女嫌やる高野の山になぜに女松は生ゆるぞや(萬年草)」

當時の流行唄に據つたものであらう。女人は五障深きによつて往時は女人堂まで行かされても、これより高野の靈地に入るを許されなうらんだのである。その許されたのは明治五年四月以後である。

し、二千年の石橋となりんだ  
り(酒吞童子枕書)

十萬里も遠く川波立して流れ、恰も夏の禹王が大洪水を治めて之を河川に落した蹤の礎つて年がやうである、石橋は昔滑にして二千年を経たものであるとの意。夏の禹王は初め夏伯に封ぜられたによつて「伯禹」と云ふ。石橋は露曲石橋に、「此石橋と申すは人間の渡せる橋にあらず、おのれと出現してつづける橋なれば石橋と名を名付けたり、其面僅に尺よりは狭くして苔甚だ滑なり、其長さ三丈餘、谷のそくく深き事千丈餘に及べり」と見え、

「なりんだり」は、「なりにたりに」の變

つたものである。遊仙窟に「十萬里之波瀾、伯馬遺蹤、二千年之板障、深谷帶地云云」。千度見れば千の思きひし、一度見るに一つの面白いこと深しとは、張文成が仙女に契りし詞(酒吞童子)

張文成が仙女と情交を結んだ時の樂しかつたことを云うたもので、遊仙窟巻五に、「千尋千意、一見一憐深、但當把玉子、寸断亦甘心」とあるに據つたのである。

はんあんじん 風雅なる御本性、艶なる御貌、潘安仁が母方の男にも譬ふべかんめれ(酒吞童子)

「潘安仁姿容極めて美であつた人。遊仙窟巻一に、「是女郎何人也、女子答曰、博陵王乏苗裔、清河公之蕃族也、容貌似男、潘安仁之外甥」とあるに據つたのである。今川了俊は「潘安仁が西征賦に云云」とあるは、「貞松は年の寒きに云云」を見よ。

日に衣寛び朝な朝なに帯綴ぶ、愁しみの腸寸寸に断つとは、文成が仙女に別れし恨み(酒吞童子)

織暮の情の切なきに、日に帯に懸へて衣も寛でひろくなり、朝毎に帯も緩くなつた、離別の愁の爲に帯が寸断したやうな堪、無いせつなきを感じたるの意。この文は遊仙窟に出て、張文成が仙女の十娘と契り、その別れるを悲んだ文である。その文に、「日日衣寛、朝朝帯緩、日上唇裂、胸間氣滿、淚臉千行、愁腸寸断」。

# 孝經に據れるもの

家に争ふ子なければ 家に争ふ子なければ 家治らず(纂要太平記) 家に争ふ子なければ 家正しからず(女護身)

孝經・蘇争章に、「父有争子則不陷於不義」  
上に居て驕らず、下として亂れず、醜にあつて能く譲る、これ孝經の本文(吉野忠信)

君主の身に居ても驕ることなく、臣下となつて敢て亂をなさず、醜類も心を改めて善をなしかく譲讓して争争せぬとの意。孝經に「居

# 漢書に據れるもの

雁がねの翼の文 古語に傳へし雁がねの、翼の文を目の前に今見ることの不思議さよ(用明天皇) 霧深うして山もなく、雁のついでにあら磯の、岩角削る波の音(伊豆日記)

あはれ雁の翼もがたと、焦れても音寄らん便なく(女夫池)

上不驕、爲下不亂、在醜不爭」  
君君たりずとも、臣以て臣たるべし(百合老) 君君たりずとも臣臣たる(弓矢取(驅物論))

古文孝經、孔安國序に、「君雖不君、臣不可不以不臣。君は君たる道を盡さないでも、臣は臣たる分を盡すべきである。」  
しうにあつてよく譲る 上に居て驕らず下として亂れず、しうにあつてよく譲る(吉野忠信)

「在醜能讓」上に居て驕らずを見よ。

「雁がね」は雁が音、轉じて雁をいふ。「雁の翼」「雁の傳」といふも消息の便を云ふこと、漢の蘇武の故事である。漢の蘇武が匈奴に便して拘留され、彼地に居ること十九年、時に漢の孝昭帝上林中に狩して雁を獲た、その足に帛書を結付けてあつて、蘇武が大漠中に在ることが記してある、これによつて漢、匈奴と談判して、蘇武漢に歸ることを得た。詳しくは漢書・蘇武傳を見よ。

勸善懲惡は國政の始めとかや(楯)  
善を勸め惡を懲し戒めるは國政の始本とか聞いてあるとの意。漢書・賈誼傳に「慶賞以勸善、刑罰以懲惡」、漢書・韓延壽傳に、「以爲賞罰、所以勸善懲惡、政之本也」  
蘇武は片足を切られても典屬國といふ位に上り大國の主となる(吉岡染)

前漢書・蘇武傳に「昭帝即位數年、匈奴與漢和親、……、由是得邊、拜爲典屬國、秩中二千石、賜錢二百萬公田二頃宅一區」。「蘇武は片足を切られ」とあるは、源平盛衰記習卷、漢朝の蘇武の條に「空同三朝敵之一足」とあるのをわくひなしたるのである。  
大千世界、大千世界を壺中に入れ、四大海を呑盡す仙術もまた一心持統天皇

一切の世界の意、「三千世界」を見よ。この文は漢書方術傳に、「魏長房者汝南人也、曾爲三市樓、市中有老翁、賣藥、懸一壺於肆頭、及市罷、輒歸入壺中、市人莫之見、唯長房於樓上觀之、異焉、因往再拜、翁乃與俱入壺中、唯見玉堂嚴麗、旨酒甘香盈衍其中、共飲畢而出」とあるに據つたのであらう。

たうのさんせき 周の九鼎たうの三尺皆古幣を以て貴しとす(天智天皇)  
唐の三尺であらう。唐とは支那のこと、支那漢の高祖三尺の劍を掲げて天下を取つたといふ故事によつていうたのであらう。漢書高帝紀に「吾以三尺衣、提三尺取天下」、和漢朗詠集の部「三尺の斬蛇」をも見よ。  
甍成乳虎の牙にかかると(嶺山誌)

甍成は漢の景帝武帝時代の酷吏である。子を乳養せる虎は最も兇暴である。この文は甍成、乳虎を漢原右大將平政盛に喩へて、その兇暴者の爲に源賴光が災害を受けたことに云うたのである。漢書・甍成傳に「甍見乳虎、無値甍成之怒、其暴如此」。  
水は石が鏡にあらずして、嶽山の巒巒を穿ち、桑は木が鏡にあらずして、雨降の鏡を斷る(開八州)

巒は二重嶺。單嶺は一鏡の鏡で、井の轆轤をいふ。巒は抗と同字で、つるべなはをいふ。巒は井上の四交の幹、即ち井桁のこと。雨降石を穿ち、釣瓶繩井桁を切る如く、些細のことでも敗壞なれば終に大事となる。前漢書・枚乘傳に「秦山之巒穿石、單極之抗斷幹、水非石之鑽、桑非木之鋸、漸靡之使然也」。  
老陰かへつて一陽の氣に催され寒天に諸木花咲く(大鑑延)

「老陰」は極陰をいふ、「一陽」の條を見よ。漢書・靈臺傳に「極陰生陽と見えてある。

りよくりん 綠林め大掏摸ども、この水が洒ならば食ひ乾すを見るやうな(唐船師)  
「綠林」盜賊の異稱。綠林は荊州當陽縣にある地名である。この地に賊徒等起つて兵を擧げたによつて、この輩を稱して「綠林」というた起るといふ。漢書・王莽傳に「南郡張霸、江夏羊牧、王匡等起、聚綠林、號曰下江之兵」。

### 菅家詩文集に據れるもの

一榮一落春秋 一榮一落はるあきと  
移りかばれる定めなき(凱陣八島)

菅原道真の詩に「驛長無驚時變改、一榮一落  
是春秋」

昨日は北關に悲しみを蒙る士とな  
り、今日は西都に恥を清むる尸と  
なり(天神記)

菅原道真の詩に「昨爲北關被悲客、今作西  
都喪恥屍、生恨死歎其奈我、今須望足護  
皇孫」北關とは天子宮殿の北の正門をいふ。  
太平記卷十二、大内裏造督の事附聖廟の御事  
の條に「朝使安樂寺に下りて詔書を讀み上げ  
ける時、天に聲ありて一首の詩聞えたり、昨  
爲北關被悲士、今作西都喪耻尸、生恨死歎  
其我奈、今須望足護皇孫」。

### 孔子家語に據れるもの

古の君子これをもつて自ら衛ると、  
子路が誦ひし劍の舞(峴山遊)

子路は孔子の弟子である。「子路」を見よ。孔  
子家語・觀周篇に、「子路戒服見孔子、拔劍  
而舞之曰、古之君子因以劍自衛乎」。

今日は西都に恥を清むる屍となる  
「昨日は北關に悲しみを蒙る士となり云云」  
を見よ。

宣風坊の北あらたに裁ゆる處、千金  
の吟二葉より馨しく、仁壽殿の西  
曲室の時、王佐の文一天に輝  
き(天神記)

「宣風坊」は地名部に就いて見よ。「千金の吟」  
とは千金の價値ある梅花の吟詠を云ふ。「仁壽  
殿」は紫宸殿と承香殿との間にある御殿の名  
である。「王佐」は帝王の補佐の職であつて、  
菅原道真を云うたのである。菅家後集・梅花  
の詩に「宣風坊北新栽處、仁壽殿西内宴時、  
人是同人梅異樹、知は花獨笑我多悲」。

### 芝蘭の園に入る人はとめねど袖に薫 あり(關八州)

孔子家語・四に「如知入芝蘭之室、久而不聞  
其香」とあるを作善へたもので、名族からは  
忠烈賢臣の出るに喩へたのである。

忠言耳に逆ひ良薬口に苦し(唐船類)  
孔子家語六本篇に「孔子曰、良醫苦於口、而  
利於病、忠言逆於耳、而利於行」。

### 後漢書に據れるもの

孝は百行の始め(持統天皇)  
後漢書に「孝百行之本、衆善之始也。古文孝  
經の序に「孝百行之本」。

君を擲んで事ふ 爰に雲南の萬禮武  
者修行成就し、君を擲んで事ふる  
と云ふ本語に任せ、傳手を求めて  
當春より此家に奉公し(國性爺後日)  
後漢書・馬援傳に「馬援曰、當今非但君擲  
臣、臣亦擲君」。

媚嫉薬を盗む げにや思ひしら雲  
に月を隠して懷に、じやうが薬  
をわすみけん昔を今になすらへ  
て(以呂波)  
媚嫉は妾の妾である。媚に妾の藏せる不死の

ふ(馬局判官盛久)  
孔子家語六本篇に「良醫苦於口、而利於病、  
忠言逆於耳、而利於行」。

忠臣は孝子の家より出づる(鎌田)  
後漢書・韋彪傳に「國以節賢爲務、賢以  
孝行爲首、求忠臣必於孝子之門」。

天知る地知る かりにも悪事はせま  
いもの、天知る地知ると云ふ本文  
を忘れし故(酒吞童子枕書業) 天知  
る地知るで、こつちこそ見知ら  
ぬ(大經師)  
後漢書・楊震傳に「震曰、天知、地知、神知、  
子知、我知、何謂無知。罵堂經に、「人所  
レ作善惡、有四神知之、一者地神、二者天神、  
三者旁人、四者自意」。

### 國語に據れるもの

君辱かしめらるる時んば臣死  
す(大經師)(井筒)

臣は君と艱難生死を共にするの意。國語越語に「猶蓋曰、爲三人臣者、君憂臣勞、君辱臣死。」  
國を療治の流行醫者 國を療治の流行醫者、法眼が藥を飲む人は長生不老門前に、藥代禮物持たせ來て(冷泉節)  
國語 普語・七に「晋平公有疾、秦伯使醫和視之、文子曰、醫及國家乎、對曰、上醫醫國、其次救人、問醫官也。」

天の與ふるを取らざれば友つて其咎

### 古文眞寶に據れるもの

秋の風さつさつせうせうとして金鐵皆鳴る(千疋犬)  
この文は歐陽永叔の秋聲賦の中の文に據つたもので、秋聲賦に「浙瀝以蕭颯」とある蕭颯を颯颯蕭蕭としたのである。颯颯は風の音、蕭蕭は風の音のざわざわして物淺い形容。「金鐵皆鳴る」の條を見よ。

一醫に名ある者は庸ひられずといふことなし(魯女)(三世相)  
古文眞寶後集、韓退之の進解に、「占小善者施以球、名一藝一者無不庸云云。」  
去來として古郷へ還れしは、彼の天命を棄みて祿を捨てたる古人の心(抱朴)

を受け、時につて行はざれば其殃を受くとかや(伊豆日記) 天の與を取らざれば友つて其罪を受け、時に行はざれば友つて其殃を受くるといふ(弘徽殿)  
國語 卷二十一、越語下に「越王勾踐與帥伐吳、吳人出挑戰、一日五反、王弗忍欲許之、范蠡進諫曰、王姑勿許也、臣聞、得時無怒、時不再來、天子不取反爲之災。」  
說死に、「天與不取反受其咎、時至不迎反受其殃」。

「古人は陶淵明のこと。陶淵明彭澤縣令の職を辭して郷里に歸去し、歸去來辭を作つて其志を述べた。「歸去來」とは「いざかへり」なんの義。歸去來辭は古文眞寶後集にも出てゐる。  
牛溲馬勃助鼓の皮 天下に抛つ概を一命は、牛溲馬勃助鼓の皮惜ししとは存ぜれども(開八州)  
「牛溲は牛の尿、馬勃は馬屁菌。韓退之の進解に「牛溲馬勃助鼓の皮、俱收並蓄、待用無遺者、醫師之良也」とありて注に「牛溲牛溲、馬勃馬屁菌也、生濕地及腐木上、如孤而圓且輕。」  
菊籬のもとに手折りては、悠悠として南山を見しは唐土(聖徳太子)  
「建心の菊云云を見よ。」

金鐵皆鳴る 秋の風颯颯蕭蕭として金鐵皆鳴る、敵に赴く兵の杖を衝んで進むといつし古人の詞(千疋犬) 備(行列具太鼓、しやうしやう) 修整として金鐵皆鳴る御陣(津戸三郎)  
甲冑などすれ鳴る音で、秋風にさやうな音かす。古文眞寶後集 卷之二、秋聲賦に、「歐陽子方夜讀書、聞有聲自西南來者、俄然而聽之曰、異哉初淅瀝以蕭颯、忽騾騾而碎奔、如波濤夜驚、風雨驟至、其觸於物也、鏗鏘鏗鏘、金鐵皆鳴、又如赴敵之兵、銜枚疾走、不聞號令、但聞人馬之行聲、予謂童子、此何聲也、波出初之、童子曰、星月皎潔、明河在天、四無人聲、聲在樹間、予曰、噫嘻悲哉、此秋聲也。葉實、鏗鏘鏗鏘。」

雲心無き水の面 雲心なき水の面、北斗はさえて影映る、星の妹背の天の川、梅田の橋を鶴の、橋と契りていつ迄も、我とそなたは女夫星、必らず添ふと縋り寄り、ふたりが中に入ふる涙、川の水嵩もまさるべし(曾根樹)  
陶淵明の歸去來の辭に「雲無心以出岫。」この文は維茂土証卷之二に「陶淵明が歸去來の辭に、雲無心以出岫といふ語あり、その外詩人の詞に、雲の心なきを人情の憂き思ひの胸に雲が自ら見て、うらやむ心多し、こも其心に湛きなせり、我我は憂き思ひにかきくれしに、うらやましや雲は心もなく、何の苦もなく見ゆると也、それより水の面とうつ

りて観川の景色をいひしも、彼の空は一つに雲の波といへる心もちに湛きなせり、空の景色と今日前の川邊の景色とを打ち混じして、上と下とていひたる甚だめづらき也、空の北斗は心くさえて、其影水に映りて輝くも、我が胸のくもりたるには事かはりてうらやまれ、わきて羨しきことは、七夕の星の妹背の契りをこめ給ふ天の川の川もありありと、さざな二星は我我もあかりて、今渡る梅田の橋を鶴の橋と契り、必らず添はんと縋り寄り有様、其景其情其思いつれもさもあるべし、鶴の橋とは、牽牛織女の二星落ち合ひ給ふ夜、鶴の來りて羽をのし、天の川を渡すといひ傳へなり、扱降る雨よりひかかけて、川の水嵩とうつりたるも、華の歩み心よく面白し、水嵩は水の嵩なり、水の嵩高くなるを水嵩もまさるべしといへり」と見えたる。

畫樓朝に飛ぶ南浦の雲(天竺)  
彩色した棟高く聳えて、こころ南浦の雲の飛ぶを見るの意。古文眞寶後集、朱藤野西の際王閣の詩に「畫樓朝飛南浦雲、朱藤野西西山雨。」この詩句を用いて天王寺の塔の崇高なるを形容したのである。朝は「暮」に對する語で、こころはただ文飾に用いたのである。滕王閣の詩は唐詩選 卷二にも出でゐる。

今日は漢宮の人に於て明朝朝地の幸となる(聖徳太子)  
王昭君は漢の元帝の後宮にあつて絶世の美女であつた。呼韓邪單于朝して漢に婚と美することを求めた。その帝は畫工毛延壽に命じて官女等の貌を畫かしめ、その中で醜い官女を單于に遣らうとした。官女争つて毛延壽に

略したが、王昭君は略しなかつたにより、醜く畫かれた爲に匈奴に嫁することとなつた。王昭君匈奴に至り、憤怒に堪へずして藥を飲んで死んだ。この文は王昭君の故事を引いて、守屋に捕はれた公卿達の北の方に當てて云うたのである。古文眞實・前集、李白の王昭君の詩に「昭君拂玉琴、上馬啼紅頰、今日漢宮人、明朝胡地妾」。

聲細細と怨心が如く暮ふが如く泣く如く(吉岡染)

古文眞實後集卷之一、蘇東坡の前赤壁賦に、「聲嗚嗚然、如怨如慕、如泣如訴、子之悲乎、教へざるは父の過なり、教へて學びざるは子の過と見えたりども(加増曾我)」

古文眞實前集 卷一、司馬溫公・勸學歌に、「養子不教父之過也、訓導不嚴師之惰。同書柳屯田・勸學文に、「父母教而不學、是子不愛其身也」。

魂魄結んで天高く、鬼神聚つて雲を覆ふ、蓬斷え草枯れて、霜の晨か物凄や(國性翁後日)

「魂魄」は禮記、郊特牲に「魂氣歸于天、形魄歸于地」と見え、人間の靈魂をいふ。「結ぶ」は解結するを云ふ。古文眞實後集、李華の甲古戰場文に、「蓬斷草枯、雲若摧晨……魂魄結兮天次次、鬼神聚兮雲霧霧……」とありて、戰場の跡凄惨の情を述べたのである。

酒に酔うて世を見れば、萬事は水の浮草、兵も似我蟻、浮世の人は飛蟲と、劉伯倫が金言(酒吞童子枕言華)

古文眞實・後集、劉伯倫の酒德頌に、「兀然而醉……俯賞萬物擾擾遷、如江漢之浮萍、二豪侍側焉、如蜉蝣之與一粟粒」。

種樹郭橐駝が名言(西島の浦)

郭橐駝は唐時代に長安の西島の豐樂地に居つた種樹師の渾名である。僕を病んで背部が隆起し伏行したによつてこの渾名を得たと云ふ。人あつて種樹のことを橐駝に尋ねた。橐駝答へて、橐駝は餘り樹を愛する心にいぢりちらして枯らしてしまふ。その樹の性情に適するやうに栽植した後は放任して置けばよい。政治もやまかしら言立てられて繁雜に過ぎても、民はこれが爲に病み且忘つてしまふ。それは政治も樹を養ふ術に類してあるやうであると言つた。委しくは柳子厚の種樹郭橐駝傳(古文眞實後集)にも出てゐるに就いて見よ。

臣命を受けし日より、寢ぬれども席を安んぜず、食すれども味を甘んぜずと言ひし孔明(驛物通)

古文眞實後集 卷之八、諸葛孔明の後出師表に「臣受命之日、寢不安席、食不甘味、風塵北征」。

硯の命は靜に動かぬを以て世と共に承く、筆は銳に動くが故に命毛日を以て計ふといへり(持統天皇)

古文眞實後集 卷之五、古硯銘に「筆之壽以日計、硯之壽以月計、硯之壽以世計、其故何也、其爲體也、筆最銳、墨次之、硯鈍者也、豈非鈍者壽而銳者夭乎」。

蘇軾字を子瞻と云ひ、宋時代の文人である。早晩に雨の降つたのを喜び、亭を喜雨亭と名づけて喜雨亭記を作つた。その文は古文眞實後集 卷四にも出てゐる。

楚人の一炬に焦土となんぬ咸陽宮(國性翁(女夫池))

「楚人」は項羽を云ふ。「咸陽宮」は秦始皇帝の造つた宮殿である。「かんやうきゆう」を見よ。古文眞實 後集卷之一、杜牧之の阿房宮賦に「楚人一炬可燬焦土。阿房宮は驪山の北から起つて西に折れ、直に咸陽に達つて咸陽宮となつてゐた。

茶を受け手向けをなし、一杯に咽を潤し、二杯に暗き心を明らかに、三杯に枯れたる魂をさぐり、四杯に輕き汗をおこして平生不平の氣を散じ、五杯に肌をいさぎよく、六杯には自づから仙靈に通達し、七杯喫する其中に清風に乗じて不退地の雲に遊ぶ(百日曾我)

古文眞實 前集、盧同謝寄新茶歌に「一腕喉吻潤、二腕破孤圓、三腕理枯腸、惟有文字字五千卷、四腕發輕汗、平生不平事、盡向毛孔散、五腕肌骨清、六腕通仙靈、七腕喫不得也、惟覺兩腋習習清風生、蓬萊山在何處、云云」とあるに據つたのである。

泥より出でて色染まぬ蓮は花の君(開田川)

周茂叔の愛蓮説に、「蓮之出淤泥而不染、濯清漣而不妖……蓮華之君子者也」。

敵に赴く兵の枚を衝んで進むと云

つし古人の詞

「金鼓鳴ら」の條を見よ。

洞口より一筋の雲無心にして懸けは(國性翁)

陶淵明の歸去來辭に「雲無心以出岫」。

泥より出でて泥に染まぬ蓮(女毅)

古文眞實 卷二、周茂叔の愛蓮説に「予獨愛蓮之出淤泥而不染云云」。

なかつし 蓮は淤泥より出でて淤泥に染まらず、中とつじ外直にして莖あらず枝あらず(以呂波)

「なかつし」は中通の誤であらう。「蓮は淤泥云云」を見よ。

南敵の農夫よりも多く

「標木を買よの柱をして云云」を見よ。

殘人の菊籬のもとに手折りて、悠悠として南山を見しは唐土(聖徳太子)

古文眞實 前集、晋の陶淵明の詩に「結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、採菊東籬下、悠然見南山、山氣夕佳、飛鳥相與還、此中有真意、欲辯已忘言」である中の二句に據つたのである。「南山」はその條を見よ。

莫邪を鈍しとし鉛刀を銳しといひ、周の鼎を棄てて瓢簞を賣とす(雪女)

古文眞實 後集、賈誼の甲原賦に、「莫邪爲鈍、鉛刀爲銛、于嗟默、生之亡レ故令、幹葉周鼎、寶康虜令」。

蓮は淤泥より出でて淤泥に染まらず

中とうじ外直にして蔓あらず枝あらず(以呂波)

古文眞實後集 周茂叔の愛蓮説に「蓮之出、潔泥而不染、濯清澗而不妖、中通外直、不蔓不枝。」中とうじはなかつうじ(中通り)誤であらう。

蠶れざるに何の虹 八十間の長廊下・十六間の欄干を寛ぎ歩ませ給ひしは、霽れざるに何の虹、花を吐くかとあやまたる(小栗判官)

長廊下の虹に似たればいふ。杜牧之の阿房宮賦に、「長橋臥波、未雲何雨、複道行空、不霽何虹、高低冥迷、不知西東」とあるに據つたのである。

筆は鏡に動くが故に命毛目を以て計ふと(へり) (待統天皇)

古文眞實卷之五、古硯銘に「筆之壽以日計、墨之壽以月計、硯之壽以世計、其故何也、其爲鏡也、筆最鏡、墨次之、硯鈍者也、豈非鈍者壽而鏡者天乎、其爲用也、筆最助、墨次之、硯解者也、豈非解者壽而助者天乎。」に於ける。

紅白粉やもろこしの滑流を油に湛へたり(聖徳太子)

杜牧之の阿房宮賦に、「滑流瀝、膩藥脂水也。」とあるによつてかく云うたのである。阿房宮賦のこの句は、渭水の流にあぶらのたゞは、官女が化粧の水を棄てるからであるとの意(「ありら」はその條を見よ)。

豆を煮て豆の葉を煮く(最明寺殿)

兄弟相害ふをいふ故事である。魏の文帝嘗て弟の東阿王をして七步に詩を作らしめ、成ら

なければ當に法に行ふべしといふたので、東阿王即ち豎に應じて詩を作り、「煮豆持作羹、漉豉以爲汁、其在釜底然、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急」といふたこと世説に見えてある。古文眞實前集、曹子建の七步詩に、「煮豆燃豆其、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急。」

蘇東坡の前赤壁賦に、「知三夫水與月乎、……盈虛者如彼而卒莫消長一也。」

榑木を負ふの柱をして南畝の農夫より多く、梁に架するの柱は機上の工女よりも多く、釘頭の礫礫たるは塹に在るの粟粒よりも多く、旦暮の説法讀誦の聲は市人の言語よりも多からしむ(出世景清)

陳る負ひ支へる柱数は南畝に耕作する農夫の工女の數よりも多く、梁に架した柱の數は機上の工女の數よりも多く、釘の頭のばらばらと見えるのは米倉にある米穀の粒よりも多く、朝暮の説法讀誦の聲は巷に喧しい市人の言語よりも多との意。「榑木」は木清うして石の見はれてゐる貌。「塹」は米倉をいふ。杜牧之の阿房宮賦に、「使負棟之柱、多於兩敵之農夫、架梁之椽、多於機上之工女、釘頭礫礫、多於在塹之粟粒、瓦縫參差、多於周身之帛帶、直橫櫺檻、多於九土之城郭、管絃嘒嘒、多於市人之言語」とあるに據つたのである。

門設けたりと雖も常にとさせり(女夫池)

古文眞實後集卷一、陶淵明の歸去來辭に「園日涉以成趣、門雖設而常關」。

麟は仁獸にして、生けるを食はず生草を踐まず(百日曾我)

箋解古文眞實後集卷二、韓退之の獲麟解の註に「麟、仁獸、不食生物、不踐生草。」

鉤を竊む者は誅せられ、國を竊む者は侯となる(三國志)

莊子、胠篋篇に「彼竊鉤者誅、竊國者爲諸侯。」史記、游俠傳に、「稱鉤者誅、竊國者侯。」(山本九丘衛版七行古院本のこの文に、「鉤」とあるは鉤の誤)。

鷓鴣の小鳥が、九萬里の空を飛ぶ鷗の大鳥を笑ふ(關八州)

「鷓鴣」は小鳥である。鷗はその背幾千里か知れない程大きく、その翼は垂天之雲の如く、つむじ風に拂つて九萬里に上るといふ想像の鳥である。「たいほう」をも見よ。木の間に飛ぶ小鳥は驚める所小であるによつて、九萬里の空を飛ぶ鷗の驚るの所大なる心を知らずこれを笑ふ。凡て小に安んずる者は大を知らぬとの意。莊子、逍遙遊に、「風之積也不厚、則其負大翼(鷗の大翼)也無力、故九萬里則風斯在下矣、而後乃今培風、背負青天、而莫之天阨者、而後乃今將翼南、翺

### 莊子に據れるもの

退之が獲麟の解に曰く、麟は徳を以てして形を以てせずと(百日曾我)

麟の靈獸たる所以はその徳高きを以ていふのである。形の怪異なるは固も所でない。古文眞實後集卷一、韓退之の獲麟解に「麟之所、以爲麟者、以徳不以形」。

與鷓鴣笑之曰、我決起而飛掠榆枋、時則不至、而控於地而已矣、奚以之九萬里而南爲、適莽蒼者、三塗而反、腹猶果然、適百里者、宿春糧、適千里者、三月聚糧、之二蟲又何知、小知不及大知、小年不及大年、奚以知其然也、胡朔不知晦朔、蟪蛄不知春秋、此小年也。

「せきあん」を見よ。

車の轆に彼の三升の水に渴えし小鮒雑魚(女夫池)

さしませまつた雜儀をいふ。鷓鴣、莊子、外物篇に「莊周家貧、故往貸粟於監河侯、監河侯曰、將得邑金、將貸子三百金、可乎、莊周公然作色曰、周昨來有中道而呼者、周顧視車轍中有鮒魚焉、問問之曰、鮒魚來、子何爲者耶、對曰、我東海之波臣也、君豈有斗升之水而活我哉、周曰、諾、我且瀕遊吳越之王、激西江之水而迎子、可乎、鮒魚忿然作

色曰、吾失我常與、我無所處、吾得斗升之水、然活耳、君乃言此、曾不如此、早索我於枯魚之肆。」

胡蝶となつて牡丹花に戯る。(天神記)  
「莊子が夢中に無我有の里に遊び云云」を見

莊周が胡蝶云云(源義經)  
莊子名は周、夢に胡蝶となつたといふ故事である。次條を見よ。

蝶となつて牡丹花に戯る。(天神記)  
莊子齊物論に、昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、自喻適志與不知周也、俄然覺則蓬蓬然周也、不知周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與、周與胡蝶則必有分矣、此之謂物化。」

驚は洗はずして其色白く、染めずし  
爲は黒し(大鶴冠)  
莊子天運篇に「鵬不日浴而白、鳥不日黔而黒。」

三千年に一度擣つて九萬里の雲に飛ぶ大鵬(國性爺後日)  
鵬は莫大な鳥の名。蓋し龍卷をいうたものであらう(大鵬を見よ)。莊子逍遙遊に、「鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里、去以六月息者也」とある、三千里を三千年といひなしたのである。

深山に茂る諸木の中、至まず直に立つたる木は杗人先是を伐つて板柱とし、至みすぢりし節木を伐礎すといふ古人のたとへ(弘徽殿)

莊子逍遙遊に「惠子謂莊子曰吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫而不中繩墨、其小枝卷曲而不中規矩、立之塗匠者不顧。」

せきあん せきあいはいとまなくして飛ぶこと數仞に過ぎず(佐佐木)  
〔斥鴳〕斥は小鳥、鴳は雀のいなをいふ。莊子逍遙遊に「斥鴳笑之曰、彼(鵬)のこゝ且突過也、我騰躍而上、不し過數仞」。序云、佐佐木先師(八行本)の古本に「きんあん」と假名で書き、ま九條葉川(宇治加賀孫)古海珊撰で、これも梔林子の作であらう(第五にも「きんあんがほらまんなが月」と原本に見えてゐる。これも「斥鴳が騰躍が月である。蓋し「斥」は「斤」の字形が酷似してゐるので誤り、それが假名で書かれた誤である。

だいぼう 三千年に一度ばうつつて九萬里の雲に飛ぶ大鵬(國性爺後日)  
唐高麗も羽がひの下、三千年に擣つて飛ぶ末代の大鵬、この君と古今に翅を残しけり(三國志)  
〔大鵬〕極めて大なる想像の鳥である。莊子逍遙遊に「北冥有魚、其名為鯨、鯨之大不知其幾千里也、化而爲鳥、其名為鵬、鵬之背不知其幾千里也、怒而飛其翼若垂天之雲、云云」とありて實は龍卷を鵬と云ふ鳥にひなしたのであらう。「三千年に一度はうつつて云云」を見よ。

蠅螂が斧 大炊介めば瘦腕にて赤沼父子を討たんとは、誠に蠅螂が斧なれば、雪女 やさしき愚人めが智略だて、腕にも智慧にも此兼

氏を討たんとは蠅螂が斧ごぞんなれ(小栗判官)  
〔蠅螂〕はかまきりと云ふ昆蟲。蠅螂が前の兩足を擧げれば斧を執る象の如ければ蠅螂が斧と云ひ、以て己が力量をはからないで妄進するに喩ふ。莊子天地篇に「猶蠅螂之怒負、以當車轍、則必不勝之任矣」。文選に、「欲擣蠅八千春、槿花一日椿壽八千春、天地と共にして百萬代も限なき(蠅物論)

莊子逍遙遊篇に、「上古有大椿樹、以之八千歳爲春、八千歳爲秋」とあるに據つたもので、これを初代長久の目出度い意にとつて、「天地と共にして云云」の文につづけたのである。

釣をぬすむものは誅せられ云云  
〔釣を獲むものは誅せられ云云〕を見よ。  
鳥は高く飛んで蠅の害をのがれ、腰鼠神丘の下に穴掘つて人の糞をるを免るとかや(鳥原蛙合戦)

「蠅也」は「いぐるみ」である。矢に縄又は絲を附けて鳥を射ること。「鵬鼠」は「はつかねずみ」のこと。莊子應帝王篇に「鳥高飛以避蟻之害、鵬深穴乎神丘之下、以避羸豎之患」。

飛鳥にあらざれば飛鳥の心を知らず、此鳥同じ毛色は彼奴も兄弟、飛鳥にあらざれば飛鳥の心を知らずとはそれは人間(安夫也) 莊子秋水篇に「非魚安知魚之樂」とある

と同巧。なほここの文は、飛鳥でなければ飛鳥の心は知れぬとは、人間から飛鳥を見ていふ言葉であつて、畜類同志は互にその氣を知り合つてゐるとの意。

鵬鳥は三千年に一度擣つて南冥に至り、きんあんは暇なくして飛ぶこと數仞に過ぎず(佐佐木)  
莊子逍遙遊に擣つたのである。「きんあんは斥鴳を斥と誤つたのである。「きんあん」「だいぼう」「みそさんざい」云云を見よ。

牡丹の胡蝶 牡丹の胡蝶芭蕉の鹿、いづれを指して現とも覺めたる我を知らざれば、夢路を夢と誰か知るべき(國性爺後日)  
夢が眞實か、覺めたる我を知らざれば、その定め難いをいふ。莊子夢に胡蝶となつて牡丹花に戯れたといふ故事で、莊子齊物論に、「昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、自喻適志與、不知周也、俄然覺、則蓬蓬然周也、不知周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與、周與胡蝶則必有分矣、此之謂物化」。

みそさんざいの分として鵬鳥を嘲弄す、相換入道千正大)  
「みそさんざい」は鵝鴨(斥鴳とも書)である。鵝鴨の小鳥が鵬の大鳥の行爲を嘲弄するは、恰も小人が大人の行爲を嘲弄するやうなものである。莊子逍遙遊に、「有鳥焉、其名為鵬、背若泰山、翼若垂天之雲、搏扶搖羊角而上者九萬里、絕雲氣、負青天、然後從南、且適南冥也、斥鴳笑之曰、彼且奚適也、我騰躍而上、不し過數仞、而下、翔舞蓬蒿之間、此亦飛之至也、而彼且

笑遊也、此小大之辨也」とあるに據つたのである。

夢の中に胡蝶となる 莊子といふ、唐土の博識さへ夢の中に胡蝶と成りしと承る(關八州)

このこと莊子齊物論に見えてゐる。「莊子が夢中に無我有るに遊び云云」を見よ。

夢の夢こそあはれなれ(會根崎) 人世のことは皆夢なるに、その夢の間にまた夢みる心地哀れであるとの意。莊子齊物論に「方其夢也、不知其夢也、夢之中又占其夢焉」。離波土産卷一に巢林子のこの文を解釋して、「うき世は夢なるに、又我身の今死にゆくはかなき、まながら夢の内に又夢を見し心地なれと也、此世を夢といふ事は佛説

に多き中に、唯識論に云いまだ眞覺を得ざれば常に夢中に處て、故に佛説いて生死の長夜とすといへり、金剛經にも一切有爲の法は夢幻の如しといへり、又詩にも人間一夢中など作りて、浮世のあだなるを夢に譬へたる、これらの語をよみて書きたる文句なり。

俗耳鼓吹に、巢林子が「死に行く身の道の道、一足づつに消えて行く」といふ所まで盡いて、案じ煩うた時に、伊勢の俳諧師深宛に教へられて「夢の夢こそはかなけれ」と書きつづけたといふ話が載つてゐるが、事實ではあるまい。

陸軍にむかふ端緒が差(唐船嶺) 「たらちちがをの」を見よ。

### 左傳に據れるもの

孔子は魯國の狩に麒麟を獲られし(齊稽山)

左傳、哀公十四年の條に、「十有餘年春西狩獲麒麟」と見えてゐる。麒麟は仁獸を雲入世ある時に出現といふ、孔子春秋を著してゐた際、哀公狩して麒麟を得られたと聞き、我運命も盡きたと嘆いたといふ。孔子が狩に出て麒麟を獲たのではない。

末の大いなるは必ず折る、尾の大いなるは必ず動かし難しとか(吉野忠信)

枝葉大なれば本幹その重きに堪へて必ず折れ、尾大なれば其體の動作自由になり難き義、以て支族大なれば本宗を倒すに喻ふ。左傳、昭公十一年の條に、「末大必折、尾大不掉。」

大義には親を殺す(喜女) 君臣の大義を全うする爲には父子の私親をも殺す。左傳、隱公四年の條に、「君子曰、石碏純臣也、惡州吁而厚與焉、大義滅親、其是之謂乎。」

暴逆を禁め、兵戈を取め、大を保ち、功を定め、民を安んじ、衆を和し、

財を豐にす、七つの徳(日本武尊) 左傳、宣公十二年の條に、「夫武藝暴、戢兵、

### 三國志に據れるもの

魚と水 名も水に棲む龜すすき、魚と水との如くなり(孕常盤)

交の極めて親密なるを云ふ喻。三國志、蜀志、諸葛亮傳に、「先主與諸葛亮計事善之、情好日密、開羽飛等不悅、先主曰、孤之有孔明、猶魚之有水、願勿復言。」

三度諫めて用ひざれば身を奉じて去る(喜女)

### 三體詩に據れるもの

羅の扇に撲つは秋の螢火(關八州)

三體詩卷一、王姬の宮詞に、「銀燭秋光冷畫屏、輕羅小扇撲流螢、玉墀夜色涼如水、臥看牽牛織女星。」

瓜を獻する藥花 二月中旬にふりを獻する藥花を見よ。

きうぜんのかやうりう 「きゆうぜんのかやうりう」云云を見よ。

宮前の楊柳寺前の花(國性爺)

保大、定功、安民、和衆、豐財者也。

小學、內篇稽古明倫に、「人臣三諫而不聽、則其義可去矣。」三國志、吳書に、「夫臣人者、三諫不從、則奉身而退。」

良禽は木を相て棲み、忠臣は君を擇んで事ふ(理徳太子) 三國志、蜀志に、「良禽相木而棲、賢臣擇主而事。」

寺は尚書御史の役所。三體詩、王姬の詩に、「酒樓高樓、百家、官前楊柳寺前花、內園分得溫泉水、二月中旬既進瓜。」

五天到る日頭白かるべし 「十萬里程多少難、五天到る日頭白かるべし」と見よ。

十萬里程多少難、五天到る日頭白かるべしと、渡天の人を嘆美せし、月は落つる長安半夜の鐘(饒天皇)

宋周師編、三體詩卷一、李涪が送三體詩



師「西城」の詩に、「十萬里程多少難、沙中頭」舌  
授「降福」五天到日臨「頭白」月落長安半夜鐘」  
とあるに據つたものである。この詩の意は、  
支那の長安の都から天竺の迦毘羅城までは道  
程十萬里もあることであるから、その旅行中  
には必ず多少の難險に遭はれることとござ  
らう、されども群公が沙漠の中に立ち舌を動  
かして梵經を念誦なされれば、降福もその功  
力に潛伏して散て害を加へることもござりま  
すまい、道中に長い月日を費されることであ  
りませうから、天竺に到達される時には白髮  
頭になられてゐるであらう、お別れ申し  
ては又いつお會ひ申されることやら、生別ま  
た死別を兼ねることだと思つて、かうしてお  
別れするのを惜んでゐる間に、最早月は西山  
を隠く頃となりました、と云ふのである。五  
天は五天竺の略である、昔時印度はその地勢  
によつて東、西、南、北、中の五部に分たれてゐ  
たから、印度を五天竺と稱した。「渡天の人」  
とは、印度に渡らうとする支那三藏のことで  
ある。

人家煙道絶えて 雲凝つて磐石頭に  
そばだてり、人家煙道絶えて朝來  
一片の霞を飲む、とばかりかかると處の  
山居にや(井筒)

仙人は炊煮のことをせぬによつて烟火なく、  
朝霞を飲んでゐると云ふ。三體詩卷一、秦  
系の題「張道士山居」の詩に、「磐石垂簾只是  
家、回頭猶看五枝華、松間寂寂無烟火、塵  
土」

「服」朝來一片霞」  
「十萬里程たせうなん云云」を見よ。

朝來一片の霞を飲む  
「人家煙道絶えて」を見よ。

二月中旬にふりを獻ずる榮華な  
り(國性爺)

「ふりは瓜である。「ふり」を見よ。瓜は夏時  
のものなるに時ならぬ二月中旬既に瓜を獻ず  
るとは、榮華を極めたことを意味するのであ  
る。三體詩・華清宮、王建の詩に、「酒樓高樓  
一百家、官前楊柳寺前花、内園分得溫湯水、  
二月中旬既進瓜。」

華飛び蝶駁けども人愁へず、水殿雲  
廊別に春を置く、晴日粧ひなす千  
騎の女(國性爺)

花飛散し蝶駁いて春去るとても人は愁へるに  
足らない、その愁へぬわけは水殿雲廊に憩ん  
で別に人の春がある、暁日紅唇翠黛の容色盛  
粧をこらした千騎の美女を交へたるは、これ  
春の華・春の蝶と見えるの意。三體詩・卷之  
一、都官の題で陸龜蒙の詩に、「華飛蝶駁不  
愁人、水殿雲廊別開春、暁日粧粧千騎女、  
白翎桃下紫綸巾。」

一行失すれば百行共に傾くと  
や(源義經)

三略卷下に、「嚴一善則衆善衰」  
軍議に曰く、良將の軍を統ぶるや、  
人を治め惠を推し恩を施し、士力  
日に新にして、戦ふこと風の發  
するが如く、攻むること河のさく  
るが如くにて(鎌田)

軍議は兵書である。黄石公三略・上略に、「軍  
謀曰、良將之統軍也、知己而治人、推惠  
施恩、士力日新、戰如風發、攻如河決、故其  
衆可聚而不可散」  
柔能く剛を制し弱能く強を制

### 三略に據れるもの

す(川中島)(善本太平記)  
三略に「柔能制剛、弱能制強」(序に云、黃  
石公三略は後人の依託したもので、其本旨は  
老子から來である。書中にある「柔能制剛、  
弱能制強」も老子に「柔勝剛、弱勝強」と  
あるに據つたものである。

將の謀泄する時は軍利なし、外内  
を鬪ふ時は禍制せずとや(女簡)  
黄石公の三略卷上に、「將謀泄則軍無勢、外  
闕内則禍不制」  
良將の軍を統ぶるや云云  
「軍議に曰く良將の軍を統ぶるや云云」を  
見よ。

### 周易に據れるもの

元龍悔あり 易に曰く元龍悔あり、  
滿つれば欲ぐ(烏帽子折)  
元龍とは高く上りつめた龍をいふ。高く上  
りつめた龍はより外道なれば、元龍悔  
ありと云ふ。周易卷一、上經・乾の條に、「上  
九、元龍有悔。從然革に、元龍の悔ありと

かやらふこと待るなり、月滿ちては缺け。  
君子其室に居て言葉を出すこと善な  
る時んは千里の外に應ずとか  
や(國性爺後日)

周易繫辭上に、「君子居其室出其言、善則  
千里之外應之、況其適者乎」と見え、明文妙

の中にも出てゐる。  
乾に乾を果ぬるは元龍悔あり(弘微殿)

乾は乾卦三をいふ。周易・乾卦に、「元龍有悔」。史記・漢書傳に、「易曰、元龍有悔、此言上而不能下、信而不能諂、在而不屈、自返一也」。元龍悔ありの條をいふ。

乾は元にして亨る貞に利ありと(天神記)

周易・乾卦に、「乾元亨利貞」とありて、傳に「元亨利貞は之を四徳といふ、元は萬物の始め、亨は萬物の長、利は萬物の遂、貞は萬物の成なり、惟だ乾坤に此の四徳あり」。

蹇は東北に利あらず西南に利あり(弘微殿)

周易・蹇卦三三三に、「蹇、利西南不利東北」。前に險しき風云云をいふ。  
坤上坎下の卦體(國性篇)

師の卦 我等が本卦師の卦に當つて、師は軍の義なり、坤上坎下の卦體、一陽を以て衆陰をすぶるといふ(國性篇) 判官殿は丁丑の生れ、本卦師の卦に當つて軍術の妙を得(最明寺殿)

三三三 坎下坤上の卦體である。周易經翼通解卷之三に、「師者衆也、古者陳五五曰伍、積至二千五百人謂之師」、故軍旅之事通謂之師、此卦内坎而外坤、卦體九二、以一陽一統衆陰而在下、將帥之象、故否卦曰師。

順を以て正しきとするは妾婦の道(浦島)

順は貞順の義、周易・恒の卦に、「六五、恒其徳、貞、婦人吉、夫子凶。象曰、婦人貞吉、從一而終也」と見え、周易經翼通解に、「婦人之道、以順爲正」と見え。

震の卦・雷百里を動かす(天神記)

震の卦は二である。周易に、「震條百里」と見え、周易經翼通解卷十四に、「震者動也、一陽動于二陰之下、奮發而動上、故爲震、其象爲雷、其徳爲動」と見え。

震の卦を下にし、離の卦を上にし(聖徳太子)

おされ(聖徳太子) それ弓矢といつば神武不殺の威徳を欲し、物に疵付け殺されども(槍狩) 神武不殺は聖王の徳(佐佐木)

師の卦 「師の卦」を見よ。  
噬嗑の卦 震の卦を下にし、離の卦を上にし、噬嗑の卦と申すに當つて候、易に曰く、頤の中に物あり、噬嗑せて而して後に亨ると(關八州)

三三三 震下離上の卦である。噬は齧、嗑は合である。上卦は離、下卦は震、初と上とは陽爻にて頤の象である、四爻目に一陽爻入り、

口中に物を含み、噬みてその嚙物を去り、頤を啞さうとする象である。周易に、「噬嗑、噬而亨」。

小善は益なしとして爲さるが故に、善積まずして名を成すことなく、小悪は害なしとして去らざる故に、惡積つて身を滅す(蛙合戦)

周易經翼解に、「善不積不足以成名、惡不積不足以滅身、小人以小善爲无益而弗爲也、以小惡爲无傷而弗去也、故惡積而不可補、云云」。

尺蠖の屈めるは信びんが爲、龍蛇の蟄するは身を保つを以てなり(國性論後日)

「尺蠖は尺取蟲である。「蟄」は冬籠りすること。人間の艱苦に耐へるのは將來立身出世の

其たるに喩へたのである。易經解に、「尺蠖之屈、以求信也、龍蛇之蟄、以存身也」。

聖人の書に世の中の女たる身は取り分けて二道かけて思ふなと(唐船断) 二道とは二人の男に心を懸けるをいひ、詠曲・繪輪にも二道かくるあだ人を頼まじとこそ思ひしに」と見え、易經・恒卦の條に「象曰、婦人貞吉、從一而終也」と見え。

前に險しき岨、後に高き山あり、進まずして止まると申す易の面(弘微殿)

周易・蹇の卦三三三に、「象曰、蹇、險在前也、見險而能止、知矣哉」。

一老父衣褐、至良所、直隴其楯地下、顧謂其子曰、釋子下取楯、云々」。

警し入るに躍す、天子を眞似る守屋が驕(聖徳太子)

「警は戒め、驚ましめるを云ひ、躍は行人を止め道を清めるを云ふので、天子出入の儀である。梁孝王世家に、「擬於天子、出言譁、

史記に據れるもの

入言警とありて、秦隱註に、「漢舊儀云、皇帝驚動、御警出殿、則御理、止人清道、言出入者互文耳、出亦有理」古今註に、「警理は秦の制、出づるに警、入るに理、出入皆止むるを謂ふなり。」

古の徳ある君は、非情の松もしたりて降る雨を覆ひしとや(國性爺後日)

古の徳ある君とは、秦始皇帝をいふ。始皇帝が泰山に上つた時俄に風雨に遭つたので、松樹の下に避けた。秦始皇本紀に、「二十八年始皇東行、上鄒嶺山、立石與諸儒生一議、刻石頌秦德、議封禪書、祭山川之事、乃遂上泰山、立石封祠、祀下風雨暴至、休於樹下、因封其樹爲五大夫。」

狗は獸を追うて殺し、人は其處を指示す、今諸君の功夫なり、蕭何が如き勝つ處を指示すは、功人なりとの故事(會稽山)

蕭相國世家に、「高帝曰、夫獄、追殺獸頭者狗也、而發蹤指三獸頭者人也、今諸君徒能得走獸一耳、功狗也、至如蕭何、發蹤指示、功人也。」

項羽高祖の戦に、虞氏が涙の袖の露、かかる事にやありつらん(用文章)

楚の項羽と漢の高祖(沛公)との戦に、項羽が高祖の爲に拔下に圍まれ、其妾虞美人と共に泣いて訣別した。項羽本紀に、「項王(項羽)軍壁拔下、兵少食盡、漢軍及諸侯兵圍之數重、夜間、漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎、是何楚人之多也、項王則夜起飲帳中、有美人一名虞、常幸從、駿馬名騅、常騎之、於是項王乃悲歌慷慨、自爲詩曰、力拔山兮氣蓋世、時不利兮離不逝、雖不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何、歌數闕、美人相和之、項王泣數行下、左右皆泣、莫能仰視、」

項羽が山を抜く、項羽が山を抜く、勢(安夫池) 項羽が山を抜く、勇力(維田) 項羽が山を劈き、五人兄弟、楚の項羽が漢王(沛公)の爲に拔下に圍まれて、その妾虞美人と訣別した時の詩句に「力拔山兮氣蓋世」とあるによつたのである。前條に見よ。

下杯に授かりし黄石公が奥儀(唐船船) 張良が秦始皇帝を狙撃して失敗し、下郡に亡匿してゐた際、黄石公と云ふ老人から兵法の奥儀を授かつたといふ。俗に黄石公が張良に授けた兵法は六韜三略の書となすは恐らく後人の假託であらう。なほ詳しくは留侯世家に於いて見よ。

顔回は早く天して終に四十の花を見ず、盜跖は命長うして既に八十の霜を踏む、生死不定の理は上智博識も辨すべからずとや(安護島)

伯夷傳に、「七十子之徒仲尼獨尊顏淵爲好學、然回也黜空、糶糶不厭而著語天、天之肉、暴戾恣睢、聚斂數千人、橫行天下、竟以壽終、是遵何德之哉、」

漢の高祖は紀信が命をすててこそ、その圍をは遁れ給ふ(蘇卿)

漢の高祖は紀信を尊んで秦の國を亡す(女稱)

漢高祖は西漢の劉邦(沛公)を云ふ。楚の懷王(霸帝)を戴き、その命を奉じて秦を破り、關に入つて秦王子嬰を降し秦を討平した。詳しくは高祖本紀を見よ。

雖は蕪、拙者は他言致すまいが、雖は蕪と外よりの取沙汰は存ぜぬ(堀川波鼓)

怪は徳に勝たず(關八州) 不祥事も徳を修めてゐる者には害を加へられない。股本紀に、「伊陟曰、臣聞妖不勝徳。」

吳起が妻を害す、吳起が妻を害せし、勇者の道を重んずべき道とかや(花符)

吳起は支那春秋戰國時代の名將で能く兵を用いた。孫子吳起傳に、「吳起者衛人也、好用兵、嘗學於曾子、事魯君、齊人攻魯、魯欲將吳起、吳起取齊女爲妻、而魯疑之、吳起於是欲就名、遂殺其妻、以明不與齊也、魯卒以爲將、將而攻齊大破之。」

伍子胥が餘風、李踏天が眼を抉りしは伍子胥が餘風(國性爺)

先んずる時は人を制す(國性爺後日) 項羽本紀に、「先即制人、後則爲人所制。衆口金を消し積毀骨を流す(吉野忠信) 魯仲連陽列傳に、「衆口操金、積毀銷骨也。衆口の惡も罪惡を捏造して毀る時は、遂に父兄も相誅滅し骨肉之が爲に流亡するとの義であつて、讒言の甚だ恐るべきを云うたのである。」

首陽山に蘇餅(靈女) 周の武王が殷の紂王を滅して天下周の世となす。伯夷叔齊は殷の義士である、周の粟を食ふを恥辱と思ひ、首陽山に隠れて飯を食ひ遂に餓死した。この文は飯を餅餅にいひなしたのである。

諸君の功夫なり(會稽山) 「狗は、獸を追うて殺し云云」を見よ。

眞人は人の天(川中島) 人命を保つ食物は人の恩恵で、人命の本である。鄭宜其傳に、「王者以民爲天、而民以食得天。」

せいものそんがちうどくのあだ、はからざるに天これを罰すとかや(女夫池)(西王母)

南大門秋彼岸(初版は八行刊本で日本西王母と殆んど同文である。奥に「右此本著依小子之懸望附秘密節自遂校令開版者也。加賀接印。二條通寺町西へ入町山本九兵衛刊印とある。)にこの通りの文があつて、「せいのそしんを(齊の蘇秦と)書いてある。また八文字屋自笑撰、善附面常齋の序文に、「唐土の齊國蘇秦と云者忠毒の仇になり、終に其身を罰せられ」と、漢字を當てて書いてある。蘇秦は東周雒陽の人である、齊に仕へ鬼谷先生に學んだ、其術權變に長じ、六國を約して從親させ、以て秦に對抗せうとしたが、忽ち從親破綻に及んだ、蘇秦は後に齊の宣王の客卿となつたが、遂に刺客の爲に殺された。蘇秦が齊に仕へ齊で學んだによつて齊の蘇秦といひ、その權變を以て六國に盡したやうで其實六國を騙したから、忠に似て忠を毒する仇といひ、刺客の爲に刺されたから、天是を罰すといふたのである。

**小節を規る者は榮名をなす事なく、小しき恥を惡む者は大功を立てる事能はず(三國志)**  
小なる節義を規つたり、小恥を惡んだりする度量の狭小な者は、榮名を成したり、大功を立てたりする事は出来ないと、魯仲連列傳に、「規小節者不能成榮名、惡小恥者不能立大功」とある。

**千里の馬の尾に止まれば蠅も千里を行くとかや(三國志)**  
伯夷傳に「麒麟雖爲靈、附驥尾而行益顯」とあつて「秦隱云、蒼蠅附驥尾而致千里、云云」と見えてゐる。

**楚王・虞氏を伴ひ百萬騎を追散し(千足大)**  
「楚王は楚の項王を云ふ。虞氏は項羽の寵姫である。項羽本紀に「項王軍壁攻下、兵少食盡、漢軍及諸侯兵圍之數重、夜圍漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎、是吾人之多也、項王則夜起飲帳中、有美人名虞、常幸從、駿馬名騶、常騎之、項王乃上馬騎、麾下壯士騎從者八百餘人、直夜潰圍、南出馳走云云。」(序云、山本九兵衛版の十行とある)とある。千足大は「虞氏」の誤である。

**大行は細謹を顧みず**  
「大功は細謹を顧みず(益常載)」  
「功」或は「行」に作り、「謹」或は「謹」に作る。史記項羽紀に「樊噲曰、大行不顧細謹也。漢書陳勝傳に「論大功者不減小過、學大美者不疵細瑕」。

**大丈夫死すれども冠を捨てずとかや(堀山楚)**  
孔子の弟子子路が衛の亂に與り、戈を以てその褱を斷れた。子路言うやう、君子は死すとも冠を免かすとして、褱を結んで討死した。仲尼弟子列傳に「子路曰、君子死而冠不免、遂結褱而死」。

**たろり物を言はずして女中を招くも花の宴(西玉母)**  
桃李は物を言はずども、その花を舞うて女も集れば、女中を招くも花の宴と云うたのである。蓋し李將軍傳に、「詔曰、桃李不言、下自成蹊」と見え、諺曲、西玉母に、桃李物言はず、下自ら市をなし、とあるを作りかへたのである。

**民を以て天とす 當今甚だ文詞の學に長じ給ひ、民を以て天とすとめぐしひたし給ひければ(用明天忠)**  
「王者以民爲天、而民以食爲天」  
忠臣は天下の爲門を過ぐるに我家に入らず(百合若)

再が舜帝の命を奉じて洪水を治め、十二年間家門を過ぎても入らなかつたといふ。夏本紀に「舜登用播行天子之政、巡狩行視、縣之治水無狀、……於是舜舉鯀子禹、而使續鯀之業、……乃躬身焦思、居外十三年、過家門不入、不敢入云云」。

田單傳に「忠臣不事二君、貞女不更二夫」  
伍子胥傳に「甲苞危亡於山中、使人謂子胥曰、子之報讎其以非乎、吾聞之、人衆者勝、天、天定亦能勝人」  
天の五漢に火帝入れば、天下大いに旱すといへり(浦島)

「天の五漢は成池をいふ、即ち日の浴する天池である。火帝は炎帝、即ち火星である。天官書に「西宮成池、曰三五漢、五漢五帝車舍、火入、旱。浦島年代記七行本(後集正本山本)に「天の五漢に火帝入れば云云」とあれど五漢は五漢の誤であらねばならぬ。

楚項羽が漢沛公と戦ひ敗れて漢兵の爲に城下に圍まれた。是に於て項羽其妾麗美人等と訣別の宴を張り、「時不利兮離不逝、離不逝兮悲奈何、虞兮虞兮若何」と唱うたので一座皆泣いたことが史記項羽本紀に見えてゐる。この故事を以呂波の前の身の上に當てたのである。「離は着白雜毛なるをいふ、其毛色を以て馬の名としたのである。

**時に利あらず離逝かず、離逝かずして虞氏が涙(以呂波)**  
楚項羽が漢沛公と戦ひ敗れて漢兵の爲に城下に圍まれた。是に於て項羽其妾麗美人等と訣別の宴を張り、「時不利兮離不逝、離不逝兮悲奈何、虞兮虞兮若何」と唱うたので一座皆泣いたことが史記項羽本紀に見えてゐる。この故事を以呂波の前の身の上に當てたのである。「離は着白雜毛なるをいふ、其毛色を以て馬の名としたのである。

**鎖さぬ御代(吉野忠信(卿九))**  
聖代の時は天下泰平であるが故に鎖さずして懸ても懸漢の聞入の恐がない意で、聖代のことにいふ。循吏傳に「以子產爲相……三年門不夜閉、道不拾遺」。

**善策を帷帳の中に運らし、勝つことを千里の外にあらはす善策にて候と子房が秘藏(女補)**  
「帷帳は幕である。史記高祖本紀に「高祖曰、夫運善策帷帳之中、決勝於千里之外、吾不知子房」  
吾不知子房」  
が趣あり(國性齋)  
春秋戰國の世、范蠡越王勾踐に事へ忠節を盡し、勾踐、吳王夫差を伐つて之に勝つや、夫差姑蘇に上り、成を越に請ふ、范蠡承引しないので、夫差、朝陽を爲つて死んだ。吳三桂が貝勒王の請を拒絶したのは、恰も越の忠臣范蠡が夫差の成を請うたのを敵さなかつた趣があるとの意。

**ひかん 比干は紂王を諫めて胸を裂**  
比干は紂王を諫めて胸を裂

史記 五三一

かれ(聖徳太子)

〔比干〕殷紂王の賢臣である。紂王の暴戾を強諫した爲に怒に觸れて胸を裂かれた。殷本紀に、「比干曰、爲人臣者不得以死争、

強諫諫刺、紂怒曰、吾聞聖人心有七竅、割之比干、觀其心也。隙行く駒、隙行く駒の世のたとへ、八十八夜は及びなき、年は十九と二十五の名残の霜と見上ぐれば(大經師) ばや二十二年の光陰、思へば隙行く駒なりし(女史也)

光陰の過ぎ行くこと疾きをいふ故事である。魏豹傳に「人生一世間、如白駒過隙陰耳」とありて、蔡體註に「莊子云、無異騶駒過隙、則謂馬也、小顔曰、白駒謂日影也、隙、隙也、以言速疾若日影過隙也。」

漢母が恵みし韓信が餉は漢家四百年の民を賑はず(三國志)

初め淮陰の韓信家貧しうして城下に釣してゐた。時に洗濯してゐる老女があつて、信の饑えてゐるを見て飯を與へた。後に信は沛公を助け二項羽を滅し、功によつて淮陰侯に封ぜられた。詳しくは淮陰侯傳傳を見よ。

へきやうころ 異國には漢王の后呂太后・辟陽侯に密通し(浦島)

〔辟陽侯〕審食其を云ふ。西漢高祖の后の呂太后に幸せられた人。呂后本紀に、「辟陽侯審食其、爲左丞相、左丞相不治事、令監宮中、如中郎令、食其故得幸太后、常用事、公卿皆因而決事」と見えてゐる。

門を破る樊噲(會我五人兄弟)

「はんくわい」を見よ。

\*りくわう 漢の李廣は石虎を射る(百日曾殺)

〔李廣〕李廣は漢時代の人、射に巧みである。李將軍傳に「廣出獵見草中石、以爲虎而射之、中石沒鏃、視之石也、因復更射之、終不能復入石矣。」

渭濱に釣せし太公望 渭濱に釣せし太公望同車に乗せし帝を學び(川中島)

詩經に據れるもの

落つる物梅あり、その花七つ八つ(三國志)

召南、國風に「摎有梅、其實七兮、求我庶士、迨其吉兮」とあつて、毛傳に「摎、落也」とある。

かいらうどうけつ 里歸りにば小宿をこしらへ、偕老同穴は磯千鳥、比翼連理の契りの中(天穴) 契りば偕老同穴と、一つ棺に一つ穴(羅經三)

〔偕老同穴〕生きては偕に老い、死しては穴を同じうして葬られる義で、夫婦の契りをいふ。邯鄲に「與子偕老」、同王風に「穀則異家、死則同穴。」

柯を伐り柯を伐る、其則遠からず(國性節後日)

太公望は呂尚である。窮困して年老い渭水の濱に釣してゐたが、周文王に登用されて其師となつた。渭水は渭州涇源縣鳥鼠山に出で同州涇陽縣に至り一河に流入。周本紀に、「有呂尚者、東海上人、窮困年老、漁釣至周、而伯將抵之、曰非龍非非龍非龍非龍非龍、所獲霸王之輔、果遇呂尚於渭水之陽、與語大悅曰、自吾先君太公曰、當有聖人適吾周、周內以興、子真也耶、吾太公望子久矣、故號之曰太公望、號與俱、立爲師謂之師尚父。」

太公望は呂尚である。窮困して年老い渭水の濱に釣してゐたが、周文王に登用されて其師となつた。渭水は渭州涇源縣鳥鼠山に出で同州涇陽縣に至り一河に流入。周本紀に、「有呂尚者、東海上人、窮困年老、漁釣至周、而伯將抵之、曰非龍非龍非龍非龍非龍、所獲霸王之輔、果遇呂尚於渭水之陽、與語大悅曰、自吾先君太公曰、當有聖人適吾周、周內以興、子真也耶、吾太公望子久矣、故號之曰太公望、號與俱、立爲師謂之師尚父。」

柯は斧の柄である。斧の柄を執り持つて、木を伐つて以て斧の柄とするに、今伐つて作らうとする斧の柄の長短の手柄は其持てる斧の柄にある、即ち手柄は目前にあるとの意。幽風伐柯篇に「伐柯伐柯、其則不遠。」

かんくわせきやう かんくわせきやう 相挟み、左輔右弼列を引く(國性節後日) 太平の御代に干戈を動かし、御旗を下を騒すあやまり、國制據なく切腹仰付けらるる(善經本平記)

〔干戈威揚〕干は盾、戈は矛、威は斧、揚は鉞であつて、皆兵器である。大雅公劉篇に「矢斨張、干戈威揚、爰方啓行。」

甘棠伐ること勿れ 實に盛んなる計

仁政を移され(魏田川)

召南に「蔽市甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇」とある。蔽市は盛んな貌。甘棠は杜梨である。前は枝葉を切る義、伐は條幹を切る義。召伯は周の太保召公で、伯は方伯の義。爰は草舎で、宿るをいふ。周の太保召公が西方を治め郷邑を巡行し、以て文王の政の布いた時甘棠の下に宿つた。後人召公の徳を慕ひ、その樹を愛して傷けるに忍びず、故に剪伐すること勿れと誦つたのである。

開關たる雉鳩のみさごは河の淵に在り、窈窕とたをやかなる淑女のよきむすめは君子の好迷なり(三世相) 開關と相和らぎ羽をならぶる水鳥は君子のよきたぐひ(弘徽殿)

〔開關〕は和聲。「雉鳩」はみさごといふ水鳥。「遠」は匹。開關の章に「開關雉鳩、在河之洲、窈窕淑女、君子好逑。雉鳩は雌雄情意至つて然る情に亂れず、正しうして別ある鳥である。文王が西伯があつた時、后妃開關の徳譽め大詩である。果林子この詩を應用したのである。

蜘蛛かかつて云云

〔蜘蛛かかつて〕喜來る云云を見よ。

蜘蛛かかつて喜來ると云ふ本文もあり(開八州)

俚言集に「廣益俗說辨」俗間家内に蜘蛛がれば、婦女とるこびありとて祝ふ、今按ずるに

古へより此事をいひ傳へたると見えて、衣通姫の歌に、わがせこが来べきよひなり笹笠のくものふるまひかねてしるしも、〔毛詩陸疏廣〕云、鰥、鰥亦名長脚、此蟲來著入衣、當有鵝客至有喜也、注云、荊州河内之人謂之喜鵝、陸賈曰、蜘蛛集百事喜とありと見えてゐる。

蠢を乗れば性に本づき、智に導かれて化するものは其正しきを失ふ(日本武尊)

人の執る所常道がある、常道は常性に本づく美德であるが、智には偏することあれば、智に従ひ化せらるれば正道を失ふ時があるとの意。大雅蕩、滌民の章に、「天生蒸民、有土有財、民之秉彝、好是懿德。」韓非子、喻老篇に、「智如目也、能見百步之外、而不能自見其睫。」

**薄氷を履む**(加増曾我)  
危険を冒すに喩ふ。小雅小晏に、「戰戰兢兢、薄氷を履む、如履薄水。」

**普天の下率土の濱**、普天の下率土の濱、空飛ぶ鳥蟲蟻まで皆朕がまゝにてある(嵯峨天皇)  
天の徧く覆ふところの下、地の長く濱けるところまで天下總ての意。小雅北山篇に、「普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。」

**雪は五穀の精たりと、唐人も豊年を祝ふ兆のあれ**(最明寺殿)  
小雅信南山篇に「上天同雲、雨雪雰雰」とありて、毛傳に「雰雰雪貌、豊年の多必有積雪」。

**雪は豊年の御つぎ物の世なるかな**(龐大匠)  
雪は豊年の前兆といふに據る。小雅信南山篇に「上天同雲、雨雪雰雰」とありて、毛傳に「雰雰雪貌、豊年の多必有積雪」と見え、孔疏に「融明年將豊、今冬積雪爲宿澤也」

### 十八史略に據れるもの

**賢者を得たる渭水の狩**(抱朴)  
賢者は呂尚を云うたのである。周の西伯(文王)狩して渭水の陽に至り、呂尚(太公望)に遇ひ與に語つて大いに悦び、載せて俱に歸り立てて師となした。十八史略卷之一に、「有呂尚者、東海上人、窮困年老、漁釣至周、西伯將獵、卜之曰、非龍非熊非羆非猨非虎非貔、所獲獨王之輔、果遇呂尚於渭水之陽、與語大悦曰、自吾先君太公曰、當有聖人、吾王周、周因以興、子真是耶、吾太公望子久矣、故號之曰太公望、載與俱歸、立爲師、謂之師尚父。」

**周の武王は木主を作つて殷の世を傾け**(女簡)  
「木主は神主である、位牌をいふ。殷の封土過を侵めぬいによつて、周の武王乃ち紂を伐ち、西伯(文王)の木主を載せて行き殷を滅して天子となつた。十八史略卷一に、「紂不悛、

と見えてゐる。  
**蒿食み呦呦として鳴く小牡鹿**(會稽山)  
小雅鹿鳴の章に、「呦呦鹿鳴、食野之蒿。」山本九兵衛版七古院本のこの文に、「呦呦に「よよ」と傍訓してあれど、正しくは「ういうい」であつて、鹿の鳴き聲をいひ、毛

この書は早く我が國に傳はり、覆刻の五山版のものも現存し、徳川期に入つては既に天和元祿頃盛んに行はれてゐる。

王(武王)乃伐紂、戰西伯木主、以行、…王既殛殷紂王子。  
**周の武王は渭水の獵に太公望と云ふ賢臣を生擒り**(會稽山)  
太公望は呂尚のこと、東海上の人である、窮困して年老し漁釣して周に至つた、文王獵に出で渭水の陽に呂尚に遇ひ、與に語つて大いに悦び載せて俱に歸つた、これより呂尚は文王の太子武王を助けて天下を定めた。太公望を連れて歸つたのは文王であつて武王ではない。十八史略卷一に、「有呂尚者、東海上人、窮困年老、漁釣至周、西伯將獵、卜之曰、非龍非熊非羆非猨非虎非貔、所獲獨王之輔、果遇呂尚於渭水之陽、與語大悦曰、自吾先君太公曰、當有聖人、吾王周、周因以興、子真是耶、吾太公望子久矣、故號之曰太公望、載與俱歸、立爲師、謂之師尚父。」

**周の文王は羗里の獄屋に入り給**

傳に「呦呦然鳴而呼應」と見えてゐる。  
**女を娶る時必ず父母に申すと唐の文にも候今川了庵**  
國風南山之篇に、「取妻如之何、必告父母」。白虎通に、「男不自專娶、女不自專嫁、必由父母也」。

死せる孔明生ける仲達を走らしむ(蜀女)  
孔明は蜀の丞相、諸葛亮の字である、仲達は魏の將軍、司馬懿の字である。孔明が仲達と對陣し軍中に卒した、仲達は孔明がまだ生きるのでないかと思つて敢て還らず、軍を斂めて退いた、百姓等これを見て、死んだ孔明が生ける仲達を走らしめたと譏した。十八史略卷三三國の條に、「亮卒、長史楊儀整軍還、百姓奔告懿、懿退之、姜維令儀反旗

ふ(天神記)  
殷の紂王が九侯を殺さうとしたので鄂侯が之を諫めて止めようとした。紂王怒つて鄂侯を九侯と共に殺して其肉を醃乾にした。文王これを聞いて歎息した。紂王そこで文王を羗里の獄に投じた。十八史略卷一に、「紂殺九侯、鄂侯爭、并帥之、昌(文王)聞而歎息、紂囚昌羗里。」

死せる孔明生ける仲達を走らしむ(蜀女)  
孔明は蜀の丞相、諸葛亮の字である、仲達は魏の將軍、司馬懿の字である。孔明が仲達と對陣し軍中に卒した、仲達は孔明がまだ生きるのでないかと思つて敢て還らず、軍を斂めて退いた、百姓等これを見て、死んだ孔明が生ける仲達を走らしめたと譏した。十八史略卷三三國の條に、「亮卒、長史楊儀整軍還、百姓奔告懿、懿退之、姜維令儀反旗

嗚呼破者將向レ驚、驚不敵道、百姓爲レ之謠曰、死語寫走生伸違とある。もと晋書、宣帝紀に見えてある。

秦王武用を討つて破陳樂を作り、國七徳に化せしとかや(本領我)

秦王は唐太宗文武皇帝で名を世民といふ。武周は定陽の劉武周で、隋の大業十三年隋統してより三年にして秦王世民に滅された。十八史略卷五に「唐秦王世民擊定陽將宋金剛破之、定陽可汗劉武周及金剛皆走死」と見え、「七年春宴三玄武門、奏七徳九功舞、云云」とあつて、註に「七徳、通驍注、太宗爲秦王時、破劉武周、軍中相與作秦王破陣樂曲、及卽位宴會必奏之、以二百二十八人、被銀甲、執戟而舞、凡三變、每變爲四陣、象擊刺往來、後更名七徳舞、七徳者、蓋取秦暴、戕レ兵、保大、定功、安民、和衆、豐財之義也」と見えてある。

盤古王の御代に當つて、蒼天の坤傾き、四季不順して五穀熟せず、女媧といふ聖君赤白の金石を鍛ひ柱とし、傾く天を捧げしより(唐船)

「盤古王」とは天地開闢の初めに出生た王をいふ。列氏・湯問篇に「昔者女媧氏鍊五色石、以補其闕、斷鼈之足、以立四極、其後共工氏與顓頊爭爲帝、怒而觸不周之山、折一天柱、絕地維、故天傾西北、十八史略卷一、太昊伏羲の條に「諸侯有共工氏、與祝融戰、不勝而怒、乃頭觸不周山崩、天柱折地維絕、女媧乃鍊五色石以補天、斷鼈足、以立四極、……於是地半天成。巢林子これ等とつて銀治の濫觴に附會したるの

で、「坤」(西南の間)は西北とすべきであらう。文王は姜里に囚はれ、田世景浩の爲に姜里に囚せられた。十八史略卷一に、「紂殺九侯、鄂侯、并脯之、昌聞而歎息、紂囚羑里。」

唐土の大祖皇帝は韓王堂に一人行幸の例もあり(最明寺殿)

大祖皇帝は太祖皇帝とすべきである。宋の太祖皇帝が成る大雪の夕行して趙普の宅を訪

事文類聚に據れるもの

\*あくじせんり 包むとすれど悪事千里弘微殿(銀事千里)銀事は忽に露はれて、千里の遼方までも傳るとの意。事文類聚に、「好事不出門、惡事傳千里。」

漢の武帝元鼎五年蛙闕つて北狄起り(蛙合戰)このこと事文類聚に見えてある。漢書志に「武帝元鼎五年秋、蛙與蝦蟇群闘、是歲四將

麻に連添ふ蓬 麻につれそふ蓬の

荀子に據れるもの

矢、弓取の妻なれや(源義經)

うたことをいふ。趙普は婦人、宋の太祖太宗の兩朝に歷仕し、卒して韓王に封せられ忠獻と諡した。十八史略卷之六、宋太祖皇帝の條に「上卽位、或微幸功臣之家、不可測、趙普每退朝、不敢脫衣冠、一夕大雪、普恐上不復出矣、久之聞叩門聲、異其、亟出則上立雪中、普惶恐迎拜、卽普堂、設重褥地坐、煖炙饔飩、普差行酒、上以嫂呼之、普從容問曰、夜久寒甚、陛下何以出、上曰吾睡不能著、一州之外皆他人家也、故來見卿云云。」

蓬はくねつて、直くなるものではなければ、麻の中に生ずれば、自然に麻に挟まつて直くなる。それの如く夫が正義の武士なれば、その妻も感化をうけて正義の心がある。勸學篇に「蓬生麻中、不扶而直。」

藍より出でて藍より青し 伯母様の近くで死したらば、縁に引かれて後の世は、親にも逢ひに藍晶、藍より出でて藍より青く、罪より罪の重からん(永朝日)

勸學篇に、「學不可以已、青出於藍、而青於藍、冰水爲之而寒於水」とある故事で、弟子などの師よりも勝るに喩へていふを取つて、犯した罪よりも罪の重い意に用いたのである。序にいふが、この當時大阪神明宮附近は、藍畑が多かつたことがこの文でも知れる。

一を以て萬を知る(持統天皇)非相篇に「以近知遠、以一知萬、以微知明。」

氷は水より出でて水よりも寒く、青き事藍より出でて藍より深し(三世相)勸學篇に、「君子曰、學不可以已、青出於藍、而青於藍、冰水爲之、而寒於水」と見え、弟子が師よりも勝るに喩へた文であるが、巢林子はこれを以て、生前傾城の業吉の死後更に業吉を稱す意に用いたのである。三世相のこの文の、「氷は水より……今の苦しみ去りませでまはは謠曲・檢垣に出でたる。

山に登らざれば天の高きを知らず、

谿に入らざれば地の厚きを知らず、聖賢の語を聞かざれば道の大成を知らず(弘徽殿)

### 書經に據れるもの

木は繩を以て直にし、君は諫めを以て正すとかや(虎が麀)

此の日即ち雉王はいつ滅びるであらうぞ、若し滅びるならば、我これと共に滅びてまいとひはせぬから、桀王の早く滅びてくれよと民が夏の桀王を驅み誅つたのである。湯盤に、現王率萬三衆力、率御夏邑、有衆樂意弗協曰、時曰、予及汝皆亡、亡(唐船頓)

水を歩む御差足、虎の尾を踏む心地にて(釋迦)

周書、君牙篇に、「心之憂苦、若蹈虎尾、涉于春冰」とありて、蔡沈註に「若蹈虎尾、畏其蹙、若涉春冰、畏其陷、言憂危之至、」四端を具し萬善を備ふ、夫れ人は四端を具し萬善を備ふとは周書泰誓の詞なるや(加増竹枝)

勸學篇に、「不登高山、不知天之高、不臨深谿、不知地之厚也、不聞先王之遺言、不知學問之大也。」

人は四端を具し萬善を備へて、萬物の靈長たるを云ふ。四端とは惻隱、羞惡、辭讓、是非の心をいふ。惻隱の心は仁の端である、羞惡の心は義の端である、辭讓の心は禮の端である、是非の心は智の端である、故にこれを四端と云ふ。周書、泰誓に「惟人萬物之靈」とありて、宋蔡沈の註に「惟人得其秀、而靈具、四端備、萬善、知覺獨異、於物也。」

虎の尾、心も勇む虎の尾の酒の爛、めでたい、めでたい(持統天皇)

虎穴に入るのであるから、「虎の尾を踏む」(水を歩む御差足云々)の條を見よとをきかせて、生別はやがて死別となる酒盛を張る意にうたのである。白氏詩文集、虎の尾の酒をを兄よ。

北鶏無晨、靴鶏之晨、惟家之索、今商王受、惟婦言是用、父母の別れには王憂へて亮陰三年(聖徳太子)

「もと云ふ。牧誓に、「武王曰、古人有言曰、靴鶏無晨、靴鶏之晨、惟家之索、今商王受、惟婦言是用、父母の別れには王憂へて亮陰三年」(聖徳太子) 亮陰は天子の喪にこもりおはします時をいふ。説命上に「王宅憂亮陰三祀」とありて、蔡傳註に「亮謂張反、陰烏含反、亮亦作諒、陰古作闇、按喪服四制、高宗諒陰三年。」

牧野に戈を倒まにすと傳へし先言(饒天皇)

若蘭が織りし錦の歌、百花散亂すといへども、夫を思ふ心重き事山の如し(聖徳太子)

若蘭は寶酒の妻蘇氏、聰明で文を善くした。夫が流沙に遷された時、若蘭夫を思ふの情に堪へないで、錦を織り弔文旋圖詩を爲つて夫に贈つた。晋書卷九十六、烈女傳に「寶酒妻蘇氏始平人也、名善若蘭、善屬文、酒、符堅時爲秦州刺史、被徙流沙、蘇氏思之織錦、爲弔文旋圖詩以贈酒、宛轉循環以諫之詞其悽惋、凡八百四十字、文多不録」と見えである。「題錦書」の弔文詩は「春晚落花餘碧草、夜涼低月半梧桐、人隨遠雁、邊城

### 晋書に據れるもの

と牧野に會戦したが、紂王の兵多けれども皆離心離德、前列の徒都て戈を倒まにして内向し、反つて自ら其の後に乘を攻め、以て奔北し、紂王は寶玉を衣て自ら焚死した。武成篇に「受(紂王の名)其旅三若林、會于牧野、罔有敢于抗師、前徒倒戈、攻于後以北、血流漂杵。」

暮、雨映疎簾、繡閣空といふ東頭門の詩であるが、この文を列し下より逆に讀み上げる、空閣繡簾映雨、暮城邊雁遠隨人、桐枯月低涼夜、草露餘花落晚春といふ虞韻の詩となる。巢林子の文に「百花散亂」といへるは、「除花落晚春」とあるを譯したものである。若蘭の弔文旋圖詩の故事に採つて巢林子が、後の文に月益柳前が二子を思ふ情の切な蜀文の手紙をいはずする伏線である。

森森たる人品千丈の松の如し、疎々として節多く、阿々として目高しと雖も、大厦に施す時んば、棟梁の功用大いなるかな(川中島)



晋書卷四十五、和嶠傳に「嬌森森如千丈松、雖言穽何多節目、施之大廈、有棟梁之用」とあるに據つたのである。西瀛九葉軒等版七行本に「穽々」に「り」と傍訓し、「何々」に「か」と傍訓してあれども、穽々は磊々と同じで「ららら」と訓むべく、石の重なる貌。何々も「ら」と訓むべく、ごろごろと石の重なる貌。以て卓出する千丈の松の節節多きをいふ。

しんのしゆじよが母千餘人の女武者を領じて、襄陽に城を築き賊敵を防ぎ夫人城と名づけしは、上代異朝の賢婦ぞかし(最明寺殿)

晋の朱序が襄陽を鎮めてゐた時、苻堅の將符丕來り攻む。序の母城中の婦女を集め、城を築いて敵軍を防いだ、よつて其城を夫人城と云うた。晋書・朱序傳に「序母驪自登城隍行調、西北角嘗先受矢鏃、遂傾百餘婢并城中女丁、於其角斜築城二十餘丈、賊攻西北角、果墮、衆便固新築城、丕遂引退、襄陽人謂之此城爲夫人城」。此城爲夫人城。

螢を聚む 螢を聚め雪を積み壁を穿ちし古も(國性爺後日)

ちし古も(國性爺後日)

孫康家貧にして油を買はれない爲に、冬月雪を積みその光によつて苦學して學者となつたといふ故事である。晋書・孫康傳に「孫康少くして清介、交遊雜ならず、家貧にして油なく、冬月嘗て雪に映じて書を読み、後に御史大夫に至りたる由を載せてある。

### 説苑に據れるもの

打たるる杖もゆかしい あれやうやうと忘れてゐたもの、親のこと又言出して泣かさしやんす、打たる杖もゆかしいといふものな、拳一つ當てられず可愛がられた現在の親(次期日)

莊王冠の緒を切らせ兵を助けし(古野忠信)

賞の疑はしきを重くし罰の疑はしきを軽くせよ(三世相)

前車に懲りず後車の罪業(關八州)

伯牙が琴も鍾子期にあらざれば名を知る者なし(關八州)

伯牙も鍾子期も支那戰國時代の初の人なるも生死の年月詳でない。説苑に「伯牙鼓琴、意在青田、鍾子期曰、善哉巍巍乎若泰山、俄而志在流水、子期曰、善哉洋洋乎若流水、子期死、伯牙鼓琴絕絃、終身不復鼓琴、以爲世無知音者」。

はくゆ 二十四孝の伯翁が父の杖に弱りしを歎きしは孝行(關八州)

伯翁羅伯翁歟は途に作るは漢時代梁の人である、過をなして母に杖で打たれても痛まないで、母の力の衰へたのを察して泣いたといふ。建本篇に「伯翁有過、其母笞之、泣、其母曰、他日嘗得罪管嘗痛、今泣何也、對曰、他日嘗得罪管嘗痛、今母之力不能使痛、是以泣、云云。果林子が父の杖と云へるは、「母の杖といふべきを思ひ誤つたの

である。美女は悪女の敵、さても昔より美女は悪女の敵とはよくよくもよくも傳へたり(西王母)

病は少し癒ゆるより起り、孝は少文より劣る(川中島)

烏帽子の懸緒を切る(關八州)

美女は悪女の敵、さても昔より美女は悪女の敵とはよくよくもよくも傳へたり(西王母)

病は少し癒ゆるより起り、孝は少文より劣る(川中島)

烏帽子の懸緒を切る(關八州)

小蝶が暗中に箕田二郎繼の烏帽子懸緒を切り、繼が源頼平の恩に感じて頼平の爲に死するは、楚の莊王の故事を脚色したものである。復原篇に、「楚莊王賜羣臣酒、日暮酒酣、繼燭滅、乃有美人引美人之衣、美人按絕其冠、告曰、今者燭滅有引妾衣者、妾妾授得其冠、持之、懸火來上、視絕冠者、王曰、賜人酒使醉失禮、奈何欲絕冠、婦人之節而辱士乎、乃命左右曰、今日與寡人飲、不絕冠者不備、群臣百餘人皆絕去其冠、繼而上火、卒絕繼而問、居三年晋與楚戰、有二臣常在、五合五捷、皆却敵、卒得勝之、莊王怪而問曰、寡人德薄、又未嘗異子、子何故出死、不疑如是、對曰、臣嘗死、往者醉失禮、王隱忍不加誅也、臣終不敢以隨敵之德而不盡顯報也、王也、常願肝腦塗地用頸血滿之敵久矣、臣乃夜絶冠者也、遂被晉軍、楚結以強、此有陰德者必有陽報也、此語は蒙求、唐物語、下集集などにも見えてゐる。

# 戰國策に據れるもの

## 鵝蚌の鬪戰

信玄・輝虎中違はせ、かの鵝蚌の鬪戰にて兩國を掴まんと(川中島)

鵝は「かまぞみ」といふ鳥、蚌は「はまがかり」といふ貝。鵝と蚌と相争うて兩ながら漁夫に獲られたといふ故事で、兩者互に利を争うて他の者に獲取されるに喩ふ。戰國策・燕策に、「趙且伐燕、蘇代謂惠王曰、今日臣來過易水、蚌方出曝、而鵝啄其肉、蚌合而箝其喙、鵝曰、今日不出明日不出、即有死蚌、蚌亦謂鵝曰、今日不出明日不出、即有死鵝、兩者不肯相舍、漁者得而并擒之。この鵝蚌の争の故事は、國性館合戰第二にも、鵝と蛤との争ふこととして書いてゐる。「鵝蚌の争を見よ。」

## 狐虎の威を假つて百獸を従へ

戰國策に、「楚王謂群臣、北方畏昭奚恤何如、江乙曰、虎求百獸而食之、得狐、狐曰子無敵食我也、天帝使我長、得豺、今子食我、是逆天帝命也、子以我爲不信、吾爲子先行、子隨我後、觀、百獸之見我而不敢不走乎、以爲然、故遂與之行、獸見之皆走、虎不知、知獸畏己而走也、以爲畏己、今北方非畏昭奚恤、實畏王甲兵也」

## 荆の宣王に江乙が答へ

「狐虎の威を假つて云云」を見よ。

## 鵝蛤の争

この文は鵝と蚌と相争うて共に漁者に獲られたと云ふ故事に據つたのである。戰國策・燕策に、「趙且伐燕、蘇代謂惠王曰、今日臣來過易水、蚌方出曝、而鵝啄其肉、蚌合而箝其喙、鵝曰、今日不出明日不出即有死蚌、蚌亦謂鵝曰、今日不出明日不出即有死鵝、兩者不肯相舍、漁者得而并擒之。鵝蚌の鬪戰を見よ。」

しんしん 大明韃靼向後唇齒の因なし(國性館)  
唇齒唇亡びれば齒が寒い。以て相互に輔佐することに云ふ。戰國策に、「趙之於齊楚也唇齒也、猶齒之有唇也、唇亡則齒寒、今日亡趙、則明日及齊楚也」

唇と齒の如く唇なければ齒寒し(聖徳太子)  
戰國策に、「趙之於齊楚也唇齒也、猶齒之有唇也、唇亡則齒寒、今日亡趙、則明日及齊楚也」

太山は土壤を讓らず、故に積つて高き事をなし、河海は細き流れを擇ばず、故につもつて深きをなせり、人君としては能くもろもろを却けず、故にその徳を末業に照す(五人兄弟)

戰國策・李斯逐客上書に「太山不讓土壤故能成其大、河海不擇細流、故能就其深、王者不却衆庶、故能明其徳」、  
白虹日を貫く 朝日夕日に不忠議の光現じ、白虹日を貫くことななめ

# 大學に據れるもの

一家仁あれば一國仁を興し、一人貪戾なれば一國亂を起す(國性館)  
齊家治國章に、「一家仁一國興、仁、一家讓一國興、讓、一人貪戾一國作亂、其樹如此」。

明徳を明かに生民を受けし天女丸(飛明寺殿)  
大學は治民爲政の道を教へる所である。治民爲政の道を修めて光明の徳を身に得て、更に天下に尊顯し民を親愛し、治民爲政者として天の命を受けたる天女丸。大學に「大學之道在明明徳、在親民」。

ならず(饒暉天皇)  
白虹は兵象である、日は君である、日は君である。白色の虹が日を貫くは國に事變起る兆である。戰國策・魏策に「唐莊曰、事齊之刺主倣也、觀單聞天、攝政之刺禮佛也、白虹貫日」。

人の父としては慈にとどまり、人の子としては孝にとどまる(魯門松)  
人の父となつては慈に止まり、一家を教養して慈愛でなければならぬ、人の子となつては孝に止まり、親に事へて至孝でなければならぬ。大學に「爲人父止於慈、爲人子止於孝、爲人父止於慈、爲人子止於孝」。

緇蠻たる黃鳥丘隅に止る、人として止る所に止まらずんば鳥に如かさるべしとかや(國性館)  
緇蠻(鳥)と鳴く鶯は樹木鬱鬱たる丘隅の地に止る、鶯の如きものに能く止る所を得てゐる、況んや人として至善を擇んで止ることができないならば鳥にすら及ばないであらうの意。大學に、「詩云、緇蠻黃鳥止于丘隅、子曰、於此知其所止、可以人而不曾如鳥乎」。

大學は治民爲政の道を教へる所である。治民爲政の道を修めて光明の徳を身に得て、更に天下に尊顯し民を親愛し、治民爲政者として天の命を受けたる天女丸。大學に「大學之道在明明徳、在親民」。

### 貞觀政要に據れるもの

古を以て鑑とすれば興替を知り、人を以て鑑とすれば得失を明らむ(五人兄弟)

貞觀政要に「唐太宗曰、以古爲鑑可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>興替、以人爲鑑可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>得失」。

魚は廣きを愛し、鳥は深きを樂しむといへり(源義經)

### 中庸に據れるもの

けんけんふくよう 渡す烏帽子を、公時が首の用意に持たせたる三方によそほひのせ、拳拳服膺敬ひ捧げ、お暇申す母禪尼と(開八州)

「拳拳服膺」拳持して胸に著けること。中庸に云、子曰、「回之爲人也、擇乎中庸得<sub>レ</sub>一善、則拳拳服膺、而弗失之矣」。

鷲飛んで天に戻れば魚淵に躍る教も上下の道察らけき(靈女)

「戻」は至の義。察は善の義。鷲が飛んで天に躍るのは道が上天に著はれたもの、魚が淵に躍るのは道が下地に著はれたもので、いづれ

貞觀政要・卷五に「林深則鳥棲、水廣則魚游」。漢の光武帝は一日に千里の馬を得たりつる(小栗判官)

貞觀政要・第二納諫篇に「光武有<sub>レ</sub>獻千里馬及寶劍者」。太平記・卷十三、龍馬進奏の條に「後漢の光武の時、千里の馬と寶劍とを獻する者あり」。

も道の作用によるものである。かく作用の廣大な上下の道の教も分明なるといふ意。中庸・第十二章に、「詩云、鷲飛戻天、魚躍于淵、言其上<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>察也」。

禮儀三百威儀三千備つたる唐土(國性爺後日)

禮儀はなほ禮制といふが如く、禮の大綱たるものを云ひ、威儀は曲禮で、禮の細目たるものを云ふ。中庸に「禮儀三百、威儀三千、待其人然後行」。

### 東坡詩文集に據れるもの

＊直千金の春へ 治まる御代の名の、直千金のほるべかな(賀古教信)

蘇軾が春夜の詩に「春宵一刻直千金、花有清香月有陰。歌管樓臺聲細細、鞦韆院落夜沈沈」。

ういへんせん 羽衣へんせんたる仙人形を現じ、帝を揖し再拜して白さく(國性爺後日)

「羽衣翩翩」羽衣は仙人女などの著る羽衣。翩翩はひらひらとする貌。翩は輕翳、躍は舞ふ貌。蘇軾の後赤壁賦に「夢一道士、羽衣翩翩、過<sub>レ</sub>臨皋之下、振<sub>レ</sub>手而言曰云云」。

愁を掃ふ玉箒 詩を釣る釣針 およそ酒には威徳あり、愁を掃ふ玉箒、詩を釣る釣針、思ふ事なく折る事なし(絶句)

蘇東坡の飲酒の詩に、應呼釣詩針、亦號掃愁箒。

強將の下には弱兵なし(源義經)

(其盤本平記) 強い將軍の部下には弱い兵卒はあらず。蘇軾の題<sub>レ</sub>連公壁文に、「俗語云、強將下無弱兵」。

酒は愁の玉箒 酒は愁の玉箒、千金春宵一刻飲み(女夫池)

しゅんしやうまきゑ 本膳は春正時繪の價千金(酒香童子)

「春正時繪」山本春正の時繪をいふ。春正は通稱次郎三郎と云ひ、法蓮に叙せられ、春正時繪の祖で、天和二年九月歿した、年七十三。この文は、宋の蘇軾の春夜の詩句に「春宵一刻直千金を、春正時繪の價千金にもちつて文をなしたものである」。

＊春宵一刻千金(國性爺後日)

春の宵は花に清香あり、月に陰あつて、一刻千金の價値があるとの意。宋の蘇軾の春夜の詩に「春宵一刻直千金、花有清香月有陰。歌管樓臺聲細細、鞦韆院落夜沈沈」。

＊千金春宵一刻飲み(女夫池)

「春宵一刻直千金」の詩句を作りかへたのである。蘇軾の春夜の詩に「春宵一刻直千金、花有清香月有陰、歌管樓臺聲細細、鞦韆院落夜沈沈」。

＊白露江に横はり水光天にまじはる(振袖始)

蘇軾の前赤壁賦に「白露橫江、水光接天」。法蓮は「白」を「清」と改む。

＊花に清香月に陰(女夫池)

春の宵は花には清香あり月に陰がある。宋の蘇軾の春夜の詩に「春宵一刻直千金、花有清香月有陰、歌管樓臺聲細細、鞦韆院落夜沈沈」。

# 杜甫詩に據れるもの

こらいまれ 齡ば七十、古來稀なる

堅親父(浦島)

「古來稀七十歳をいふ、人生は短くして七十歳まで生きる人は古來稀であるとの意よりいふ。杜甫の曲江の詩句に、「人生七十古來稀」。

水魚の因(國性爺後日)

親密なこゝ魚の水に於けるが如きを云ふ。杜甫の詩句に、「稍令計復安、自製魚水親」。

伐木丁丁として山更に幽かな

り(嵯峨天皇)

# 白氏詩文集に據れるもの

朝政し給はず 色に耽り酒宴に誇

り、朝政し給はぬ御意見の種にも

(國性爺)帝不覺の御歎き、朝政し

給はず(酒香亭)

長恨歌に、「春宵苦短日高起、從此君王不早朝」。源氏物語・桐壺の巻に、「思し出づるにも猶朝まつり」とは思らせ給ひぬべからり」。

謠曲模倣妃に、「扱も后宮世にましましし時

だにも、朝政は怠り給ひぬ」。

江南離別の夕の雨 江南離別の夕の

杜甫の題「張氏贈唐詩」に、「香山無伴獨相求、伐木丁丁山更幽、潤道餘寒歷、水雪、云云」。

頻繁として三度顧るは天下の謀計と

かや(川中島)

いげしげに三度までも顧み訪て賢士を得ようとするは、蓋し天下を開濟する謀計の爲であるとの意であつて、蜀主劉備が三度も諸葛亮の草廬を訪問して其出處を懇望した故事に據る。杜甫の蜀相の詩句に、「隔葉黃鸝空好音、三顧頻繁天下計、兩朝開濟老臣心」。

雨、驪山宮の朝の霜、とくとく落ちて谷川の、流れ別るる谷谷

や(千疋犬)

江南は揚子江南の地、こゝでは滄海江頭をいふ。支那長安の女が商人の妻となつて滬陽に往き、夫に見棄てられて愁歎にくれ、琵琶を弾いてゐたのを白居易感起き、其音調あはれに入をしの物寂しい感を引き、座中の入皆涙を流したことを、琵琶行に見えてゐる。

かろろのゆき、髭と髪とは香爐の

雪、五湖の波また面の皺(唐船廬)

香爐峯の心なんめり、簾を捲けば

お香に嵐が雪なもつて(雪女)

「香爐峯香爐峯は廬山の一峰である。白氏文集・卷四十三、草堂記に、「匡廬奇秀甲天下山、山北峯曰香爐峯」と見えてゐる。白氏文集・卷十六に、「香爐峯雪、撥て簾看」の詩句がある。この詩句によつて、髭・髪の白りこゝとを香爐の雪と云ひ、簾を捲けば雪を香爐峯の心なんめりと云うたのである。

彼の白居易に泣かせたき

【調へ合せ三つこの緒云々】を見よ。

鳥に反哺の孝あり(百合若(聖徳太子)

鳥は親の恩を忘れず、成長の後は親に、哺反すといふ。張華注、禽經に、「慈鳥曰孝鳥、長則反哺其母」。白居易の慈鳥夜啼の詩に、「慈鳥失其母、嗚嗚吐哀音、晝夜不飛去、經年守故林、夜夜夜半啼、聞者爲消聲、聲中如告語、夫盡反哺心、云云」。

狐爾菊にかくれすむ

【粟松、杜の枝云々】を見よ。

君が一日の情に妾が百年の命を失ひ(娥)

白氏文集・井底引銀瓶の詩句に、「爲君一日恩、誤妾百年身」。

きやうげんきぎよ 狂言綺語のたは

ぶれも讃佛乗の因とは、よくこそ

これを傳へたれ(百日曾我)

「狂言綺語」白氏の中詞、即ち小説などをいふ。香山寺白氏洛中集記に、「願以今生世俗文字之輩、狂言綺語之過、轉爲將來世世讚佛

垂之因、轉法輪之緣」。桐の葉落ちて飛ぶ蟻、思ひ悄然たる深更に、廊下の障子に影うつり(弘徽殿)

長恨歌に、「秋雨梧桐葉落時、……、夕殿螢飛、……、孤燈挑盡未成眠」。

琴詩酒の三つ友 琴詩酒の三つ

友を離れ、基を打つて勝負を諍ひ

給ふこと、別に楽しむ所はし候

か(國性爺)

北窓三友の詩に、「欣然得三友三友者爲誰、零醴雜藥酒、酒罷輒吟詩、三友送相引、循環無已時、云云」。

車を推く岩よりも人の心はさかしく

て、舟をうかぶる淵よりも深きは

人の心(孕常盤)

太行路の詩に、「太行之路能摧車、若比人心是担途、巫峽之水能覆舟、若比人心是安流」。

妾な塚はと引留め問へば、妾は古

への刈董殿の、墓標繁りし春の

草(萬年草)

白氏文集卷二、飄飄二の部にある詩句に、「古墓何代人、不知姓與名、化作路傍土、年年春草生」。

三千の撫草も色香を失ふためしに

て(天智天皇)

唐玄宗皇帝の後官の美女三千人も、絶世の美人楊貴妃に比べては氣配されて色香を失うたと云ふ故事に據つたのである。長恨歌に、「楊家有女初長成、養在深閨人未識、天生麗

杜甫詩——白氏詩文集

質雖三自笑、一朝選在君王側、同以眸一笑百媚生、六宮粉黛無顏色、……後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身、……

三千の寵愛唯一人(酒吞童子) 楊貴妃が後宮の美女三千人の中にひとり寵愛を得た故事(前條を見よ)をとりて、恒子姫一人寵愛を得始うたことに云うたのである。

三千の容色 凡三千の容色顔を悦ばしめ(國性爺) 長恨歌に、「後宮佳麗三千人」とあるに據つた。しらへ合せし三つの緒を何にたとへん、軒の急雨ささめごと、彼の白居易に泣かせたまき(聖徳太子)

琵琶行に、「……大絃嘈嘈如急雨、小絃切切如私語、……却坐促絃絃轉急、凄凄不似向前聲、滿座重聞皆掩泣、就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕」とあるに據つたのである。白居易が元和十年江州の司馬に左遷され、翌年秋湓浦口に客を送つた時、夜船中に婦人が琵琶を弾するを聞き、其音に京師の調あるを怪しみ婦人の身元を問ひしに、「もと長安の倡女で琵琶を學び、色衰へるに及んで商人の妻となつて此地に居る者であつた。遂に酒を命じて歌曲を彈せしめた所、その音のあはれなにつれて急に遷客たる感を起して泣き、琵琶行の詩を作つて婦人に贈つたのである。」「三つの緒」はその條を見よ。

唐の帝の三千宮、蝶の宿のささめ(宮)(女天池) 「唐の帝」は唐の玄宗皇帝のこと。「三千宮」は三千の宮女のこと。「蝶の宿の私言」とは、玄宗皇帝の後宮に美女の懸裾風に類り、玄宗帝

と楊貴妃と私言するを云うたのである。長恨歌に、「後宮佳麗三千人、……風吹仙袂飄飄舉、猶疑驚舞羽衣舞、……臨別殷勤重垂詞、詞中有雙雨心知、七月七日長生殿、夜半無人私語時、……」

女郎狐のはけをして男ばかりすと、樂天が詞も思ひやられたり(井筒) 白氏文集卷四、古塚狐の詩に、「古塚狐狐且老化為婦人、顔色好頭雙鬢髮而雙粧、大尾曳作三長紅袿、徐徐行樹、荒村路日欲暮時、人靜處或歌或舞或悲啼、翠眉不舉花細低、忽然一笑千萬態、見者十人八九走、假色迷人猶若是、真色迷人應過此。」

燈に背向けた顔のあの瘦せたことわ(天網島) 白居易の詩句に、「映映殘燈背壁影」とらのをの酒 心も勇む虎の尾の酒の棚々、めでたいためてた(待統天皇) 竹本出雲抄清正文正、山本九兵衛版、七行本に「虎の尾の酒」とあれども、按ずるに他藍尾酒の誤であらう。容齋四筆に、「白樂天元日對酒詩云、三杯藍尾酒、一榼膠牙錫、又云、老過占他藍尾酒、兩餘取得到頭身、云々」とあつて、藍尾酒とは最後に飲む酒杯の意、藍は髮或は鬘の音借字と云ふ。書經部「虎の尾」を見よ。

軒の急雨ささめごと、彼の白居易に泣かせたまき 泣かせたまき 「しらへ合せし三つの緒云々」と見よ。 花を踏んでは同じく惜む花紅葉、堪へず紅葉青苔の地(槍狩) 「花を踏んで云云」とは、白氏文集卷十三、春中與盧同回隱華陽觀同居の題の律詩中の句、「踏花同惜少年春」を作かへたのである。この詩句は和漢朗詠集、春の部にも出てゐる。 「堪へず紅葉青苔の地」はその條を見よ。

びよりのやなぎ びよりの柳よわよわと、御髪おもげの御息(關八州) 「未央卿」未央は「びよ」と讀むが、昔は「びよう」と讀んだもので、都の錦標、風流源氏物語(元祿十六年刊)卷三に「未央の柳は眉に似たり」とあつて、「未央」に「びよう」と傍訓してある。唐玄宗皇帝の未央宮に瀟かに粧を凝らせる柳の如き眉。長恨歌に、「太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉」とあつて、楊貴妃の眉を形容した句を應用したのである。 深く交はせし睦言は、翼をならぶる鳥にだに劣らじとこそ契りし(融大匠) 長恨歌の句に、「夜半無人私語時、在天願作比翼鳥」。 鳥松桂の枝に鳴き、狐蘭菊に藏れ栖む(雪女) 白氏文集卷一、凶宅詩に、「最唱松桂枝、狐藏蘭菊整芙蓉」。 よしみよしみの言の葉に化され渡る狐川(淀姫) 狐が美女に化けるといふ故事(女郎狐のは

けをして云々)を見よに據つて、勝二郎が傾城の甘言に、玩をぬかした事を、狐川その條を見よ)を渡るにいひかけたのである。「よしみ」(好)は親交の意。 \*らんかん 雲の黛寂滅として眼元にしほの関干たり(小栗判官) 誰まつ蟲のりんりんりんりんとして怒の涙関干たり(弘徽殿) 「関干」涙の溢れ流れる貌。長恨歌に、「玉容寂寞淚闌干」。 六宮の粉黛も色を失ふ 三千人の寵愛唯一人、六宮の粉黛も色を失ふ日蔭草、其嫉み草身に生ひて(酒吞童子) 「六宮」は後宮をいふ。「粉黛」は白粉眉墨を以て粧へる宮女をいふ。長恨歌に、「回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顏色……後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身」とあるに據つたのである。そして恒子姫の美貌にいひなしたのである。 驪山宮長生殿のささめごと(反魂香) 驪山宮も長生殿も唐玄宗帝が楊貴妃と共に陸言(私語)の歌樂に耽つた宮殿である。長恨歌に、「七月七日長生殿、夜半無人私語時、在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」。 驪山の春の匂ひ水、膚の艶の温かに、夜半の初床引しめて(天智天皇) 長恨歌に、「春寒賜浴華清池、溫泉水滑洗凝脂、侍兒扶起嬌無力、始是新承恩澤時」とあるを譯したのである。 龍門原上の土に骨は埋むとも名を

ばげまじ(五人兄弟)

屍骸は龍門原上の土中に埋没されて空しくなつても名は朽ちないで世に留ることだらう。「龍門」は輿地紀勝、卷三十、江州の條に、「龍門山在徳化縣西南五十里、與瀆施山相對如門、瑞昌所出盆水自此二山間、過至大江」と見えてゐる。白氏文集、卷五十一、白樂天が元居敬の文集に題した詩に、「遺文三十軸、輔金玉聲、龍門原上土、埋骨不埋名」。林間酒を焼めて紅葉を焼く(西王母)

(抱符)

白氏文集、卷十四に、「林間燻酒、燒紅葉、石上題詩、掃綠苔矣」。この詩句は平家物語、卷六、紅葉の事、及び謡曲、紅葉狩、和漢朗詠集などにも引用されてゐる。

遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聴く、香爐峯の雲は簾を捲げて見る(凱陣八島)

白氏文集、卷十六に見えてゐる「遺愛寺鐘欲し枕聴、香爐峯雲捲簾看」の詩句であつて、和漢朗詠集にも出てゐる。遺愛寺の人の相の鐘聲は枕をか耳をもたげてこれか聴き、香爐峯に雲の降れる朝は簾をかかけて眺め、更に俗事にかかづらはなりの意。遺愛寺、香爐峯は白氏文集、卷四十三、草堂記に、「匡廬奇秀甲天下山、山北峯曰香爐峯、峯北寺曰遺愛寺、介三峯之間、其境勝絶又甲廬山、云云」と見えてゐる。

百聯抄に據れるもの

朝一片の雲に咽び、谷には瀑川石流れて、夜孤輪の月を碎く(天神記)

百聯抄に、「山頭夜戰孤輪月、洞口朝吐一片雲」。風破窓を射て燈火消え易く、月疎屋を穿ちて夢成り難し(釋迦)

百聯抄解に、「風射破窓燈易滅、月穿疎屋」。百聯抄に、「山影入門推不出、月光鋪地輝」。百聯抄に、「山影入門推不出、月光鋪地輝」。百聯抄に、「山影入門推不出、月光鋪地輝」。

孟子に據れるもの

飽くまでに食ひ、煖かに着て、……畜類同然(同性節)

滕文公上篇に、「飽食煖衣、逸居而無然、則近於禽獸」。水に溺るとき手をもつてせず(開八州) 嫂水に溺るととも手を取つて上げぬは外典の戒め(五人兄弟)

男女の間は嫌疑を受けぬやうに互に慎まねばならぬので、物のやりとりでも直接にせぬが禮である。離婁上篇に、「淳于髡曰、男女授受不親、禮也、孟子曰、禮也、曰、嫂溺則援之

夢難成。山影門に入つて推せども出でず、月光地に鋪いて拂へども還生ず(天神記)

百聯抄に、「山影入門推不出、月光鋪地輝」。百聯抄に、「山影入門推不出、月光鋪地輝」。

以手乎、曰、嫂溺不援、是豺狼也、男女授受不親、禮也、嫂溺援之以手者、權也。一遊一豫、斐たる君子の一遊一豫、國を靡かず旗棹の、直なる捉樂しめり(百日曾我)

一遊一豫、斐たる君子の一遊一豫、國を靡かず旗棹の、直なる捉樂しめり(百日曾我)

一遊一豫、斐たる君子の一遊一豫、國を靡かず旗棹の、直なる捉樂しめり(百日曾我)

一遊一豫、斐たる君子の一遊一豫、國を靡かず旗棹の、直なる捉樂しめり(百日曾我)

一遊一豫、斐たる君子の一遊一豫、國を靡かず旗棹の、直なる捉樂しめり(百日曾我)

擧げたと云ふ。告子下篇に、「然則擊焉爲援之任、是亦何鳥獲而已矣」とありて、趙注に、「鳥獲古之有力人也、能移擧千鈞」。史記、秦本紀に、「武王有力好戲、力士任鄙、烏獲、說、皆至大官」。内(懸物抽)本領曾我

内(懸物抽)本領曾我

ろはう 羽旄の美欣欣然と喜びて、君が御狩を待ち顔に(蠲丸) 明王の佃獵には、百姓車馬の聲を聞き羽旄の美を見て(五人兄弟)

羽旄の美を見て(五人兄弟)

窮民を養ふは古の道(蠲丸)

窮民を養ふは古の道(蠲丸)

庖に肥えたる肉有り(千足大)

寡孤獨の浪人者(松島)

而無妻曰鰥、老而無夫曰寡、老而無子曰  
獨、幼而無父曰孤、此四者天下之窮民而無  
レ者也。

管籥の聲、羽旄の美、  
欣欣然と喜びて君が御狩を待ち顔  
に(鄭九)

【管籥】管も籥も笛である。梁惠王下篇に「今  
王政樂於此百姓聞王鐘鼓之聲、管籥之音、  
舉欣欣然有喜色也」趙註に「管籥、籥、或  
曰、籥者管短而有三孔、段玉裁云、凡竹爲  
者皆曰管」

狗彘人之食を食へども制すること  
能はずといふ聖人の詞當れるか  
な(千疋大)

狗は犬、彘は猪である。聖人は孟子をさした  
のである。梁惠王上篇に「狗彘食人食而不  
レ知檢、塗有餓殍而不レ知發、人死則曰、  
非我也誠也、是何異於剽人而殺之、曰、非  
レ我也兵也」

五十歩を以て百歩を笑ふ(抱朴)

五十歩敗走したのも百歩敗走したのも其歩に  
差こそあれ、にげたことに於て同一である。  
それに五十歩にげたら、百歩にげたら者を  
笑ふは、恰も恥者が驕者を笑ふの類である。

梁惠王上篇に「孟子對曰、王好戰、請以戰  
喻、填然鼓之、兵刃既接、棄甲曳兵而走、  
或百歩而後止、或五十歩而後止、以五十歩  
笑百歩、則何如、曰、不可、直不百歩耳、是  
亦走也」

滄浪に冠を濯ひ口すすぐ 世の時を  
見て滄浪に冠を濯ひ口すすぐ秦の  
川勝といふ武士あり(聖徳太子)

世俗に染まらず身を潔くする意。滄浪は禹貢  
に「嵎夷塗を遷き東流して滄となり、又東上  
て滄浪の水と通じ」と見えである。離婁上篇  
に「有、滄子歌曰、滄浪之水清兮、可、以、濯  
我纓、滄浪之水濁兮、可、以、濯、我、足、孔子曰、  
小子聽之、清斯濯纓、濁斯濯足矣、自取  
之也」

懐楊惻隱は仁の端(貫古教傳)

「惻隱」は飛躍の貌。「惻」は傷の切なのをい  
ひ、「隱」は痛の深きを云ふ。公孫丑上篇に、  
「今人乍見孺子將入於井、皆有惻惻惻隱  
之心、非所以內交於孺子之父母也、非所以  
要譽於鄉黨朋友也、非學其聲也、而然也、  
由是觀之、無惻隱之心、非人也、無羞惡之  
心、非人也、無辭讓之心、非人也、無是非  
之心、非人也、惻隱之心仁之端也」

須彌山を挟んで大海を飛び越  
ゆ(關八州)

梁惠王上篇に「挾三太山、以超北海」とある  
を改作したものである。

するげう 往來の老若男女、するげ  
うの者、雄兎の者、柴賣るの者も立ど  
まり(天智天皇) 刃物を堅く禁制は  
民を憐む明王の、芻蕘の者雄兎の  
者、悦ありや此の所(吉岡染)

【芻蕘】似城吉岡染(山本九兵衛版八行本の  
二二の文に、「芻蕘」を「するげう」と假名が附  
けてある。蓋し「芻蕘」を「するげう」「するげ  
う」の兩譯に讀まれたもので、下學集にも、  
「芻蕘、芻刈、草者、蕘、取柴者、毛詩、謂于  
芻蕘」とありて、「蕘」に「せう」に「げう」の兩譯  
の振假名がしてある。(應長十一年寫本の下學

集には「芻蕘」に「するげう」と傍訓してある。  
「蕘」は草を取るもの即ち草刈を云ふ。孟子、  
「蕘」は薪を取るもの即ち樵夫を云ふ。孟子、  
梁惠王下篇に「芻蕘者、雄兎者、花焉」

性は善なる涙なり(生玉)

人の性はもととも善なるものである。放蕩な  
嘉平次も目別に親の慈悲心の深いのを見て  
は、怒に本性の善に隨つて落涙したつてある。  
人性は善であるとの説は孟子の極論した  
ところである、委しくは公孫丑上篇、四端の  
章について見よ。

是に似たる非あり 是に似たる非あり  
り」と註せし程明道の詞盛なるか  
な(蛙合歌)

眞の非は人も能く知つて惡ふことなけれど  
も、一見善なるやうに見えてその實非なるも  
のがある、これは人を最も惡はずものである。  
程明道の詞とあれども何に見えてみるか見當  
らぬ。盡心下篇に、「惻隱、原、恐、其、亂、也、  
也」とありて、朱熹集註に「尹子曰、爲其似  
是而非、惡人之深也」と見えである。宋熹  
も尹焞も程子に就いて學んだ人であるから、  
程明道の詞にいひなしたのであらう。程明道  
は程頤のことで宋時代の大家である。

太山をわきまはさんで北海を超ゆるこ  
とは能はず、王の王たるは能はず  
にあらずとかや(國性齋)

梁惠王篇に「挾三太山、以超北海、語人曰、我  
不能、是誠不能也、爲長者、折枝、語人  
曰、我不能、是不爲也、非不能也、故王之  
不王、非挾太山、以超北海之類也、王之  
不王、是折枝之類也」唐船嶺今國性齋に、

「太山をわきまはさんで北海は飛躍ゆるとも、不  
道を以て代を奪はんとは能はぬ事」とあるの  
で、孟子に據つたもので、太山をわきまは  
さんで北海を飛躍ゆることは勿論不可能のこと  
であるが、よしや可能のこととしても、不道を  
行つて天下を奪はうとは到底出来得べきもの  
でないの意。

六經天下を纂つるを視る事敵れたる  
跡を脱ぐが如し、唯父母に隨うて  
愁を解くとかや(浦島)

舜帝は天下を業として惜まないこと、恰も破れ  
た草履を脱棄して更に惜まない如きである。  
唯父母と居れば欣然と樂んで愁を解くことである。  
盡心上篇に「舜視棄天下、猶棄敝屣  
也、糞食而遷、遷海濱而處、終身翫然、樂  
而忘天下」

大人は非禮の禮にかかはらず、かる  
が故に義によつて其親しきを滅す  
とかや(升舟)

大徳の人は禮に似て禮にあらざることは爲な  
い、故に義を全うせう爲には父子兄弟の私  
親をも滅す」と云ふ。離婁下篇に「孟子曰、非  
禮之禮、非義之義、大人弗爲」左傳、禮公四  
年の條に「大義滅親」。

たんしこしやう 降參の者どもはつ  
と簞食鹽漿して、大御酒菜物御前  
に列ね(日本武尊)

御知行の百姓  
は簞食鹽漿とやらで お迎に出  
で(千疋大)

【簞食鹽漿】簞は竹筒、食は飯である。飯を竹  
器に盛り漿を蓋に容れたるをいひ。行旅の携

「太山をわきまはさんで北海は飛躍ゆるとも、不  
道を以て代を奪はんとは能はぬ事」とあるの  
で、孟子に據つたもので、太山をわきまは  
さんで北海を飛躍ゆることは勿論不可能のこと  
であるが、よしや可能のこととしても、不道を  
行つて天下を奪はうとは到底出来得べきもの  
でないの意。

えるといふのである。梁惠王下篇に、鐘鼓樂以迎王帥。

手の舞ひ足の蹈みとも知らず(柳田川)

歌舞極つて覺えず舞蹈するをいふ。離婁上篇に、不知足之蹈之、手之舞之」とありて、集韻に「其心歌舞、若手舞音樂者手舞足蹈、應三節節、而不不自知也」と見えてゐる。

天に順ぶ者は存し、天に逆ぶる者は亡ぶとかや(百台著)

離婁上篇に「順天者存、逆天者亡」。

天に二つの日なし 天に二つの日なし、地に二人の王なし(女楠)

天に二つの日なし、地に二人の殿御なし(靈女) 我が唐土の道として天に二つの日なしとて、二人の帝を一時に拜したる例なし(大綱冠)

萬章上篇に、「孔子曰、天無二日、民無二王」。

天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず(國性篇)

天の時とは、時日干支方位等をいひ、「地の利」とは、險阻城池の要害をいふ。公孫丑下篇に、「天時不如地利、地利不如人和」。

父子兄弟の間は善を責めず、善を責むる時んは離る、離る時んは不祥

これより大なるはなし(大磯虎)

父子兄弟の間で相責めるに善を以てすれば、父子の恩兄弟の義を傷けるに至るからである。離婁上篇に、「古者易子而教之、父子之

間不責善、責善則離、離則不祥莫大焉」

孟子のかこみは方七十里、民なほこれを狹しとす(千疋大)

梁惠王下篇に「齊宣王問曰、文王之師方七十里、有諸、孟子對曰、臣有之、曰若是其大乎、曰民猶以為小也」。

文王の靈臺は民悦んで造る(國性篇後日)

「靈臺」を見。朋友信あるの道(聖徳太子)

信を以て交はるは朋友の道である。滕文公上篇に、「使契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有敘、朋友有信」。

ほくきゆういう 北宮黝が勇にも超え、孟施舍が義にも優る(國性篇後日)

よしまた某、北宮黝が勇力、孫子吳子が智略あるにもせよ(千疋大)

「北宮黝」北宮は姓、黝は名、支那上代に於ける勇氣を養つた諸武者である。公孫丑上篇に、「北宮黝之養勇也、不膚體、不目捷、思以二毫挫於人、若撻之於市朝、不受二於鬪、亦不受二於萬乘之君、視刺萬乘之君、若刺褐夫、無嚴諸侯、惡聲至必反之」。

まうししや 北宮黝が勇にも超え、孟施舍が義にも優る(國性篇後日)

「孟施舍」支那上代に於て義を養つた權威なかつた勇者である。公孫丑上に、「孟施舍之所養

勇也、曰視不勝勝也、擊敵而後進、慮勝而後會、是畏三軍者也、余豈能爲之必勝一哉、能無懼而已矣」。

孟子・梁の惠王に語つて曰く、庖に肥えたる肉有り、野に餓卒あるは、獸を宰いて人を食はしむるの君、民いづくんぞくみせん、刑罰を省き、稅敷を薄くし、仁政を施さば、民進んで堅甲利兵をも碎きつべし(千疋大)

「餓卒」はその條を見よ。梁惠王上篇に「梁惠王曰、寡人願安承教……(孟)曰、庖有肥肉、廐有肥馬、民有飢色、野有餓殍、此無政而食人也、獸相食且人惡之、爲民父母、行不義、不究於辜、獸而食人、惡在其爲民父母也。また同篇に「王如施仁政於民、省刑罰、薄稅敷、深耕易耨、壯者以暇日、

### 文選に據れるもの

己が古郷の北風に勇んで嘶ふ勢(埤川波鏡)

精の妙質火徳の明輝、辯才聰明にして能く物言ふ、靈鳥いかんぞ時の險しきに遭へる(女護鳥)

簡其孝悌忠信、入以事其父兄、出以事其長上、可使制之、抵以捷、案楚之駑甲利兵矣」

明王の佃獵には云云(五人兄弟)

「うば」を見よ。做れたる悪者を脱ぎ棄つ 明朝の封祿は、做れたる善者を脱ぎ棄てたりと願みず(國性篇後日)

惜しげなく棄てるさまに譬ふ。盡心上篇に、「舜視棄天下、猶棄敝屣」。

女に餘んの布あり、男に餘んの粟あり(國性篇後日)

滕文公下篇に「農有餘粟、女有餘布」。



「おはしましは軒檻であるが、巢林子は檻檻をかく訓み、鳥籠のことである。戸檻は鳥籠の窓。鶉鴒は西域に産する鶉鳥なるによつて金(西方を金となす)精の妙質といひ、丹き端なるによつて火(南方を火となす)徳の明臨といふ。隨は、隨は隨の意。」

渴しても盗泉の水を飲まず(雪女) 渴しても盗泉の水は飲まず(國性爺後日)

上しや困難に運ふとも不義はしないとの。 噓。陸機の猛虎行に「渴不飲盗泉水」。

金精の妙質火徳の明輝 龍の中の鶉鴒云云を見よ。

古郷の北風に勇んで嘶ふ(堀川波鼓) 胡馬は北風吹けば勇んで嘶く、そのやうに故郷はなつかしいものである。卷二十九古詩に「胡馬依北風、越鳥巢南枝」。

胡馬北風に嘶ふ(會稽山) 胡馬は生國北方なれば、北風に依りし故國を慕うて嘶くと云ふ。卷二十九古詩に「胡馬依北風、越鳥巢南枝」。

仁ある君も用なき臣は獲ふ事能はず、慈ある父も益なき子は愛する事能はず(國性爺合戦)

卷十九、晋祖求自試表に、「慈父不能愛無益之臣、仁君不能善無用之臣」。

夢の蟲の董裝を去るは、苦きに馴れて苦きを知らず(天神記)

放歌行に、「夢遊遊董裝、習苦不言非、小

人自驟、安知曠士驪」。 貞松は年の暮きに彰はれ、忠臣は國の危きに見ゆ(今川了俊)

卷五、潘岳(字は安仁、晋時代の人の西征賦に「勁松彰於歲寒、貞臣見於國危」。

鳥は古巢を慕ひ、北國の馬は北風に嘶く(水朔日)

禽獸すら故郷を戀しく思ふの意。卷二十九古詩に「胡馬依北風、越鳥巢南枝」。

野駒の駒の優しくも古郷の風の北にいはえて嘶けば用明天皇(二枚繪)

卷二十九古詩に「胡馬依北風、越鳥巢南枝」。

はうび白髪 はうび白髪(國性爺) 石上に碁盤を据ゑ、老人の大なる眉で白髪なること。

林にすぐれて高き木の青砥五郎が出頭を故夢の侍猜みたて(今川了俊)

卷二十七、李膺の運命論に、「獨立之資、於俗、理勢然也、故木秀於林、風必摧之」。

貧家には古人疎し(大經冠) 家貧なるときは故舊の人も疎遠にして訪問せぬ。卷八、晋の曹顔遠の感舊詩に、「貧賤親戚、

不幸の子は慈ある父も養はずといふ(川中島)

曹祖求自試表に「慈父不能愛無益之子」。

巫山の神女雲となり雨となり好し(小栗判官)

常陸小萩の美容をいふに巫山の神女が且に朝雲となり暮に行雨となるといふ故事に據つたのである。「雨となり好しは、「雨と爲り」の「爲り」に「容好し」をいひかけたのである。

卷十、宋玉の高唐賦に、「昔者先王嘗遊高唐、夜而夢、夢見一婦人、曰妾巫山之女也、因以爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮陽臺之下、且朝視之如言、故爲立廟、號曰朝雲」。

巫山は四川省夔州府巫山縣の東に在る。高唐賦の此文は、先王が夢に巫山の神女と契つたが、これと別に巫山の神女のこと、「弘微殿鶴羽雁家にも見えてゐる。「案の始皇の御顔に云云(五五頁)を見よ」。

禮記に據れるもの

汗の如き繪畫 汗の如き繪畫、かへつて爲義御助け候はば(鎌田)

繪畫は王言の意。天子の言は「たげ出づれば反らざること、恰も汗が體内に反らざるが如きによつていふ。細衣繪に、「子曰、王言如絲、其出如綸、王言如綸、其出如綵」。文心影譜に、「其出如綵、不反若汗」。

狐は死して岡部の六彌太(會稽山)

狐は死ぬる時、首を任んで大丘の方に向けるといふ故事によつて、狐は死して丘を岡部の姓にかけたのである。檀弓篇に、「古之人有言、曰、狐死正丘首仁也」。

國に杖つき九九に餘りしことぶきの(今川了俊)

國を歩くに杖を用ひ八十一歳を超えた壽の意。王制篇に「五十杖於家、六十杖於郷、七十杖於國、八十杖於朝、云云」。

揚雄が甘泉の賦を作り、文章に案じ勞れ寐し夜の夢に五 六腑を吐くを見て、その朝より心神疲れ果てしとかや(畦合戦)

揚雄、字を字聖といひ漢時代の學者である。重訂文選集評、卷二、揚子雲甘泉賦の題下の註に、「甘泉本秦離宮名、漢武帝復增廣之、桓譚新論、雄作甘泉賦一首始成、夢胸出收而入、内、明日遂卒」とあるに據つたのである。

越鳥南枝に巢をかけ、胡馬北風に嘶ふ(國性爺)

越は支那南方の國である、その越から来た鳥は南枝に巢をつくり、また胡は北狄である、その胡から来た馬は北風に嘶くといふこと、故郷を慕ふに喩ふ。卷二十九古詩に、「胡馬依北風、越鳥巢南枝」。

ぐふたいてんのかたき 俱不戴天の

敵を討ち(會稽山)

「俱不戴天の敵」俱に天を戴かぬ敵即ち君父の

君子ここに心を盡す 一國を領し一

郡を治むる者心を盡すは刑罰の一

事、一人を殺すさへいかにばかり心

を用ゆるとか思ふ、故に君子ここ

に心を盡すと禮記と云ふ書に見え

たり(國性論後日)

王制篇に「凡作刑罰無赦、刑者懼也、例

著成也、一成而不可變、故君子盡心以

刑罪極まつて三度奏す 刑罪極まつ

て三度奏するなどは天下統一統の

代の政(國性論)

王制篇に「成獄辭、史以獄成告於正、正

聽之、正以獄成告于大司寇、大司寇聽之

棘木之下、大司寇以獄之成告於王、王命

三公登觀之、三公以獄之成告於王、王

三又然後制刑、云云。」

左道を執つて政を亂り、備を行ひ

て衆を疑はしむるを殺すとい

ふ(國性論後日)

左道は邪道である、人道を尙ぶを貴となす、

故に正の術に非ざるを左道と云ふ。王制篇

に「執左道以亂政教、作淫聲異說奇

器、以疑衆殺、行僞而堅、寔僞而辯、雖非

而博、順非而遷、以疑衆殺、云云。」

臣憂ふ時は君ともに憂ふ(弁簡)

經衣篇に「君以民爲體、體非子に上下

父の讐俱に戴く天の罰(加増我)

曲禮に「父讐非與共戴天」とあるを作りか

へたのである。

佞人の詞は甘き事室の如く、人を損

ふこと又よりなほ遠なり(編山筵)

勉めて顔色を和げて人の氣に入らうとし、人

の意を迎へて巧みに飾りていふぢげ人の詞

は、聲のやうに甘けれども、忽にこれが爲に

人を損ふこと又よりなほ遠なり(編山筵)

と云へり(養生偶田川)

老子第二十五章に「自矜者不長」。

矜は愚人の病にして禍その身に及ぶ

千里も一歩に始まれり(吉岡梁)

老子第六十四章に「九層之臺、起於累土、千

里之行、始於足下」、白居易の續座右銘に

「千里始於足下、高山起於微塵」。

大國を治むるは小鮮を煮るが如く、

雜味小鮮を煮るにいらひ過せば、

鱗も鱗も一つに崩れその魚の形を

失ふ、云々(關八州)

小鮮は小魚である。老子に「治大國若烹

小鮮、以道蒞天下其鬼不神、云々」とあ

りて、王注に「若烹小鮮者不擾也、孰則

多言……以道蒞天下、則其鬼不神也、神

不害自然也、物守自然則神無所加、

云々」。

# 老子に據れるもの

身を危殆に墮くこと、なほ奴で身を害するよ

りも速である。表記篇に「君子淡以成、小人

甘以墮」、莊子山木篇に「小人之交甘如飴」。

堅る時は必ず父母に申すと、禮記と

かやにもありと聞く(會稽山)

卷三十、坊記篇に「取妻如之何、必告

父母」。

天長地久 源氏の御代は裏釘返し、

天長地久なるべきに口惜しや淺ま

り(大鏡)

天福篇に「聚賭靴鹿裘帶索鼓琴而歌、孔子

問曰、先生聽何也、期曰、天生萬物、惟人為

貴、吾既恃之為人、是一樂也、男女之別、男

尊女卑、吾得爲男矣、是一樂也、人生有不可

及之福祿者、吾行年九十矣、是三樂也」。

えんし 唐土の僂師といふ者人形な

り(源義經)

天の長く地の久しきが如く、萬萬歳を経て

變らぬこと。老子に「天長地久、天地所以

能長且久者、以其不自生、故能長生」。

\*天の網 我は天の網、とてもものが

れぬ命のうち、親達に逢ふからば、

木の空にさらされて、かばれぬ鎖

で突かれても(天經論) 此處まで迷

ひ來て天の網、地の繩に搦められ

し此物七(博多)

天の網は廣大で、その目疎なるがやうなれど

も、一人も漏らすなく、善をなした者には

必ず善報があり、惡をなした者に必ず惡報が

ある。老子に「天網恢恢疎而不失」(心中

# 列子に據れるもの

作つて、手足を働きの言はす

る機械にて敵をばかりし例あ

り(豫物論)

(履師)周穆王時代に居た僂師である。湯問

篇に「周穆王西巡狩、道有獻工人者、履

師、王問曰若有何能、曰臣有所造、願王親

之、翌日謁見王、王曰若與僂來者何人、對

曰臣之所造能倡者、王視之趨步俯仰信人

也、巧夫鑿其頭、則歌合律、擊其手、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、其目視之、則聽合音、其足履之、則舞應

節、千變萬化唯其所適、王以爲貴人也、與之盛經內御、血親之、枝膠終、倡者既其目、而昭王之左右侍妾、王怒欲誅三儂師、偃師立剖啟倡者、以示王、皆傳之會草木、膠漆白黑丹青之所爲。

ちよくわ 女媧と云ふ聖君、赤白の金石を鍛へ柱とし、傾く天をささげしより(唐船術)

〔女媧支那太古の女帝であつて、伏羲の妹であるといふ。湯問篇に、「昔者女媧氏、鍊五色石以補天、斷鼈足以立四極。」〕

芭蕉の鹿 牡丹の胡蝶芭蕉の鹿、いづれを指して現とも覺めたる我を知らざれば、夢路を夢と誰か知る

論語に據れるもの

朱を奪ひし紫 朱を奪ひし紫の、色争ひも疑ひも、又は妬みも嵐吹く(吉野忠信) あけて奪ふも紫袂紗、印判そつと取出し(大經師) 陽貨篇に「惡紫奪之朱也。この意は、紫は間色(まざあはせの色)なれども、艶美なるによつて人人その色を好み、朱の正色を奪ひ取つてこれに代るを惡む、佞人が君に忠實しう媚びへつらうて、終に國家を傾け敗るに至るを惡むといふのであるが、この文はそれまでの意ではなうて、文飾に故事を引用した

べき(國性爺後日) 樵夫鹿を獲、之を腹中に隠し芭蕉でその上を覆うて置いて、其の處を忘れて鹿を獲たのは夢であつたと思つたといふことで、覺夢の辨じ難きをいふ。周禮玉篇に「鄭人有薪於野者、遇駭鹿、獨而擊之斃之、恐人見之也、遂而藏之諸腹中、覆之以蕉、不勝其喜、俄而遺其所藏之處、遂以爲獲焉、願其盜而誅其事、傍人有聞者、用其言而取之、既歸告其家人曰、吾新者夢得鹿而不知其處、吾今得之、故直真夢者矣、云云。

もろこしのえんし 「えんし」を見よ。

までである。「あけて奪ふも紫袂紗」は、紫袂紗を明けて奪ふである。朱を奪ふ名を立てて、庶土人は惡めども、かの一本の初ゆかりゆかしなつかし(柳大匠) 陽貨篇に「子曰、惡紫奪之朱也。古今集卷十七、雜歌上、葉平朝臣の歌に「紫の一本故に武野野の草はみながあらはれと見る」

過つては改むるに憚ること勿れ(田村將軍) 人は思はないで理に通ふことを爲すことがあ

るものである。そのやうな過失をした時は畏れ憚らないで速に悔い改めるべきである。學而篇に「過則勿憚改」。 優艶關雎の樂

しみ、君穆に民安く(安夫池) 〔優艶關雎〕優艶は和らぎみややかなこと。關雎は詩經周南の首篇で、文王と后妃とが琴瑟和合して、后妃の徳を頌し九詩である。即ち夫妻相和せし徳の爲に、下民其感化によりて、夫婦の道正しくなつた。八佾篇に「子曰、關雎樂而不淫、哀而不傷。」

一簞の食一瓢の飲これ顔回が樂しみ(川中島) 平生食ふところのものは一簞の飯、飲むところのものは一瓢の水漿に過ぎぬ。この窮境にあつても泰然として顔回は學を好んで道を樂しんだ。雍也篇に「子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也。朱註に「簞、竹器食飯也、瓢、瓢也。」

古の聖代に臣五人あつて天下大いに治るとや(天神記) 泰伯曰、「舜有臣五人而天下治。臣五人とは帝舜の臣五人のこと、即ち禹、稷、契、皋陶、伯益を云ふ。昔帝舜はこの賢臣五人あり、相輔けて天下大いに治つた。

色の徳には隣あり(重井翁) 里仁爲「徳不孤必有隣」とあるをもちつたのである。 浮世の富貴は浮べる雲(浦也) 「うかべるくも」を見よ。

牛を割くに雞の刀を用ゐんと(國性爺後日) 大小相逆せぬをいふ。陽貨篇に「夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀」の逆用である。 奪ふも業 「あけを奪ひし紫(五四六頁)を見よ。」

えきしやさん(娥) 〔益者三友〕己に益ある友に三様ある。季氏篇に「孔子曰、益者三友、損者三友、友直友諒友多聞、益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣。」

夏は股の昔、股は周の昔、その昔の禮に因りて損益する所を知らば、百萬代の末かけて(井筒) 夏股周と世は變り、時勢に隨つて禮の細目を或は損し、或は益したことは、その時代の典籍によつて知らるべく、禮の大綱は百萬代の末かけて決して變改あることはない。爲政篇に「子曰、股因於夏禮、所損益不可知也、周因於股禮、所損益不可知也、其或繼周者、雖百世不可知也。」

かぶん 我何ぞ下開を取ちんと宜ふ所(酒吞童子) 〔子開〕已より下位または己れより年少な目下の者に問ひ聞くこと。公冶長篇に、「敏而好學、不恥下問。」

君若たれば臣もまた臣(堀川波鼓) (文武五人男) 君は君たる道を盡し、臣もまた臣たる道を盡すこと。顔淵篇に、「齊景公問政於孔子、孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子。」

君は禮を以て使ひ、臣は忠を以て君に事ぶ(傾城八花形)

八倍篇に「君使臣以禮、臣事君以忠」。

義を見て爲ざるは勇無し(鎌田川中島(源義經))

義まきに爲すべきを見ながら、なほ逡巡して敢て爲ざるは勇氣が無いものである。爲政篇に「子曰、非其鬼而祭之謂也、見義不爲無勇也」。

朽ちたる木をば雕るべからず 聖人の詞は違ひなし、朽ちたる木をばふるべからずとは、今こそ思ひ知られたれ(西王母)

公治長篇に「空予畫殿、子曰、朽木不可雕、糞土之牆不可朽也、於予與何諱」。

關雎は樂しんで淫せず(魁)

詩經・周南の首篇にある關雎の詩は、后妃の美德に出でて其辭も正しい、故にこの詩を誦つて樂しんでも、樂しみの度に過ぎて淫靡になるやうなことはないとの意。八倍篇に「關雎樂而不淫」「うんけんわんしよ」開、關雎を「雎鳩云々」をも見よ。

君子は雀鳥を射ずといふ(用文章)

君子は雀鳥の不意を翹うて之を射るやうな罪なことは、爲すに忍びないによつて爲さなからしよ。述而篇に「子釣而不綱、弋不射宿」。

君子は日々に三たび吾身を省るといふ(天智天皇)

學而篇に「曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎」。

賢に易へて色を重んじ(心五戒語)

學而篇に「賢賢易色」とあるを作りかへたのである。

孔子も怪力亂神を認めらる(虎が鷹)

孔子も物怪の事や匹夫の勇力や悖逆の事は教化に益なく、神の事は人智の及ばない所として、これ等の事は語つたり行つたりせぬやうに誡められた。述而篇に「子曰、不語怪力亂神」。

孔子も道行はずといへり(井筒)

「道行はず」を見よ。

公治長は刑戮にかかる 文王は姜里に囚はれ、公治長は刑戮にかかれり(出世貴譜)

公治は姓、長は名である、孔子の弟子で賢者なりしかども、無實の罪を受けて獄に投ぜられたことがある。公治長篇に「子謂公治長、可妻也、雖在縲絏之中、非其罪也、以其子妻之」。

心のゆくところ 御行方の知れざれば、よしよし心のゆく所志ともいふなればと、思ひ込みつつ大津道(西王母)

心のゆく所これを志とらふ。爲政篇下、「子曰、吾十有五而志於學」とありて、朱註に「心之所之謂之志」と見えたる。

これをも忍ぶべくんば執れをか忍ばざらん(天智天皇)

なほ能く忍んでこれを爲さなければ、如何なる非行でもまた能く忍んで爲されるであらう。八倍篇に「孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也」。

三年父の道を改めずとは儒教の教(用明天皇)

三年は父死して其喪にある間である、父の行つてゐた事はよしや少少の不都合があつても、子たる者は三年間は改めないで其儘に行ふことが孝の道である。里仁篇に「子曰、三年無改於父之道可謂孝矣」。

子の燕居せるとき申申如たり天天如たり(風神)

孔子が閑暇無事で室に居る時は、其容貌寬舒で和悦である、蓋し徳内にあるによつて、その徳が容貌顔色に現はれてゐるのである。述而篇に「子之燕居、申申如也、天天如也」。

思無邪の三字は神拜の元本、母不敬の三字は祭典の至用、神を祭ること神の在すが如くすべしといへり(天智天皇)

「思無邪」は正に歸す、即ち誠である。「母不敬」は敬に歸す。思無邪の三字即ち誠は神拜の元本である。母不敬の三字即ち敬は祭典の至用である。神を祭る事が来り在するのと思つて誠敬を盡すべきであると云うのである。爲政篇に「詩三百一言以蔽之、曰思無邪」とありて朱注に「程子曰、思無邪者誠也、……經禮三百曲禮三千、亦可一言以蔽之」、曰母不敬。八倍篇に、「祭神如神在」。

上知と下愚とは移らず(天德虎)

常人は智徳の善惡によつて或は賢ともなり愚ともなり、されども上知の者と下愚の者は一定して、智では移されぬものである。陽貨篇に「子曰、唯上知與下愚不移」。

松柏の凋むに後るとや(孕婦)

歳大いに寒うして萬木凋落する後に至つて、獨り松柏依然として其操を變へぬ、以て君子は一旦事變に遭遇してもその節操然として見ゆるべきものであるに喩ふ。子罕篇に「子曰、歲寒然後知松柏之後凋」。

素きを後 素きを花の雪、野山や春を描くらん(反魂香)

繪畫はまづ彩色を施し、後に白粉を以てその間に分布し、以て彩色を引立つやうにする。この文は、八倍篇に「繪事後素」とあるを引用して、「花の雪」にいひつけ、素と雪との縁によつて文を飾つたのである。傾城反魂香は繪師に関する故事を用ゐたによつて、冒頭から繪に関する故事を用ゐたのである。

浸潤の諧、膚受の懇、浸潤の諧、膚受の懇行はれざる明王の御代傳はりて六十六代(開八州)

「浸潤」は水の紙などを漸次浸潤すを云ひ、「膚」は人の行爲を説るをいふ。「膚受」は肌を受ける所の利害の身に切なるを云ひ、「懇」は己が冤を訴へるをいふ。人を説るに漸を追うて巧に言ひ廻すこと、恰も水が紙を浸し潤すがやうにして急がないときは、聽く者知らず知らず之を信することとなる。又己が冤を訴へることが急で、身に切に片時も忍ぶことが出来ぬやうに告げて來るときは、遂に聽く者に言に動かされて、委しう調べないで之に應ずる者である。この浸潤の諧と膚受の懇とは人の察知し難く、情に引かれて判断を誤

り易いものであるが、克くこれを察知して二の二者行はれざる明王の御代と云うたのである。顔淵篇に「子曰、爰割之謂廣受之類、不行焉可謂明也已矣。」

神を祭ること神の在すが如くす  
小人の過は必ず文るといへり(田村將軍)

小人の過は改めようと思ふことは切實き、過を取繕つてごまかさうとする。子張篇に「子夏曰、小人過也必文。」

せつせつしし 今昔丞相が無實の罪に沈んで、恨の念力切切惚惚として切るが如く刺すが如し(天神記)

父父たれば子も子たり(驛九)

父の道を改めぬは孝の一つ(聖徳太子)

徳孤ならず 徳孤ならず、尹の大納言師賢の猶子(用文章)

人の徳ある者は孤立することなく、必ず類あつて之に従ひ親しむ。里仁篇に「徳不孤、必有鄰。心中重井筒に「色の徳には隣ありといへるも、論語にあるこの文を滑稽に作かへ

たのである。鷄を割くに鷹ぞ牛の刀を用ひん(川中島)

成りんじ事をば説かず、遊げんじ事をば諫めず、既に往んじを咎めず(徳)

暴虎馮河して死するも厭はぬ大將には從はずと孔子も戒め(圓八州)

久しうして敬す 互の黙禮感歎に、久しうして敬すとはかかる事をや謂つべし(今川了俊)

人初めて交る時は相敬すれども、久しうなれば押れて遠慮せず、遂に隙隙を生じてに至るものである。然るに人と交はること久しうして、愈これ敬ふは篤行の人である。公治長篇に「子曰、學乎仲善與人交、久而人敬之。」

に「子曰、學乎仲善與人交、久而人敬之。」

に「子曰、學乎仲善與人交、久而人敬之。」

に「子曰、學乎仲善與人交、久而人敬之。」

子罕篇に「子曰、有美玉於斯、韞匱而藏之、求善買者。」

急ぎ匹夫が首取つて神慮をすすしめ(用明天皇繼人鑑) 匹夫匹婦も志を奪はず(女護曆)

匹夫一夫、または賤しい男の意にいふ。平家物語のこの文意は、匹夫匹婦といへども其守る所の志苟も堅ければ、其身は死んでも其志は奪はれない、蓋し其守る所已にあつて人の與る所でないからである。子罕篇に「子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也。」

富貴は浮べる雲 富貴は浮べる雲を見よ。

父母います時は遠く遊ばず(天護虎)

道行はれず 既に孔子も道行はれずといへり(井筒)

公治長篇に「子曰道不行、乘桴浮于海」と見えてゐる。孔子が天下に賢君無く、人倫道徳の道を行はれないのを歎じたのである。

むらさき 主人以春の巾着を明け奪ふも紫袱紗、印判そつと取出

「藝陽貨篇に「子曰、紫之奪朱也」とあるによつて、「明けて奪ふ紫」を「紫袱紗」といひかけたのである。論語のこの文意は、紫は間色なれど、紫が故に、朱の正色を奪うて之に代る極むとの意。

物食ふ時んば物言はずと論語に書きしも理かな(實古教傳)

弓矢の藝その争は君子なりと、孔子もこれを譽め給ふ(魯孫山)

夢にだも周公を見ず(天神記)

繪の事は素きを後 古語にも繪の事はしろきを後とゆふ波の(天智天皇)

教へずして殺すを虐といひ、戒めずして成るを視る、之を暴といふ(圓八景)

強め教へることをせず民の向ふ所を知らざらぬで、悪事をなしたからとて直に殺すは殘酷不仁の甚しいもので、之を虐と云ふといふ、戒め勵まないので、遂にその成功を檢視し

強め教へることをせず民の向ふ所を知らざらぬで、悪事をなしたからとて直に殺すは殘酷不仁の甚しいもので、之を虐と云ふといふ、戒め勵まないので、遂にその成功を檢視し

て非を責めるは之を暴といふ。楚曰霜に「子  
曰、不し教而殺、謂之虐、不し戒視に成、謂

### 和漢朗詠集に據れるもの

梁王の園に入らざれども、雲群山  
に滿つ、夜度公が樓に登らねども、  
月千里に明なり(冷泉節)

「梁王の園」とは、梁の孝王の兔園をいふ。五  
臺山終布山等の名高い山の形を築いて、そ  
の輝景色を眺め觀望の趣を極められたといふ故  
事。「度公が樓」とは、晋の庾亮が南樓に上つ  
た故事。

和漢朗詠集 冬部、謝觀の詩に、「晚入梁王之  
苑、雲滿群山、夜登度公之樓、月明千里」。

遊子なほ残月に行(弘徽殿)

「佳人盡く履粧を飾り云云」を見よ。

\*一張の弓の勢 御代萬歳の 御目見  
え、一張の弓の勢たり(日本武尊)

將軍の威勢をいふ。和漢朗詠集に將軍の題に  
て、「三尺劍光水在手、一張弓勢月當心」。

珠囊霜滿てり、一聲の玄鶴天に暝  
く、巴峽秋深し、五夜の哀猿月に  
叫ぶ(頼山陽)

珠囊は「たまのうてな」であつて仙人の居る  
所。玄鶴は黒鶴である。鶴二千歳を經れば羽  
色黒に變ずると云ふ。巴峽は支那荊州にある。  
五夜は夜の五更(午前四時頃)をいふ。仙家の

之暴」。

### 和漢朗詠集

珠囊に霜滿ちて、玄鶴一聲高空に鳴き、巴峽  
秋深うして、五更の月下に猿の哀聲を聞くは、  
實に清凄の感に打たれることぢや。和漢朗詠  
集 雜部、謝觀清賦に、「珠囊霜滿、一聲之玄鶴  
暝天、巴峽秋深、五夜之哀猿叫月」。

同じく惜む春なれや、花を踏んだる  
駿足(融大臣)

和漢朗詠集 卷上、白居易の春夜の詩に「背し燭  
共燼深夜月、落花同惜少年春」。この全詩は  
白氏文集卷十三に出である。

秋耽たる燈火も共にあはれむ深夜の  
月(天智天皇)

秋耽は光のあきらかなるをいふ。和漢朗詠  
集 春夜、白居易の詩に、「背し燭共燼深夜月、  
落花同惜少年春」。

柑子は寒せる栗の餅、鼠も所の男山  
女郎花とぞなりにける(弘徽殿)

和漢朗詠集 秋の部、源順の詠女郎花の詩句  
に、「花色如三葉粟、俗呼爲女郎」とあるの  
と、古今集の序に「男山の音を思ひいで、女  
郎花の一葉をくねるにも」とあるとに據つた  
のである。

佳人盡く履粧をかざり、魏宮鐘動

いて、遊子猶殘月に行(弘徽殿)

和漢朗詠集 雜部、賈島の曉賦に、「佳人盡飾  
於晨粧、魏宮鐘動、遊子猶行於殘月、函谷鶴  
鳴」とあるに據つたのである。魏王宮中の美  
女が曉こめて化粧する頃、曉の鐘鳴り響き、  
出遊する旅客が函谷關を殘月に仰り、鶴鳴  
いて朝を告げるとの意。序云、魏宮の魏宮は  
齊國宮中のことを誤つたものであらう。淵鑑  
類函、居處部に、「齊書曰、置鍾于景陽樓上、  
令宮人聞鐘聲、早起妝飾」と見えてある。

嘉辰令月歡び極りなし、萬歲千秋樂  
しみ未だ盡きず(大掛物)

嘉辰令月は、元三上巳、端午などの目出度  
よろこばしい時節をいふ。辰は時また九日の  
義、今は善の義。泰平の聖代、嘉辰令月に當  
つて極りない歡がある、千秋萬歲を經べき個  
世であるによつて、今の樂しみはまだまだで、  
盡きないのであるとの意。和漢朗詠集 雜部、  
謝觀の雜言詩に、「嘉辰令月歡無極、萬歲千  
秋樂未央」。

風新柳の髪は梳る 風新柳の髪は梳  
れども、手にも取られぬつくも髪  
おどろの鬢(浦島)

頭髮風に吹かれてはらはらすること、和漢  
朗詠集 春の部、都段香の春暖の詩「氣鬢風  
梳三柳髮、水消浪洗蒼苔類」の句に據つた  
のである。

諫鼓苔深うして鳥驚かず、刑鞭蒲朽  
ちて蟻空しく去る(頼丸)

「諫鼓」は昔時臣下の者が主君に諫言を上る時  
に打つた鼓である。「刑鞭」は罪人を打懲す鞭  
で、蒲で作つたもの。君王の徳高く天下泰平

なるによつて、臣下諫言を上るものなく諫鼓  
を打たねば、その下に苔深く生じ鳥も鼓の音  
に驚かず、また罪を犯す者なきによつて刑鞭  
を用ゐないのと、徒に朽ちて蟻に化して飛去  
るとの意。和漢朗詠集、江相公の詩に、「刑鞭  
蒲朽蟻空去、諫鼓苔深鳥不驚」。

岸の平砂を白波に照せば云々  
「平砂を白波に云云」を見よ。

槿花一日 槿花一日椿壽八千春、  
天地と共にして百萬代も限な  
き(動物類) 槿花一日の榮(葉物)

和漢朗詠集 秋の部に「槿花一日自爲榮」と  
ある句に據つたのである。槿はムクゲのこと  
でアサガホともいふ。ムクゲは木槿の字種を  
轉じたのである。槿花は朝に開いて夕に凋れ  
ども、一日の榮のおつづから足つてあるとの  
意。また短き間の榮華の意にいふ。

\*雲行客の跡を埋む 是より奥には  
人住む體もなく、雲行客の跡を埋  
み、初山櫻二ふさ三ふさ、ちりち  
り水の谷川や(盛久)

和漢朗詠集 雜部 紀齊名が愁賦の詩に、「山遠  
雲埋行客跡、松卷風散旅人夢」。盛曲一角  
仙人に「山遠うしては雲行客の跡を埋み」。

蝸牛の角 蝸牛の角の上に何事をか  
争ふ、石火の光のうちに此身を寄  
す(大掛物) 海野小太郎行氏・新田

と武功の争ひ、蝸牛の角のつめ  
立ち、いどみはげむといへど  
も(百日智哉) 今南京雜軼蝸牛の角

の國争ひ(國性爺後日)

人人が名利を争ひ合ふは恰も蝸牛の角上に相争闘するやうなもので、眞に愚のわざである、その身命幾ばくもないのは、電光石火の間にやどりたるもの如く、はかなきものであるとの意。白居易の詩に、「蝸牛角上争何事、石火光中寄此身」。この詩は和漢朗詠集巻下雑部にも出てゐる。

刑鞭蒲朽ちて壁空しく去る、諫鼓苔深うして鳥驚かず(堀山莊)

「諫鼓苔深うして云云(五四九頁)及び一洞むなき谷の聲云云(四二五頁)を見よ。げんとうそせつ 玄冬素雪の寒き夜(酒吞童子)」

〔玄冬素雪云は黒の義、冬は五行配當の色にとるときは黒に當るが故に玄冬といふ。素雪は白雪、和漢朗詠集雑部、源順少河原院賦の句に、「玄冬素雪之寒朝。」〕

さんじやくの斬蛇 漢に三尺の斬蛇あつて四百年の基を起し(堀山莊)

「三尺」は和漢朗詠集雑部にも「漢高三尺之船、坐制諸侯」と見えて御をいふ。劉季後に漢太祖高皇帝となる。夜小道に従つて漢中を過ぎる際、大蛇あつて徑に當る、劉季劍を抜いてこれを斬つた、老嫗あつて哭して言ふやう、吾子は白帝の子である、今は赤帝の子がこれを斬ると、因て忽に姿が消えたといふ。蓋し白帝子は秦、赤帝子は漢をささるゝにて、漢高に秦を滅すべきを云うたものである。三尺の劍の光は秋の霜、腰の間に横へたり(大原問答(五人兄弟) 和漢朗詠集雑部、將軍の題にて源順の詩に、

「雄鷹在腰、披則秋霜三尺」。同雑部、將軍の題にて陸將軍の詩に、「三尺劍光水在手、一張弓勢月當心」。

夏夏の夏第三の庚の日を初伏といひ、第四の庚の日を中伏といひ、立秋後の初庚の日を末伏または後伏といひ之を合して三伏と云ふ、暑熱最も盛な頃である。和漢朗詠集夏部、源英明の詩に、「池冷水無三伏災、松南風有二聲秋」。同じく蟹の歌をすま云云を見よ。

じせんのりの外故人の心 振さけ見れば西の海渺渺としてばかりなき、じせんのりの外故人の心ゆたのたゆたにあこがるる(文武五人男)

二千里外の故郷の友の心を思遣るとの意。和漢朗詠集巻上秋の部、白居易の詩に、「三五夜中新月色、二千里外故人心」。

松根に倚つて腰つきも千年の翠うつす(反魂香)

和漢朗詠集に、「倚松根而摩腰、千年之翠滴手」。

天も酔うたり やりが前垂西さす、天も酔うたり人も酔ふ、初盃の内祝ひ(壽門松)

和漢朗詠集春の部、普丞相の花時天似醉序に「春之暮月、月之三朝、天醉于花、桃李盛也」云云。

大底四時心惣てねんころなり、中に就いて臍を断つ是秋の天(小栗判官)

憂多の身は春夏秋冬のその間絶て苦慮に満ちてゐるのであるが、就中尤も斷臍の思あはるは

秋の天である。和漢朗詠集秋部、白居易の巻上の詩に、「大底四時心惣て、就中臍断思あはる天」。この詩は白氏文集巻十四に見えて秋。ただ一文字に頭に挿せば、二月の雲と散るもあり(國性爺合駁)

和漢朗詠集上、春部、橋在列の詩に、「倚松根而摩腰、千年之翠滴手、折梅花而挿頭、二月之雲落衣」。

手まづ遮る杯、然らば文六殿よりといへども、さすが酒好み、手まづ遮る杯の、母がひに私から堀川被杖)

和漢朗詠集春の部、普原雅規の染し流送羽解の詩に、「確し石運來心藕待、幸流道過手先遮」。

天も花にや酔ひ心地 雑のお御酒の桃の酒、天も花にや酔ひ心地(本領曾我)

この文は雜駁をして桃酒を酌む三月三日の頃は、桃李の花盛りの時なれば、天も紅を潮して恰も酔へる心地であるとの意。和漢朗詠集巻上、春の部、普公の花時天似醉序に「春之暮月、月之三朝、天醉于花、桃李盛也、云云」。

天も酔うたり 天も酔うたりを見よ。

浪舊苔の鬚をこそげる 顔を映すも氷の劍逆手に持つて、浪舊苔の鬚をこそげる願ちよつる(國性爺後日)

和漢朗詠集春に「水消浪洗舊苔鬚」とある。南枝花はじめて開く(雲女)

日當りよき南枝花は暖なるによつて花まづ開く。和漢朗詠集に、普原文時の梅をよんだ詩に、「誰言春色徒東到、露暖南枝花始開」。

二月の雲と散る 「唯一文字に云々」を見よ。

二千里の外故人の心、三五夜中にあらねども(國性爺)

「二千里の外」は地の通なるをいふ。「三五夜中」は十五夜中のこと。和漢朗詠集巻上、秋の部、白居易の詩に、「三五夜中新月色、二千里外故人心」。この詩は白居易の詩に、「三五夜中新月色、二千里外故人心」。この詩の意は、八月十五夜に東方より新にさし出た月光の隈なく照すに對して、遠方に居る故郷の友の心を思ひやるとなり。

年年歳歳花相似たり、人同じからずとかや(源義經)

和漢朗詠集雑部に、「年年歳歳花相似、歳歳年年人不回」とありて、全詩に古文眞寶前集巻上に見え、宋之間の作ではなくて、劉希夷の詩であるといふ。

巴秋秋深し五夜の哀猿月に叫ぶ

「蕭蕭霜滿てり云々」を見よ。

平砂を白波に照せば、今も夏の夜の下立賣のほのぼの(堀川被杖)

和漢朗詠集夏夜の詩句に、「月照平砂夏夜霜」とあるを碎いた文である。

蘭省の花の時 蘭省の花の時錦帳の下、姫君様とかしづかれし昔忍ぶの軒の下(宮南彦)

蘭省の花の時とにも交せし盃も、廬山の雨とふる涙(孟微駁)

和漢朗詠集雑部、白居易の詩、「蘭省花時錦

帳下、廬山雨夜草庵中」とあるに據つたのである。さてこの詩の意は、管ては尙書書に於つて花時三春の候は、錦帳の下に侍し共に盃を交したこともあつた、今は悲しい身となつて廬山下に草の庵を結び、獨わび住居して涙が雨のやうにふるとの意。「關省」は尙書省をいふ。「廬山」は匡廬山をいふ、周の時仙人崔裕がこの山に廬してゐたが故にこの名がある。

**露菊の白花一半黄なり 露をふくみてうなづくば、露菊の白花一半黄なりけるとかや** (伊豆日記)

露を帯びた黄菊の花既に半分だけは咲きそめ

## 淮南子に據れるもの

**淮南の橘江北に植うれば枳となる** (釋迦) (國性翁後日)

楊子江南の橘を楊子江北の地に植まれば枳に變じりやうに、人はその境遇によつて變化するとの喩。爾雅に、「江南種橘、江北爲枳」。淮南子に、「橘樹之江北、則化而爲枳」。

**五星の天度十二周天二十八宿** 北方の天に立ち給ふは、**牛女危室**、**虛辰星**、**南天には翼轸鬼柳**、**井張星**、**西方には奎婁胃畢**、**太白星**、**東方の天に顯はれ給ふ**

たとの意。和漢朗詠集、秋部、菊「露蓬老賢三分白、露菊新花一半黄」。

**廬山の雨の世捨人 助給一人前に心細き鐘の聲、廬山の雨の世捨人、捨てて捨つてぬ面影は** (卯月潤色)

白居易が廬山の草庵に住んで雨の夜物淋しう感じた故事を、山寺に雨降つて物淋しう出家の身に引いて云うたのである。和漢朗詠集、白居易の詩に、「關省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」。根林子作弘徽殿編羽産家に、「關省の花の時ともに交せし盃も、廬山の雨とふる涙」と見えてゐる。「關省の花の時云々」を見よ。

は、**心尾、房、熒惑星、北辰、南極、七曜、破軍星、破軍星** (唐船嶺)

淮南子天官書に據れば、五星は木星(歲星)、火星(熒惑星)、土星(鎮星)、金星(太白星)、水星(辰星)をいふ。辰星は北方水徳の精を乗り、二十八宿中の斗、牛、女、虚、危、室、驥の七星を主る。熒惑星は南方火徳の精を乗り、二十八宿中の翼、轸、鬼、柳、井、張、畢の七星を主る。太白星は西方金徳の精を乗り、二十八宿中の奎、婁、胃、畢、昂、畢、參の七星を主る。歲星は東方木徳の精を乗り、二十八宿中の心、尾、辰、房、角、亢、箕の七星を主る。また七曜は日、月、五星を

いひ、九曜は七曜に計都星、羅漢星を加へていひ、破軍星は北斗七星であつて、魁の状をなすによつていふ。

**小智は大道の妨げ** (關八州)

淮南子に、「小快害義、小慧害道、小辯害治」。説苑に、「小快害義、小惠害道」。

**人間萬事塞翁が馬** (雲女)

人間的福禍は定め難きをいふ故事である。淮南子人間訓に、「夫禍福之轉相生、其變難見也、近三塞上之人有善術者、馬無故亡而入人胡、人皆吊之、其父曰、此何知、遽不爲福乎、居數月其馬將胡破馬而歸、人皆賀之、其父曰、此何知、遽不爲禍乎、家富良馬、其子駑、墮而折其髀、人皆吊之、其父曰、此何知、遽不爲福乎、居一年故人大入塞、丁壯者引強而戰、近塞之人死者十九、此獨以、敵之故父子相保、故禍之轉禍之爲福、化不可測、深不可測也」。

## 圓機活法に據れるもの

**ちやうくわ** 唐土の張華が名劍を得たる例、疑もなくこの邊に天下の重寶となるべき名劍埋れあるに極つたり(嶺山遊)

〔張華〕圓機活法、卷十六、器用門、劍の條に「張華曰斗牛之間常有紫氣、張華問雷煥、煥曰寶劍之精、上徹於天耳、華即補煥爲豐城令、煥掘獄扉得二石函、中有寶劍二、

**墨子が白絲** 止めても押へても聞入なければ詮方なき、染めてかへらぬ墨子が白絲、もつれの末こそうたてけれ(關八州)

墨子名は翟、白絲を見て染めやうによつては黃絲にもなり黒絲にもなる、その本が同じうして末の異なるを謂ひ泣いたといふ。淮南子、説林訓に、「墨子見練絲而泣之、爲其可染以黃可染以黒也」。

**養由が矢に啼く猿** (三國志)

淮南子説山訓に、「楚王有白猿、王自射之、則擲矢而啼、使養由基射之、始調弓矯矢、未發而猿啼、注號突、有先中者也。王者は愛を以て政を私せずとかや(虎が懸)

淮南子主術訓に、「人主之於用法無私好憎」。

並刺題、一日謂泉、一日謂太阿、是斗牛間氣不復見焉、煥以南昌西山下土、以試之、光芒耀發、遺使送一與華、留一自佩、**蝶の翅の白粉を草に翻して梢には、鶴の霜毛を脱ぎかくる** (最明寺殿)

雪を蝶の粉翅及び鶴の羽毛に見立てて面白くいうたのである。圓機活法、天文門、雪部、石曼卿の詩に、「蝶翅粉翼輕翻拾、鶴雪霜



毛散未博。東林子のこの文は、雨水漫遊に  
置元法皇敬感ましまし、かかる才智を以て和  
歌を詠じなば秀逸多ありぬべし」と實はせ  
給うた由を記し、また神澤其嗣も評して、「老  
杜が對句をも懸すべし」と、いろいろといふ有  
名な文である。

### 雜(其の他の諸書)

\*あきのあふぎ その黒髪に移り香  
も、何故我にあきの扇と捨てられ  
て(女夫道)

「秋の扇秋に飽をかけたのである。秋の候  
となれば、扇は不用となるときに、寵愛の衰  
へたことに喩ふ。斑鳩灯が扇の時に、「新製  
齊純紫、彼深如霜雪、裁爲合歡扇、團圓似  
明月、出入君懷袖、搖動微風發、常恐秋節至、  
涼風暴炎熱、葉三凋旋節中、且情中遠隔。」  
情風暴炎熱、葉三凋旋節中、且情中遠隔。  
情風暴炎熱、葉三凋旋節中、且情中遠隔。

性物を見ても心に響けぬときは、性物却つて  
消滅す。夷堅志に、「養七以養母緒」爲業、  
有客宿其家、聞緒爲人言、客以説レ七、七  
不聽、謂レ性不性、其性自變。「徒然草」古  
酒酒簿(第一)にも、「あやしみを覚えてあやし  
まざれば、あやしみかへつてやぶる」と書いて  
ある。

蟻の穴から堤も崩れる(舟波與作)  
小事終に大事を起すに喩ふ。難非子に、「千丈

離離たる馬目、連連たる雁行(國性齋)  
基石が盤上に離れ離れに三角形をなして散布  
し、またはすかに續けられるをいふ。國性活法、  
馬鹿の團旗賦に、「離離馬目、連連雁行、踰度  
間置、徘徊中央。」

之堤以離離之穴潰。  
五十年の榮華 いそぢの榮華一夜の  
酒の、夢もよき邯鄲屋にこそ入り  
にけれ(扇八景)

邯鄲の夢の故事である。「邯鄲の夢」を見よ。  
加増曾我に、「いそぢの床の樂しみも、覺めて  
の後の悔しきは」とあるも、邯鄲の夢の故事  
によつたのである。

一犬吠ゆれば、萬犬の聲しきり  
に(并簡)  
朝野叢載に、「一犬吠形、千犬吠聲。」  
絲を引いて文字を導き、野馬臺とや  
ら入唐土の書に、絲を引いて文字  
を導き日本の譽をあらはし、蜘蛛  
かかつて悅來るといふ本文もあり  
と聞く(開八州)

野馬臺序文に、「中古聖武皇帝朝、吉備公入  
唐、唐人以其本國之議、出野馬臺詩、使之  
讀、爲試其知力、文字交錯平直不書之、

非三神助則不可讀之、於是吉備公默然新  
佛天乃本國之神祇、俄而有蜘蛛、墮其紙上、  
漸歩曳絲、遂認其跡、讀之、不謬二字、  
唐人稱美之」。野馬臺之記に、「殊公(吉備  
公)平常信長寺觀音、時觀音垂大悲、分身  
化三現蜘蛛、救彼命、即明日於殿上被授  
此書、文字紛亂、理全難知、意既惱怒、時有  
一蜘蛛、來落東字上、引絲依行跡、讀影忽  
然開明也、故不殺却無相違、歸朝君致三  
榮、民救三命、從爾已來於本朝、以蜘蛛  
爲善瑞矣」。野馬臺を見よ。

免死すれば狐の心を悲しむ(會稽山)  
同類の者に狐の及ぶであらうと思つて悲しむ  
のである。通俗編に、「免死狐悲」  
牛に汗す 萬卷の文車牛に汗して  
蕪かし(用明天皇) 牛に汗する金  
銀(國性齋後日)

蕪書の多きをいひ、また物の多きをいふ。柳  
文の陸文通蕪書表に、「其爲蕪、處則充蕪、  
出則汗牛馬」。

葉公龍を好んで云云  
「葉公謂を好んで云云を見よ。  
風は虎の嘯くに從ひ、雲は龍の昇る  
に廻る(釋迦)  
古鏡府に、「虎嘯谷風起、龍興景雲浮」。淮南  
子に、「虎嘯而谷風至、龍靜而景雲覆」。

金にして數は九つ 柏子木の調子金  
にして數は九つ、らうやう金冠

木火尅金、自滅の相現はれた  
り(碧落太平記)  
拍子木の音樂天に返えて響き渡るを以て金聲  
ありとし、これを金と占うたのである。その  
打つ音は九つ、九は陽の數である。「らうや  
う金冠木云云」を見よ。

かべをうがつ 螢を聚め雪を積み、  
壁を穿ちし古も(國性齋後日)  
「螢を穿つ」前漢の匡衡家貧、油を買ふこ  
とができぬので、壁を穿つて隣家の燈光を引  
とて苦學したと云ふ故事。西京雜記に、「匡衡  
幼學無燭、鄰舍有燭而不避、衡乃穿壁  
引其光而讀之云云」。

釜の鳴る聲、薪のさつしよ、豆腐の  
ぐつ煮、其のばらばら(百合老)  
「釜の鳴る聲」は、捨芥抄卷上、釜鳴性部に  
「子日愁暮、五日愁暈、寅日官事凶、卯日家喪  
事、辰日家亡、巳日中吉來、午日鬼神來、未  
日口舌牽、申日同上、酉日同上、戌日大凶、  
亥日小吉」とあつて、釜の鳴る日によつて兆  
かはれども大かたは凶事である。  
近松のこの文は、「釜の鳴る聲」の縁から、薪の  
さつしよとらひつづけたのである。「さつしよ」は  
殺傷の約説であらう。そして更に「豆腐の  
ぐつ煮」ぐつと煮立てて煮入ること、其  
のばらばらと説明して、世説新語文學篇に  
ある東阿玉(即ち曹娥)七步之詩、「煮豆持作  
羹、漉豉以爲汁、其在釜下燃、豆在釜中  
泣、云云」に據つてかくいらしたのであらう。

特の文字を四季に書きわけ(扇八景)  
爾雅に、「春蟻爲莫、夏蟻爲負、秋蟻爲彌  
冬蟻爲狩」。

かんたんのまくら 一丈餘の四面の大石、根からむ鳶の唐錦、邯鄲の枕邯鄲の枕と、寝るより早く高軒(隅田川)

\*かんたんのゆめ 金銀降らす邯鄲の、夢の間の榮耀なり(冥途飛脚)

漢の武帝の時昆明池といふ池に朝夕魚を釣る人あり、或る時鯉を釣り得しに絲切れて魚は波に入り、命を免れ去つたれども針や鱗に礙りけん、武帝の夢に一人の老翁我が咽に釣鈎あり、苦しむ事堪へ難し取つてたべと歎きしかば、帝手づから針を取り苦しみを助け給ひしに、珠一雙を奉り我昆明池に住む者なり、君が寶祚を守らんと其の儘鯉の形となり、去ると夢見し枕の上夜光の珠のありありたり(隅田川)

長明池は支那南方にある池。太平廣記卷百十八に「昆明池、漢武帝鑿之、習水戰、中有」

靈沼神池云、魏時洪水、停船此池、池通于白鹿原、人釣魚於原、鱗鮓而去、魚夢於武帝、求去其鱗、明日帝遊戲於池、見大魚傍案曰、豈非昨所夢乎、取魚去鈎而放之、帝後得明珠。

かんりんぼくばう 濱の平沙は忽にかんりんぼくばうの衝となり(國性流後日)

〔雲林北邙〕北邙は洛陽の北にある、故に北邙と云ひ、漢以來墳墓の地である。「雲林北邙の衝」とは、隈懐たる墓地の意。馬存の岳王墓の詩に「蠶織劉日叫雲林、可捨一片西湖土。沈佺期の北邙の詩に、「北邙山上列墳墓、萬古千秋對洛城。」

歸雁列を亂るなる、隠し勢と心得(女備)

寫治元年九月義家金羅梅を攻めた時、適に雁行の亂れるを見て伏兵あるを知り、兵士をして、擊つを俟はせしめたり果して伏兵が居たので、擊つて之を殲したといふ故事を應用したのである。孫子「行軍篇」に「鳥起者伏也。」

きよいう 斯様の時の用意の酒、許由が捨てた瓢箪も、我等が爲の夜着蒲團と、腰に附けたる水呑(川中魚)

〔許由〕支那上古の隱者である。高士傳に「許由隱箕山、以手捧水飲之、人遺一瓢、得以取飲、飲訖掛樹上、風吹塵落作響、向以爲煩、遂去之。」

金冠木

「らうやう金冠木云」を見よ。

錦上花を敷く 紅錦繡の山、黄纈纈の林、錦上に花を敷くとばかやうの事をや申しつらん(権符)

美しい上に美しさを添へること。王安石の即事詩に「麗陽仍添錦上花。」

國に弓箭動き兵亂のしるしには、陰陽の氣まづ亂れて草木に金銀の異形の花咲くと、鶴林玉露に見えたり(蛙合駢)

鶴林玉露「人集卷之四に「宋開禧兵興之先、江西草木秋冬生花、有山變而生龜子花、桃樹而生李實者、村落鐵釜生金花或神佛感、此天地之氣先亂也。」

\*くものおび 伊達の郡の峯の松、後に見なせばこれもまた、後結びの雲の帯、しやんと締めたふ關の戸(源義經)

〔雲帯〕白雲帯に似て山の腰を圍むことをいふ。後中書王「文藻」の詩句に、「白雲似帶圍山腰」。巢林子が他の所に「山は夕の雲の帯、腰の廻りを御用心」と書いてあるのも、後中書王のこの詩句を碎いたのである。

蜘蛛の昔は柳の葉 逆巻き落つる山川に、絲もて引くやささがにの、蜘蛛の昔は柳の葉、蘆は陸地を行く如く(聖徳太子)

地を行く如く」といへるも、蓬磨が蘆葉に乗つたといふ故事を轉用したものである。

げんたんの法 虚空に向つて大玄谷神の咒を唱へげんたんの法を行ひしが(用明天皇)

〔還丹之法〕還丹は仙藥で、還丹之法は仙術で即ち外道の法である。抱朴子内篇卷之一「金丹の條に「余考三寶養性之術、鳩集久視之方、曾所披涉、篇卷以千計矣、莫不皆以還丹金液爲大要者焉、然則此二事蓋得道之極也、即此而不悟則古來無悟矣。」

こうい 海中に鱧鮪といふ毒魚あり、味の甘きこと西施乳とて美女の乳房に譬へながら、其肝腹中に入つて人を害す事博物志に記せり、背青く腹白く無鱗にして見憎しとあり、我が朝の河豚なるべし(松風)

〔鱧鮪〕河豚。劉逢の吳郡賦注に「鱧鮪魚狀如科斗、大者尺餘、腹下白背青黑、有毒文、性有毒、……煮炙饒之肥美。」辭源に「鱧鮪、河豚之屬、腹部尤膨大、亦有毒。」西施

乳は、事文類聚後集、河豚をいへる文に「吳人珍之、目其腹狀爲西施乳」と見え、また養ひ草(元祿二年刊)卷二下に「河豚魚とは世に云ふごとくといひて、人の命にかへて好み獲ある魚なり、物の異名ある内に此魚を西施乳と名付く、西施はかくれなき美人の聞えありといへども國家を傾亂をなせるものなれば、味よけれども毒あるに譬喩たり」と見え、(序云、近松はこの文に「博物志に記せり」といひてみれば、現今流布せる晋張華の博物志には鯀鯀のこの記事見當らざり)と云うてみれば、

**紅葉の稀に逢ふ瀬** 斬られても猶身を引かぬ最期の身振り、橋はさながら紅葉の、稀に逢ふ瀬の敵と敵(鑑釋三)

血染めを紅葉といひなし、稀に逢ふ瀬といひつづけて、紅葉の媒の故事を引用してかくいうたのである。太平廣記に、唐の祖氣の時、于祐御講の下に遊んで紅葉に詩を誦けるを拾ふ、其時に流水何其急、深宮盡日閑、慶勳勳紅葉、好去之到人間、とあつたので、于祐他の紅葉、曾聞葉上題紅葉、葉上題詩寄阿誰、と題してこれを御講の水上に流す、官女韓夫人之を拾ひ、後に夫婦となつた時、韓夫人詩を作つて、一聯佳句隨流水、十載幽思滿翠微、今日卻成鸞鳳友、方知紅葉是良媒、といふたことが見えである。

**吳道子が繪主の僧を惱ませし**(關八州) 吳道玄、字を道字と云ひ、唐時代陽翟の人、丹青の妙を窮め、畫聖と稱せられた。吳道子畫て僧を訪りた時、僧が無愛想であつたので、吳道子壁に壁を畫いたら、其壁夜裏れて僧房の家具を踏み砕き、僧を惱ませたといふ。盧

氏雜説に「吳道子嘗訪僧、僧不禮、遂於壁上畫一頭、一夜僧房家具悉踏破、惱亂不堪、僧知是道玄之惡、遂却畫、乃已」  
**水に臥して魚を得** 二十四孝の陸績が橋を袖に入れ、水に臥して魚を得しも、そればかりな孝行として異國本朝譽めばせぬ(扇八景) 王祥の故事である。王祥は字を林微といひ、晋時代瑯琊臨沂の人で至孝である。冬日母病んで生魚を欲した。祥乃ち水結せる川上に臥し、その體温で水解け、雙鯉躍出たのを獲て母に與へたといふ。世説新語補に「王祥事後母夫人甚謹」とあつて、註に「方三盛寒冰凍、母欲生魚、祥解衣、將臥冰求之、會有堅冰小解、魚出」。

**小湊口の梅林に舟を乗り捨て** 東寧鳥へ押奇する、數萬の軍兵小湊口の梅林に舟を乗り捨て(國性鑑後日) 東寧島といふので、寧瀾湖明集卷五、桃花源記に「忽逢桃花源夾岸、數百步中無雜樹、芳華鮮美、萬英繽紛、漁人甚異之、復前行欲窮其林、林盡水源得一小山、山有小溪、髣髴若杳林、便捨船從口入」とあるを引用したのである。

**子を持つて知る父母の恩**(嵯峨天皇) 明心寶鑑養行篇に「養子方知父母恩。徒盡不知年」。

然草に「孝養の心なきものも、子を持つてこそ潮の志は思ひ知るなれ」。

**昆吾溪の寶劍** 昆吾溪の寶劍は人々照すこと水を照すが如しとかや(松風) 昆吾は西方戎の國で安定山谷の間にある地で、切玉といふ寶劍を產出した。黃帝故事に「周禮王有昆吾劍、劍如錫也泥」。

**さうこうが淵を求めし父の骸**(井筒) 人である女である、寶劍をいふ、東漢上虞の人で至孝の十四歳、江を眺めて號哭して屍を得ず、時に孝女陳、江を眺めて號哭すること旬有七日、遂に江に投じて死んだが、五日を経て父の尸を抱いて出たといふ。會稽典錄、曹娥傳文に「孝女曹娥者、上虞曹野之女也、其先與周同祖、末曹荒流、愛慕適居、野能撫節按歌、婆娑樂神、以漢安二年五月、時迎二伍者、逆瀆而上、爲三水所淹、不得其尸、時年十四、號慕思野、哀吟踴舞、旬有七日、遂自投江死、經五日抱父尸出云云」。「往事渺茫として夢に似たり云云」をみよ。

**逆様に開き扇を見るやう** 富士の面影は、...、水に映れば逆様に開き扇を見るやうに(國志) 石川丈山の富士山の詩句に、「白扇倒懸東海天」とあると同巧である。

**驚はたいさいの方をよけて嵐をひらき**(加増僧徒) 大歳は陰陽家にて祭る八將神の一である。藤林問答集上巻に「感例云、大歳者歳星之精、降天地之間、觀察萬物、臨見八方、故名」

歳之君、慎之者保、逆之者亡、巡行於十二支也、子歳在正北、丑歳在正丑、餘方皆爾、十有二年運終而復始、其方主歳、故爲二年之君こ見え、假名羅略註に「大歳神とは本年の大歳にして、年中諸事の善惡を司る神なるゆゑに歳之君といふ、此方に向て木竹を伐らず、井家作、修造・土を動し、家移其外百事に是を犯し用ゆべからず」とあるから、驚もそのことわけて知つて、大歳の方をよけて果をひらくと云うたのであらうか、さりとて餘りにこじつけた氣がする。按ずるに驚は、驚の思違ひであらう。博物志卷四に、「鶴巢門戸背大歳、得非才智也」と見え、西陽雜俎卷十六に、「鶴巢背大歳、無伏、巳」と見え、つゝある。

**三元三行三妙加持**(日本武尊) 佛經の語を假りた道家の變形咒であつて、道家天地水を以て三元となす、三行三妙加持は佛語であらうと思はれるが、出所など詳でない。

**さんせう** 雪嚙み砕く白泡に、さんせうよしや尾は青柳のしつたりたり(鑑釋三) 「三焦」漢方に大腑の一、水分の排泄をつかさどるといふ。「三焦善」とは、馬の口角の色善きといふ、即ち口角の鮮明光潤桃色を呈し、強健なるをいふ。明馬師訓編馬經大全、香集、帝問馬師皇鮮明光潤如桃色善平也...凡口中之色鮮明光潤如桃色善平也...と見えである。果林子のこの文に、「尾は青柳のしつたりたり」とあるも、尾は青柳のやうに垂り垂りを「しつたりたり」にいひかけたので、馬經大全、香集、相馬寶金歌に、

大歳は陰陽家にて祭る八將神の一である。藤林問答集上巻に「感例云、大歳者歳星之精、降天地之間、觀察萬物、臨見八方、故名」

「尾似流星、須教御」とあつて、良馬の相である。

周書に曰く、國を治むるに三常あり(最明寺殿)

佩文韻府に、「三常。(波家周書)國有三常」。周書にこの文見當らない。なほ考ふべきである。

周の穆王法の爲八匹の龍馬に乗じ萬里を剎那に至る(百日曾伏)

「龍馬は駿馬のこと。「剎那」は瞬間の其際である。「せつな」を見よ。祖庭事紀に「王子年拾遺記曰、周穆王即位三十二年巡行天下、取二十八龍之駿、一名絕地、足不踐土、二名翻羽、行越飛禽、三名奔霄、夜行萬里、四名超影、逐日而行、五名躡景、毛色炳耀、六名超光、一形十影、七名躡影、乘雲霧、八名扶翼、身有肉翅、徧而駕之」。

頻に蔽く月下の門(天神記)

湘素雜記、賈島の詩に、「烏宿迢遶邊、偷敲月下門」。

嫉妬深きは三去の一つ、娶ること勿れといふ本文あり(松風)

小學・明倫に「婦有七去、不順父母去、無子去、淫去、妬去、有惡疾去、多言去、竊盜去」とあつて、高僧の義註に「妬則亂家、……故除去之」と見えたる。三去は七去の中の重きを數へたのであらう。異本に三去を三去としたがある。

死は輕くして易し、生は重くして難し(出世景清)

近思錄卷十に「伊川先生曰、感既殺、身容易、從容就義者難」。

千萬貫を腰に附け千歳の鶴に乗り揚州の都に楽しむ(關八州)

一人にて多くの快樂を享けるを云ふ。事類全書に、「有客相從各言所志、或願騎鶴上揚州、刺史、或願多資財、或願騎鶴上揚州、其一入曰、腰纏十萬貫、騎鶴上揚州、欲兼三者」。

笙歌遙に聞ゆ狐雲の上、聖衆來迎す落日の前(三世相)

念佛者が命終の時には紫雲たなびき異香薫じ、笙歌の音聲虚空に聞え、佛菩薩だち淨土へ迎へる爲に降下し給ふとの意であつて、極樂往生の狀をいうたものである。大江定基入道寂照法師の詩に「笙歌遙聞狐雲上、聖衆來迎落日前」。この詩は謠曲實感、及靈願寺にも引かれてゐる。

商山の秋の夕は芝蘭を刈る(國性爺)

商山の四皓(その條を見よ)が採芝の歌「漢漢高山、深谷逢蓬、嗚嗚芝、可採以療饑」を歌うた故事によつてかく云うた。

順の字に變の義あり、あの順の字に變の義あり(國性爺後日)

康熙字典・變の字の條に、變、古文形と見えたる。順と形と字相相似である。そして近松はこの横きの文に分解して説明した。

蜀山の日を迎へ、唐大和犬數千疋、蜀山の日を迎へ、梢に吹ゆる聲喧く(千疋犬)

「蜀犬曰に吠ゆ」と云ふ故事によつて、犬のである。蜀は山國なれば常に霧深く、日を見ること稀なるによつて、犬が日を見れば怪んで吠える」と云ふ。韋退之の文に「蜀中山高霧重、見日時少、黑に至日、則群犬疑而吠之也」。

白雲却つて黒し、理を付けて云ふならば、白雲却つて黒しとも云ふ義あり(國性爺)

公孫孫一家の賢白同異の論辯に據つてかくいうたのである。唐の尉遲樞の詩に、「夜夜月爲青鏡、年年雪作黑山花」と云ひ、俳諧の句に、「く見れば雪は黒き物はなし」といへるも、白雲を黒いひあしらふに興をもたさうとしたものである。

銀に買あるが如くなり(冥途飛脚)

魯褒の鏡神論に「無量而飛、無足而足」。

しんしん 孔雀鳳凰しんしが鶴、松と竹とに舞ひ遊べ(松風)

「晋子」周の纘王の太子であつて、白鶴に乗つた人である。列仙傳に「周靈王太子晋、七月七日乘白鶴駐山嶺、謝時人而飛升」。

しんしん 南方には蝮蛇養素として人を呑む(井筒)

「養素」群り集る貌。楚辭に「蝮蛇養素」。じんせいぎうばふういましんぬするりのあわしんせいともにてんにきす(天智天皇)

山本九兵衛版七行本に「じんせいぎうばふういましんぬするりのあはしんせいともにてんにきす」と見えたる。蓋し「人生牛馬風、今知水裏泡、麗華俱歸天」といふ辭世の文であらう。「牛馬風」とは、左傳「僖公四年の條の杜預の註に「牛馬風過、蓋未界之微事」とあるからこれを取つたのであらう。人世は蓋し未界の微事と、これまではさうも思はなかつたが今に及んでそのはかない事柄も水裡の泡の如きであるを知つた。それ泡はふるへ動いたり或は靜に保つたりしてゐるも、それも暫時の間でやがて天空に向つてぱつと散つて消去する。人生も亦その如しであるとの意であらう。

秦の始皇の御顔に巫山の神女が吐きかけし唾のはなの徒心(弘徽)

水經注に「麗山西北有温水、俗云始皇爲神女所唾生瘡、始皇謝之、神女爲出温水、後人因以澆洗瘡」と見えたる。

秦王武周を討つて破陣樂を作り、國七徳に化せしとかや(本領曾伏)

唐書禮樂志に「七徳(云々)七徳舞」者本名破陣樂、太宗爲秦王、破劉武周、軍中相作樂曲、及即位宴會必奏之、七徳者蓋取禁暴、戢兵、保大、定功、安民、和、衆、豐財之義也。「破陣樂」はその様を見よ。

雀の角、鼠の牙の禍(室町千草歌)

婁雅に「雀物之淫者、鼠物之貪者、故詩言、雀角鼠牙以警惡類」。この文は、些少な禍害に喰へていうたのである。

青帝、初春の神姿、青帝と號して東方の天に立ち給ふ(天神記)

春の神、尙書釋詁に「春爲青帝、又爲青帝」。なほ天神記のこれに換へる文に「禮記は炎帝……祝融神とこれを撰し」とあるは、禮記月令篇に「季夏之月……其帝炎帝、其神祝融」と見え、また「秋は少暉西天の神」とあるは、禮記月令篇に「孟秋之月……其日庚辛、其帝

五五五

少婦」と見え、少婦は金天氏、金徳の王である。また「冬」の神は……支那神と申すとかや」とあるは、和漢三才圖會・時侯類に「冬」立

精衛海を填めし例もあり(佐佐木) 精衛は小鳥の名である、西山の木石を取つて東海を填めたと云ふ。山海經に「發鳩之山有石焉、曰精衛、是炎帝之女、往遊于東海、溺而不反、是故精衛常取西山之木石、以填東海」。

せうらん 陰陽の頭晴明、唐土の紹爾夫婦が中立の昔を引き、紙を以て燕を作り秘文を封じ放せば(弘徽殿)

〔紹爾〕郭紹爾は唐時代長安の人で、任宗の妻である。任宗商用にて湘に行き、歸らないこと数年何の音信もなかつた。或日紹爾雙燕の梁上に戯れるを見て之に憂悶を語り、詩を畫して其足に繫いだ。燕飛鳴して去り任宗の所に至つた。任宗妻の書を讀んで感泣し、家に歸來つたと云ふ。天寶遺事に「郭紹爾、長安郭紹爾、任宗、宗室、湘中、數年、音問不達、紹爾語、梁間雙燕、欲、憑寄、書於、燕、子、遂、飛、泊、梁、上、關、帝、詩、曰、我、掃、去、重、湖、應、隨、血、泣、書、殷、勤、憑、燕、翼、寄、與、薄、情、夫、宗、待、詩、感、泣、而、歸、張、說、傳、其、事」。

葉公龍を好んで翬を刻めども、眞の天龍を見て翬を失ふ、これ龍を好むにあらざり、龍に似て龍にあらざるものを好むといはん(川中島)

劉向新序卷五に「葉公子高好龍、鑄以寫龍、鑿以寫龍、屋室雕文以寫龍、於是夫龍聞而

下之、頓頭於牖、搖尾於堂、葉公見之葉而逃走、失其魂魄、五色無主、是葉公非好龍也、好之似龍而非龍者也云云。

仙家の日月本長閑なり、臘を送り春を逐ふ豈又然らんや、聖皇自ら長生殿にましますば、蓬萊王母が家になんなんたらず(松風村雨東帶鑑)

仙人の居殿は日月とも長閑であつて變じることなければ、從つて俗家のやうに臘月(除臘十二月)を送り春月を迎へるやうなことは無い。英明な今上皇帝は長生殿と申す壽命長久を祝つて名付けた宮殿にましますことであるから、何も蓬萊山に西王母が家を訪つて不老不死を願ふを要しないとの意であつて、今上帝の徳をほめた詩である。唐の楊銜が詩に「仙家日月本長閑、送臘蓬萊豈又然、聖皇自在長生殿、不向蓬萊王母家」。

たいあ 秦に太阿上市あつて六國を合す(堀山遊)

〔太阿〕支那古代の名刀の名である。越絶書に「楚王召風胡子、令之三試、越見、吹治子干、使三之爲劍、劍三枚、一曰龍泉、二曰太阿、三曰太市」と見え、また同書に「太阿、其色如秋水」と見えである。「太阿」は地名とあり附いた名であるべく思はれるれども、禹城土士何れの處にも太阿といふ地名が見當らない。よつて按じると、太阿は或は大冶を誤り傳へたものではあるまいか。大冶鐵山は東洋屈指の鐵山で、現今我國の八幡製鐵所も大冶鐵廠に實ふ所が頗る大なのである。

唐土人の孝行(扇八景)

珠ある淵は岸破れず、龍種む池は水濁れず(國性齋)

大觀禮、動輒編に「玉居山而木潤、淵生珠而岸不枯、雖詩外傳卷五に「水淵深廣、則龍魚生之」。この文は、日本は珠淵龍池の國であるとほめたのである。

不老門の内に日も傾かず(女夫池)

法眼が藥飲たせ來て(冷泉節)

長生殿は唐の官殿の名、不老門は唐の官殿の門の名で、共に長久を祝つた名である。津國女夫池のこの文は、瀛海保胤の天子萬年の詩に「長生殿裏暮秋涼、不老門前日月長」とあるを國譯したのである。源氏冷泉節のこの文は、病者を治療する法眼の宅をいふに長生殿不老門の語を借り、やがて急轉してそれが毒を盛らねばならぬ伏線である。

仲尼は秋水を受けて衛の國を去り給ふ(靈女)

仲尼は孔子の字である、孔子家語に「顔氏稱之於尼丘、而孔子生、故字曰仲尼」。衛は支那春秋時代の國名で、今の直隸省黃大名府開州から以西河南省の衛輝、懷慶に至るまで衛の地であつた。孔子が衛に行つた第一回は、魯かされて十ヶ月で去り、第二回は南子の要求に應じて拜謁をし、車の次乘といふので、「吾未見好、德如好、色者也」と歌じて去り、第三回はに論語、衛靈公篇に「衛靈公問陳於孔子、孔子對曰、桓魋之事則吾聞之矣、軍旅之事未之學也、明日遂行」とあつて、仲尼が水の流水を貰つて衛國を去つたとは書いて

ないが、蓋し失意落魄の有様をかくいらたのである。

中流に舟を失へば一瓢も千金なるとかや(吉野忠信)

瓢は價安の物なれども中流に離船する時は瓢によつて身を浮べ、人命を濟ふことができ、故に瓢も千金に價する。鵜冠子、鵜問篇に「中流失船、一鵜千金」とありて宋陸佃解に、「鵜、瓢也、佩之可以濟涉、兩人謂之鵜舟也」。

盡くことなき身の内の寶の玉大磁冠)

實語教に「風中財有朽、身中財無朽」

繁大柱を廻るに異ならず(弘徽殿)

繁手教に「願惡人少避、樞大如廻柱」

燕はつちのえつちのにと巢をくひ始む(加増曾我)

「巢をく」とは巢を營むをいふ。抱朴子内篇卷之二、至理の條に「燕知戊巳、而未必遷於他事」。北齊書齊書、施國日記卷之二、燕巢の條に「抱朴子云、燕知戊巳者、其日巢をくりてむるにや」。驚はたじましいの方云云。をも見よ。

表於外、是以行必依洲渚一止、不集林木、  
……百六十年雖相親、自爾不轉而孕、千六  
百年飲而不食、胎化產、鸞鳳同爲羣、聖人  
在位、則興鸞鳳、翔於句、云云。

天は文人の才の盡きん事を恐れ  
て、常に零落して蓬生に居らし  
む、(千正犬)

天は文人の才を振はしめる爲に困窮の地位に  
居しめて自ら力めしめるとの意、三輔決錄  
註に「張中蔚扶風人也、少與同郡魏景卿  
身不在、所居蓬蒿波人」(魏遠之の柳子  
厚嘉誌銘に、「子厚斥不久、窮不極、雖有  
出於人、其文辭章必不能自力以致、必  
俾於後、如今無不難也」とも見えてゐる)

東北海の聖人此心と同じうし此理  
を同じうす、南北海の聖人も亦同  
じ(用明天皇)

宋史、陸子靜(論は九淵)の書に、「又嘗曰、東  
海有聖人出焉、此心同也、此理同也、至西  
海爾北海、有聖人出、亦莫不然。」

どかい三尺はうしきらず、げに古の  
木の丸殿をなぞらへて、どか  
い三尺ばうしきらずと聞えし  
を(鳥帽子折)

「土塔三尺孝茨不期塔は階である。土の階  
段の高き僅に三尺、孝茨を以て屋を覆ひたる  
に、官殿の極めて質素なる心いふ。編子に  
「孝茨高三尺、土塔三等、孝茨不期、采葭  
不刊。」

飛ぶ鳥懐に入る時は狩人も助くる  
とよ(出世景清)

雜

窮鳥懐に入る時は獵夫も憐んで捕へないやう  
に、人困窮に來つて倚る時はこれを助けるに  
喩ふ。顏氏家訓に「窮鳥入懐、仁人所憫」  
南浦の雲 杖を南浦の雲に片敷  
き、……、衣を西山の雨に濕  
し(持統天皇)

ここの文に南浦の雲といひ、西山の雨といへ  
るは、王勃の滕王閣詩に「畫棟朝飛南浦雲、  
珠簾暮捲西山雨」とある句に據つたのであ  
らう。

人間の私語天の聞くこと雷の如く、  
暗室の虧心神の見ること電の如  
し(大維冠)

本朝佳話(正徳五年刊)卷二、かくすことはあ  
らはるの條に「玄宗垂訓云、人間私語、天  
聞如雷、暗室虧心、神目如電」とあつて、  
明心寶鑑に見えてゐる文である。(序云、昔事  
動作、融大臣羅縷梨花の冒頌の文に、「人間  
の私語天の聞く事雷の如く、闇室の鬼神見  
ること電の如し」とあるはこの文を誤つたので  
ある。

\*ばうげんれい、唐土の房支齡は片  
日潰れし妻をだに、心にめでし情  
の淵、深き思ひに引替へて(翁玉母)

「房支齡字を喬孫と云ひ、唐太宗時代の賢相  
である。古閑範(卷二)「唐房支齡時疾殆危、  
謂妻盧氏曰、吾病率、君年少少可寡居、善  
事、後人、慮泣入、離別二目、以示、信、會支齡  
疾癒、未幾爲相、與盧氏相敬如賓、終身  
不棄」。

\*はうそ 彭祖が保つ七百歳(浦島)

「彭祖」帝師の臣で、彭城に封ぜられた。康  
夏の世を経て商の世に至り、年齡七百歳を起  
えたといふ。列仙傳に「彭祖證、帝額頰玄  
孫、至殷之末世、年已七百餘歲而不衰」。

ばうふざん 足を爪立てて伸上り、見  
送る影も遠ざかる、唐土の望夫  
山、我が朝の領巾磨山、今の我が  
身の我が思ひ、石ともなれ山と  
もなれ、動かじ去らじととき口説  
き(國性龜)

「望夫山」支那湖北省武昌の北方にある山。往  
昔貞婦がこの山に登つて夫の遠征の途に上る  
のを望み、深く別を惜んで遂に化して石となつ  
たといふ。幽明錄に「武昌北山上有望夫石、  
狀若人立、古傳云、昔有貞夫、其夫從役遠  
赴三國、携一弱子、饑寒、此山、立望夫而化  
爲三石、因以爲名焉」十訓抄第六、可存三  
忠臣廉直二事の條に「昔夫婦相思、住み  
けり、夫軍に北がひて送る、行くに、其妻小き  
子を具して武昌の山まで送る、夫の行くを見  
て悲し立立てり、夫還らずなりぬ、妻その子  
を養ひて立ちながら死ぬるに化して石となれ  
り、その姿人の子を養ひて立てるが如し、こ  
れに因りてこの山を望夫山と名づけ、其石を  
望夫石といへり」。

はつさい 凡人ならぬ公の人相、眉  
の八彩、目の重瞳、日に向つて瞬き  
せず(唐柏麴)

「八彩」支那上古の聖人堯帝の眉が八彩を有し  
てゐたといふ。よつて以て聖人の相にいふ。  
春秋元命包に「堯眉八彩、舜目重瞳」。

八歳より小學に入り云云  
は、生れて八歳より小學に入り云云)を見よ。  
蛤能く氣を吐いて樓臺をな  
す(國性龜)

童冠に「蛤一名蜃、能吐氣爲樓臺、ことある  
に據つたものである。即ち蜃氣樓のことであ  
つて、蓋し水蒸氣と光線的作用によつて海邊  
の景色の海上に映じ現はれるのを云うたもの  
である。この文に就いては種福以實撰雜  
波土産卷四に、「蚌、蛤、蜃、皆はまぐり、訓  
ず、蚌と蛤とは常のはまぐり也、蜃には二種  
あり、一種は大蛤也と注して一名を車螺とい  
ふ、これは貝の類なれども樓臺をなすもの  
にあらず、よく氣を吐て樓臺をなすといふ蜃  
は、はまぐりと訓じても其形に似て謂の大類  
なる物なり、本草綱目、其形地に似て類  
なり、角ありて謂の形、如し、紅の蜃あり、よ  
く氣を吐て樓臺城郭の形をなす、將に雨降  
んとして見ゆ、これを樓臺と名付け又海市と  
もいふと云り、又唐詩訓詁に注にも、蜃は蛟  
の頭に、氣を吐き樓臺人物の形、如しと云  
へり、然るを近松は蛤蚌のはまぐりと云へ  
るは麓末の至りにあらずと見えたる。

春に育つも花誘ふ、蝶は菜種の味知  
らず(露門松)

蝶は春陽に出てて菜種の花盛り頃に飛び交へ  
ど、菜種の實る時には既に死すればかくい  
うたのである。予讀の感事詩の起承二句に  
「花開蝶滿枝、花謝蝶還稀」とあるは似て別  
意である。

萬事無心なり一釣竿、三公にも換へ  
ず此江山(安夫也)

萬事無心なり一釣竿、三公にも換へ  
ず此江山(安夫也)

五五七

錦鏡段、觀復古の釣盤の時に、「萬事無心、釣竿、三公不換、此江山、平生恨、論劉文叔、惹起虛名、滿世間。」

顯顯川に口漱きしもかくやと思ひしらま月(大宛)

堯帝の世の隱士許由山中に隠れ、所持せるものとは一瓢のみで、これをもつて水を飲み畢れば腐枝に懸けてみたといふ。高士傳に「許由隱箕山、以手捧水飲之、人遺一瓢、得以取飲、飲訖掛樹上、風吹塵塵作聲、尚以爲煩遂去之。」また事文類聚、隱逸部に箕山の隱者許由は堯帝が己に國を讓らうとすることを知りて、耳の汚れとして穎川で耳を洗つたといふ。この文は元龜三郎高則が清貧の士であつたことは、恰も許由の如くであつたであらうと、思ひ知られるを白雲寺にひかけたのである。

人生れて八歳より小學に入り、十有五にして大學に至る古の法なり(用文章)

白虎通に、「八歳入小學、十五入大學。」船端に刻を付けて刀を尋ねる(用明天皇)

舊法を固守するの愚なるを云ふ故事。呂氏春秋に、「楚人有涉江者、其船自舟中、墜于水、遂刻其舟曰、是吾船所從墜也、舟亡從其所、刻處入水求之、舟已行矣、而劍不行、求之劍若此、不亦惑乎。」  
べんくわ 卞和が三度足切られ(重女五枚羽子板) 卞和が楚山に足切られ(大冠冠) 忠孝仁義の武士も、卞

和が壁の埋れてゐて光なきこそ是非なけれ(川中島)

〔卞和〕支那春秋戰國時代楚の卞和の人である。玉璞を楚山中に得て之を厲王に獻じた。然るにこれは玉でなく石だ、王を誑したものととして卞和の左足を削つた。武王の時下和とその難を獻じた。この時も石だとして和の右足を削つた。文王の世となつた時下和は璞を抱いて楚山の下で哭したといふ。韓非子十和篇に、「楚人卞和得玉璞楚山中、秦而獻之厲王、厲王使玉人相之、玉人曰石也、王以和爲誑、而削其左足、厲王薨武王即位、和又奏其璞、而獻之武王、武王使玉人相之、又曰石也、王又以和爲誑、而削其右足、武王薨文王即位、和乃抱其璞而哭於楚山之下、三日三夜、淚盡而繼之以血、王聞之使玉人問其故、和曰吾非悲別也、悲夫寶玉而題之以石、貞土而名之以誑、此吾所以悲也、乃使玉人理其璞、而得此玉焉、遂剖曰卞和之璧。」  
岷江の水上塵をうかぶるも、楚に入つて千尋の風波をまぐるとかや(三國志)

支那岷山から流れ出る岷江其源は岷をうかべる程のささやかなものなれども、楚に入つて渺漫たる揚子江となつてゐる。黃山谷の次韻答別敬夫詩句に、「岷江初濤、入楚乃無山、其源可家濤、三烈篇に、「江揚子始出、無山、其源可家濤、及其至江津、也不動、舟不避風、則不可一以涉。」  
明の金氏は女なれども猛虎を撲つて夫を助く(百日曾我)

明時代安東の人金氏は我が夫を擁み行く虎を撲つて、夫の命を助けたといふ。明黃希周等編「新續烈女傳」卷之下、國朝の部に、「安東金氏、金氏安東人、適散員俞天祥、洪武辛巳天祥徵行成、謂其妻曰、今日言、吾將出宿於外、其妻曰、吾亦出宿矣、遂入室裝、夜半忽有入驚呼聲、燭僕皆縮頸、金氏身出、虎已撲夫去、金把木杵、呼呼而前、左手執夫右手撲虎、繼至六十步許、虎委之而止、金曰爾既撲我夫、欲并取我耶、虎乃去、夫氣絕、金負而歸家、黎明夫甦、其夜復亦含靈之物、何苦是之甚乎、虎齧舍傍裂樹而去、樹乃枯。」

百戦勝つて百度勝つは善の善ならざるものといへり(川中島)

孫子謀攻篇に、「百戦百勝非善之善者也、不戦而屈人之兵善之善者也。」  
唐土春秋の會盟牛の血をすすつて金鐵の誓の法(開八州)

唐土の聖王は八人の王子をはぶき、賤しき土民の孝行に感じ大舜を擧げて四百餘州を譲り給ふ(純天皇)

「聖王」とは堯帝を云うたのである。堯帝が舜の孝行に感じ、賦歌の中から擧げて帝位を讓つた。孟子萬章上篇に「堯帝に九男二女あつたことが見えてあれど、呂氏春秋、去私篇には、「堯有子十人、不與其而授舜」と見え

唐土の紹爾夫婦が中立の昔を引き「せうらん」を見よ。

野に伏兵あれば歸雁つらを亂ると云へり(源經)

「歸雁つら」を亂るなる云云を見よ。  
夢路は六つ 夢路は六つに變れども、思は一つ魂の胸の鏡に映り来る(國性爺後日)

屈原が詞(浦島)

老翁は漢の武帝に玉の枝を得て七百歳汗せずとかや(西王母)

老陽金冠木火冠金 拍子木の調子金にして數は九つ、らうやう金冠木火冠金、自滅の相顯ばれた(甚經太平記)

九を「老陽」といふ。易疏に「老陽數九、老陰數六、老陰老陽皆變云云。」易學啓蒙に、「陽數至九而極、陰數至六而極、故云老也。」  
「冠冠木云云」は、敵と我とこれを相性の上か

ら觀察して五行相尅に配したのである。即ち木は土に尅ち、土は水に尅ち、水は火に尅ち、火は金に尅ち、金は木に尅つ。鹽谷高貞(實は淺は木工頭であつたら木と占ひ、野長矩(實は吉)の拍子木の數は九つ、調子高師直(實は良義央)の拍子木の數は九つ、調子は金聲に響くによつて老陽金と占ひ、四十七戰士は火事裝束なるによつてこれを火と占ひ、五行相尅によつて、金は木に尅ても然も火には尅つことができぬ。故に自波の相尅はれたと占うたのである。「金にして數は九つ」をも見よ。

らんのかち 入部の船の蘭の柁、故郷(歸る唐衣浦島)錦の纜蘭のかち、桂の櫂の船歌に(天神記)

りくせき 二十四孝の陸績が橘を袖に入れ(扇八景)

りようもん 龍のきざしの六六鱗、沸つて落つる水の勢、鱗をたいて龍門の瀧登りとも謂つべく(倉橋山) 龍門に跳る魚も時あれ

因果經

ば漁人の手に落つるとかや(大織冠) 龍門の黄河の上流にあるといふ。鯉などこれまで登れば化して龍となるといふ。三秦記に「江海魚集龍門下、登者化龍」書言故事に「水經、鯉出塞穴、三月上流龍門、得度爲龍、否則點額而還。」

呂洞賓が袖の中の青蛇を抛つて黃龍に乗せし(用明天皇)

六種の夢 周禮の占夢に六種の夢をあげて占ふ旨を記せしが(嵯台觀)

塵生が見し榮華の夢(最明寺殿)

王羲之の趙子昂が石に入り木に入る(反魂香)

と見えあへる。靈狼の石に入つた故事は思ひ當らないが、元の趙子昂が至大元年に書いた赤巖賦の石刻などは有名であるから、近松がこれ等のことによつてかゝうたのである。

別を天外に求むれば蜀山の雲終に隔り、魂を地下に尋ぬれば巴陵の水轉た流れて留らぬ(隔田川)

過去も未來も現世で知る(舟渡與作)

現在の果を見て過去未來を知るとかや(今川了俊)

過去も未來も現世で知る(舟渡與作) 過去現在因果經に、「欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因。」

因果經に據れるもの

つて水多き地。故にこれ等の地をいうて文飾としたりたのである。 夫を轟ひ石になつたる女もある(倉橋山) 蜀夫山の故事をさす。五五七頁を見よ。 蜀の王賢が仙人の暮を圍むを見ながら、さほどの時間でもないと思つてゐたに、携へてゐた斧の柄が朽ちた程長時間であつたといふ故事によつたのである。述異記に「晋王賢伐木至信安郡石室山見數童子圍碁與賢一物、如棘核含之不朽、局未終斧柯爛盡、既歸無復時人。」

さし微妙の御聲、天上天下唯我獨尊、無量の生死今に於て盡せりと(釋迦) 「獅子吼」佛の説法は恰も獅子王が咆吼して群獸恐怖する如き威勢あるとの意でいふ。釋尊出生の時周行七歩して止り、右手は天を指し左手は地を指して、我は一切天人の中で最尊最勝であると宣はれた。世にこれを天上天下唯我獨尊の獅子吼と云ふ。因果經一に、「菩薩即便墮蓮花上、無扶持者自行七歩、舉其右手而獅子吼、我於一切天人之中最尊最勝、無量生死於今盡矣、其生利益一切人天。」